早川英俊回想録　目次

幼時の思い出１ 女を産んで儲ける 現金収入魅力の農村 5

幼時の思い出２ 両親には心から感謝 先生と喧嘩した小学生 6

少年の頃１ 懐かしい故郷よさらば 日吉丸に負けまい決意 7

少年の頃２ 富士山の偉容に感銘 いよいよ東京へ第一歩 9

奉公１ 忘れられぬ寿司の味 奉公は井戸の水汲みから 10

奉公２ 板についた出前姿 「チワー」の掛声も勇ましく 12

奉公３ 車を曳き河岸へ買い出しに 今は鼻につく寿司の味 13

奉公４ 立ちん坊の押し賃を節約 焼き芋大福餅の買い食い 15

奉公５ 所変われば品変わる さっぱり分からぬ東京弁 17

奉公６ 十五銭の浅草情緒 楽しみだった盆の公休 19

奉公７ なつかしの故郷 寿司屋から暇をとる 20

帰郷１ 再び都会に憧れる 落第坊主と騒がれて 22

帰郷２ 五十六番目の小僧 何より嬉しい三度の飯 23

帰郷３ 極楽のような奉公暮らし 配達の途中で大八車失う 25

帰郷４ 奥の使いも役得の一つ 寿司屋の要領で配達 26

再上京１ 人生の転機つかむ 再び上京して綿布問屋へ 28

再上京２ 勉学の道拓かれる、福田商店での毎日 29

再上京３ 勉学の道開かれる 福田商店での毎日 30

再上京４ 主人の留守に意地悪 大喧嘩して一人残る 32

再上京５ 十五才で羽織を許さる 理事会に出席し意見を吐く 34

岩本町１ 岩本町変遷史 江戸っ子と祭りと朝風呂 35

岩本町２ 商売の転向を決意 機械電気学と取組む 37

関東大震災１ 大震災に襲わる 上野の山に続々と避難 39
関東大震災２ 東京は三分の二を焼く 人ごみに母を見付ける 40
関東大震災３ 母の決意で東京に留まる 道路に戸板で商売 42
関東大震災４ 第二の死線を突破 病癒えて兄達に協力 44
独立１ 兄弟商会を解散 独立して別世帯を持つ 46
独立２ 良き伴侶を見出す 易者の駄目に益々燃える愛情 47
独立３ 二人で固い決意 喜んで勘当を受ける 49
結婚と入営１ 甲種合格になる 涙ぐんで見送る新妻 51
結婚と入営２ 寒さに震え異国に上陸 陸軍歩兵上等兵となる 52
軍隊生活１ 要領本意で試験合格 上等兵候補者を命ぜられる 54
軍隊生活２ 異郷で父親になる 胸を痛める妻の手紙 56
軍隊生活３ つらかった耐寒行軍 アバジイ上等兵とアダ名される 57
軍隊生活４ 待ちに待った休帰除隊 うまい自由の空気 59
苦難時代１ 理想を高くかかげて 無資本で出直す 61
苦難時代２ 除隊後の営業再開は 半年で見事に失敗 63
苦難時代３ 妻と二人でミシン踏み 釦の露天商人となる 65
苦難時代４　露店の釦売りで生活に目処は立ったが 66
苦難時代５ 内職気分を精算して ミシン縫製業に踏み切る 68
和泉屋創立１ 永年の念願叶い 神田街に進出して開業 69
和泉屋創立２ お手上げ寸前を原価販売で盛り返す 71
和泉屋創立３ 三時間しか寝なかった一年間・うれし涙の利益金三千円 73
和泉屋創立４　十六年目でどうやら1人前になったと思ったら 74
和泉屋創立５　次男の重病を大量の輸血療法で乗り切る 76

支那事変の頃１　神田の衣料品業界団体の創立に奔放する　78
支那事変の頃２ 業界若手の親睦団体が目覚ましい活躍　79
支那事変の頃３ 気の合った悪友連との遊び、妻子とのドライブ旅行　81
支那事変の頃４ 子連れの若夫婦を乗せる。旧主福田さんとの再会　83
支那事変の頃５　方位学と姓名学に従って懲りる　85
支那事変の頃６ 三男の急死と物価統制令による市場の大混乱　86
統制経済下１ 東京地区一本の作業衣組合に強制加入 常務理事となる　88
統制経済下２ 東京被服工業組合の専務理事の椅子につく　90
統制経済下３ 戦時下の作業被服工業組合事情　91
統制経済下４ 経済統制下の庶民の暮らしぶり　93
統制経済下５ 防衛招集で留守の間に妻が鎌ヶ谷へ疎開決行　95
疎開先１　疎開先から日本橋の組合事務所へ毎日通勤　97
疎開先２ 250キロ爆弾13個の至近直撃を受け9死に1生　99
疎開先３ 3回目の死に直面し、さらに再招集で兵役に　100
応召　　再招集命令によって東部一八０五航空通信部隊配属に　102
終戦当時１　8月18日正午には鎌ヶ谷の自宅に除隊帰宅　105
終戦当時２　下谷稲荷町の組合事務所と青梅の工場に通う日々　107
終戦当時３　出征していた元店員の桑崎君の来訪　109
終戦後１ 和泉屋元店員第1号店員の桑埼君が釦売上を持参　111
終戦後２ 地主からの立ち退き要求で自分の土地に住居を自作する　113
終戦後３　夜中に日本刀を下げた四人組の強盗が侵入　115
終戦後４　よほど内部情報に通じた犯人像が推測された　117
終戦後５　10歳の長女が決め手の目撃証言　119

早川英俊回想録

早川英俊（Hayakawa Eisyun ／Hidetoshiとも称す）

1907年3月15日愛知県安城市和泉町 出生

1983年3月誕生日目前の満75歳、鎌ケ谷市にて病没

子は息子五人、娘三人の計八人（内二人幼児期に病没）

孫二十四人、曽孫三十一人、玄孫5人（2020年現在・増加中）

少子化時代の現在では貴重な多産系の家系である。

神田繊維業界の広報誌に連載したコラムをまとめたもの

執筆時点は1960年前後、英俊53歳頃のものである。

長男の早川俊一が原稿をテキスト化し、末子の早川廣行

がデジタルブックとして編集した。

制作年月日・発行者：2020年8月15日(終戦記念日に)

父が旅立った満75歳の年齢を目前にした自分の人生と比較し

亡き父に心よりの感謝を捧げつつ。　　早川廣行

お問い合わせEメール：h-hayakawa@denga.jp

幼時の思い出１　女を産んで儲ける　現金収入魅力の農村

先ず私の出生に触れますと、愛知県安城市和泉町、昔風には三河国碧海郡明治村大字和泉２２９番戸、平民農業　早川柳太郎三男として、明治４０年３月１５日に、この世に出現したのであります。東海道線岡崎駅の次、安城駅から北へ約８キロの濃尾平野に連なる僻村に兄二人弟四人と男ばかりの七人兄弟として育ったのであります。母は次々と生まれる子供の世話で何も出来ず、働き手といえば、父一人で約一町歩の田畑の農業は、毎日毎日が追われどうしの忙しさでした。

現在でも愛知県は国内有数の械業地として発展して居りますが、当時も三河木綿の産地として広巾木綿の機屋や紡績工場が県内各地に多数あり、女工員の求人も盛んで、農家の娘は小学校を終るか終わらないうちに、工員募集員の手で就職先が契約済みといった有様で、働きに出た娘からの仕送りが現金収入の少ない農家にとっては、大変な魅力であった訳です。

村全体が貧富の別なく女の子は１２～１３才位で紡績工場に働き出し、１０年程家の為に働いて貰ってから嫁に出すといった習慣でした。それにひきかえて男の子は惨めで、長男は跡とりとして必要ですが、次男三男となると全く無用の存在でありました。というのは附近には男の働く職場もなく、農業をさせるにも分けてやる農地面積の絶対量が不足しており、更に開墾するにも未開墾地が絶無という有様で手も足も出ない状態でした。遠国へ出稼ぎに行くには或る程度の年令になってからでなくてはならず、丁稚奉公に出すにも相当の支度をして無給を覚悟でなければ使ってくれる人がなく、全く男の子は現金収入の面では零でした。その当時を想起するに相応した会話をあげてみましょう。村の知人に赤ん坊が生まれて見舞いに行く時のことですが、「お前様の家じゃ何を産ました。」「はあ、よう聞いておくれやした。女の子だがえん。」「ほう、そうかそうか、もうけやしたのう、今にうんと働いて身上起こしてくれるがのう。めでたや、めでたや。」これが反対に男の子であった場合は、「ほう男の子かえ、まあ気を落とさんと、この次には女の子を産みなされや。」以上が大体お産お見舞いの言葉でした。

私の家では次々と生まれ出る子供は男の子ばかりで、母は慰めの言葉を何

回となく聞いたことであろう。
今考えてみると、村は300戸程の部落でしたが、どこの家も女の子が多かったように思えます。そして、確か男ばかりの家は私の家以外無かったと記憶しています。或る村の人が柳さん（父の事）とこじゃほんに気の毒な事だ、ああ次々と男の子ばかりで今に日干しになろうに、おはつさん（母の名）もよほど悪性腹だな。と悪口を言ったそうです。母は非常に気性の勝った人で反面、信心の厚い人情家でもありました。
１７才の時早川家に嫁して直ぐに女児を分娩したのでした。長女の君子です。その子を半年位で就寝中に窒息死させてしまったが、自分の過失を責めて晩年に至るまで、「あの子の罰で私には女の子は授からないのだ」と口癖のように念仏を称える母でした。

幼時の思い出２　両親には心から感謝　先生と喧嘩した小学生

　２０才の時、母は長男＝秀一を産み、次いで次男＝護正、三男＝（私）英俊、そして年子で、四男＝顕則、五男＝茂孝、六男＝昇司、七男＝真積、と男７人の子福者でしたが、母の身辺には常に三人位が、手枷、足枷となってつきまとっていました。その当時のことは、今も静かに眼を閉じると、走馬灯の如くに思い出されます。あれは私の四つ位のことと思いますが、・・・父は朝早くから車を引いて畠に出る、兄二人は学校へ行く。家の後片付けを終わった母が、まだ産まれて間もない赤ん坊を背負い、次の子の手を引いて歩かせ、私には弁当を背負わせて、片手にお茶の入った樽を持って、父の手伝いに畠へ出かけるのが１１時頃でした。畠まで２キロ位の道を急ぐのですが、その道程のはかどらぬこと、おびただしいものだったそうです。がんぜない私達は道草を喰いくい、母にだだをこねるので、父の所へ着くには相当の時間がかかったようです。村人がこれを見て、・・・「おはつさ（母）の弁当運びは前に一歩、後ろに二歩だ。あれじゃ畠へ着く時分にや日が暮れるだろう。」と悪口を言ったそうです。
こうした苦しい生活の中から、何不自由なく立派に育てて下さった今は亡き母に、心から有り難う御座いましたと御礼申し上げたい。父は８２歳で今も

健在ですから余り書かないことにしますが、百姓としては小柄で非力で、健気一方の堅物で、村では人望のあった学者肌の人でした。常に私達子供を集めては、立志伝中の人物論を語り聞かせ、現在の自分の力では、お前達に分けてやる資力がないが、兄弟力を合わせて、日本一の商人になってくれと、教育を受け且つ頼まれもしたものでした。毛利元就の例を引いて、家では７人の男の子がある。これが一本になって力を合わせれば、何事も成さざるはなしと、常に合掌して励まされたものでした。しかし、兄弟は他人の始まりという諺があるが、こればかりは父の思うようにはならず、皆それぞれ我が儘ばかり言って、苦労をかけた事を申し訳なく思っております。結果的に言って現在東京の神田に同業で各々店舗を持って、まあまあ仲良くやっているのを見て、父も安心しているようです。此の頃は父に会うと『愛知県にいた時の自分の理想を実現してくれて有り難う、この上は一人一人が、社会の恩に感謝して身を慎み、一家の繁栄を望むと合掌されます。』又五徳の例を引用されて、『五徳というものは、一本欠けても全部が役に立たなくなるから、お前達一人一人が責任を持って助け合わねばならぬ』と、言われます。親は何時まで経っても子供の事を心配していて下さる。有り難いものだ。親のご恩は高く深いものだと、つくづく頭が下がります。さて筋が少しく横道にそれましたが、７才の時小学校入学の折りに、一人で行って先生に大変褒められた事を覚えてます。私は生まれつき体が大きく、いたずらや、腕白も人一倍で、学校ではよく先生に立たされたものでした。学業は割によく出来た方で、組では三、四番でしたが、三年生の秋の運動会で、先生と喧嘩して一騒動起こしてからは急に学校に行くのが嫌になり、当時小石川宮下町で、寿司屋を開いていた同村の出身者が、小僧を探していると言うのを聞いて、自分で頼みに行きました。両親は反対しましたが、村の学校に行くのが嫌になった私は、東京に憧れる少年の気持ちとでもいうのか、どうしても行くと言って聞きませんでした。

少年の頃１　懐かしい故郷よさらば　日吉丸に負けまい決意

私がどうしても上京すると言って聞かなかったので、両親も遂に諦めて奉

公に出すことになりました。いろいろと手紙のやりとりをしたあげく、大正五年四月一日、いよいよ東京へ行く事になりました。前から色々と準備した身の回り品を、父が町から買って来た竹行李にいれました。又布団を一組、箱膳を一組、下駄一揃え、着物から下着まで、何やかやと母は毎日可愛想にと、涙をふきふき支度をしてくれたを思い出します。今考えますとおかしい様な大騒ぎでした。前の日に親戚廻りをして挨拶をすると、その晩に餞別やら、土産物を持って集まって、私の為に送別会をして下さいました。母はお客様の接待をしながら、時々私の方を見ては、「体に気をつけて、病気するんじゃないよ」と言って涙ぐむのでした。その晩は久しぶりに母の床に寝ました。大正五年四月一日、この日は私の運命を決定した社会へ突入する記念すべき日でした。朝３時頃起こされてみると、母は何時起きたのか、もう朝食の準備が出来ていました。座敷の仏壇の前に座って、父と共に最後のお経を上げ、ご先祖様にお別れの挨拶をしてから食事をしました。母は弁当を手渡しながら、しっかりと私の手を握りました。母の顔を見ましたら、何か熱いものがこみ上げて来たので、私は表に飛出し、父が曳いて行く車に積んだ荷物の上へ乗ってしまいました。ほのぼのと明け初めた門口へ車を曳いて、父は私と一緒に出かけました。母は「元気でなあ」と言っては、いつまでも、いつまでも槙の木につかまり、又、「気をつけてな」と叫んでいました。東京まで私を連れてってくれる奉公先の主人の父に当たる人や、駅まで送って下さる親類の人達と途中で落ち合って、住み慣れた懐かしい村とも別れ、東海道線安城駅へと向かうのでした。約２里のでこぼこ道を荷車に揺られて駅に着き、間もなく入って来た東京行き列車に乗って、窓から父や叔父さん達と最後のお別れを惜しんだものです。

　父は「主人や皆に可愛がられてよく勉強し、偉くなってくれや」と息をつまらせて私の手を握りました。私はうんうんと肯く。その時停車時間の短い寒村の駅とて突然物凄い音を響かせて汽笛が鳴り渡りました。ごとんごとんと車輪に伝わるレールの響きと共に、私の乗った列車は動き出しました。父は私の手を離すや、いきなり大声を張り上げて「早川英俊君万歳」と両手を高々と擧げて唱え出しました。送ってくれた叔父さんも一緒に万歳万歳と両

手を擧げていました。車中の人達が驚いた風に、一斉に私の顔を見ましたので非常に恥ずかしい思いでした。あの時の父は、可愛い我が子を戦地へでも送る時の様に切実なる思いがあった様に相違ないと、今も私は思うのです。何しろ生まれて初めて乗る汽車の旅であり、ただ珍しく面白く、外の景色を眺めて無我夢中でした。暫くして列車が矢作川の鉄橋を通過した時、私の脳裏をかすめたのは、同郷の偉人豊臣秀吉と徳川家康でありました。秀吉は１０才の日吉丸の時にこの矢作橋の上で寝ていて、野武士の蜂須賀小六に出会い、出世の糸口を掴んだのです。家康の場合はその居城でありましたが、岡崎に於いて人質時代にこの河原で作戦を練ったのです。興味深いのは幼時不遇であった二人が、矢作川を基点として共に天下取りと成ったことです。私も日吉丸と同じ１０才、必ず出世しようと決意を新たにしたのでした。

少年の頃２　富士山の偉容に感銘　いよいよ東京へ第一歩

矢作川を過ぎて蒲郡あたりまで来ると、海が見えて来た。その広いのには本当に驚いてしまった。話には聞いていたが、見るのは初めてだ。向こう側が見えない。連れの叔父さんに「向こう側は何処か」と聞いたら「 アメリカだ」と言われて二度びっくりした。学校で習った唱歌「汽車の旅」を口ずさんでみました。一番二番あたりは余りピンときませんでしたが、「思う間もなくトンネルの闇をくぐって広野原、後へ後へと飛んで行く」まで来るとピッタリ実感が涌いて来ました。

朝七時頃故郷の駅を発車した汽車は、夢と希望に胸をはずませた私を乗せて、東へ東へと走っていました。母が心づくしの炒り豆や、あられのぼろを食べているうちに、今朝早く起こされた為か、ウトウトと眠ってしまいました。お昼頃叔父さんに起こされて、昼食を摂りましたが、白米の大きな握り飯で、上に海苔が巻いてあって美味しかった。家のご飯もこれが食べ終わりで、今晩からは他人の家で飯を食べるのかと思うと、さっきまでの元気はどこへやら、妙に淋しくなってきました。その時誰かの「見えた見えたきれいだな」との声に乗客が一斉に左側の窓をみました。私もビックリして、片手に大きな握り飯を持ったまま、左前方を見ると、頭に白雪を戴いた富士山が

雄大に迫って来ました。その日は天気が良かったせいか、実にキレイな富士で、まるで私を励ます様に微笑んで見えました。その富士山の偉容は、私を感激させました。澄み切った青空に、周囲の連山を見下ろして、くっきりと聳え立つ富士山の崇高さに心を打たれた私は、思わず「きれいだな、立派だなあ」と嘆声を発したものでした。この時見た富士山の美しさが忘れられず、後に私は１６才から２５才までの間に、八回も登山を試みたものでした。列車は三島から山路にかかり、有名な箱根山の下をトンネルで通過しました。箱根山は昔、守るに易く、攻めるに難き険相な山で、登り降り八里、道中の旅人は、一日がかりで歩き、又は駕篭や馬の背を借りて越したという事を思い出します。又当時の若衆が歌っていた、箱根山は背で越す駕篭で越す、今じゃ寝ていて汽車で越す。トンネル一つ越しや真っ黒ヶのヶ」という歌詞をも同時に思いだします。列車は、御殿場　国府津と現在の東海道線へ出てひた走りに走り、東京駅に着いたのが夕方の六時頃でした。迎えに来ていた寿司やの主人に案内されて、長いホームを駅の降車口へと出ました。赤煉瓦で出来ている細長い東京駅の大きいのに驚きの眼を見張りました。その時分は今の丸ビルや他の大建築はなく、一望の広い野原で、左手遥か向こうに赤煉瓦の西洋館が連なって、日比谷の森が望見されました。チッキにした荷物は明日取りに来る事にして、手回り品の荷物だけ持って、駅から原っぱを横切って宮城へ向かいました。楠公の銅像を見てから、二重橋の見える堀端から、宮城を遥拝しました。宮城の様子は神々しく、忠君愛国の教育を受けていた私には、特に感銘深いものがありました。夕闇迫る千代田の城を眺めながら、堀端伝いに靖国神社へ行き、日本一の大鳥居をくぐって参拝し、日支日露の戦いに犠牲となった英霊に、黙祷を捧げた後、九段坂上から市電に乗って電光もまばゆい、街町を見物しながら、小石川宮下町の奉公先へと向かったのです。

奉公１　忘れられぬ寿司の味　奉公は井戸の水汲みから

　奉公先の宮下町は、市電巣鴨駅の一つ手前、丸山町で降りて、右へ約一町ばかり入った住宅街の中程で、おかめ寿司は間口二間、奥行四間位の平屋建

て四間長屋の二件目でした。附近には米やをはじめ、乾物屋、魚屋、菓子屋、そば屋、お風呂屋、冬は焼き芋屋に変わる氷屋等が軒並べている、日用品の商店街でちょっとした場末の盛り場といった感じの場所でした。
おかめ寿司から５０m程先に古ぼけた神社があって、その百坪程の広場が、近所の子供達の遊び場でした。その他には石塀や板塀に囲まれた上流や中流住宅がぎっしりあって、夜などは真っ暗で淋しい場所が多かった。
　早速奉公先のおかみさんに引き合わされましたが、太った背の低い丸顔の三十五六才の人でした。その顔は、店に飾ってある看板のおかめの顔にそっくりで、眼が少しきつかった。私はおかみさんの顔が似ているので、おかめ寿司と名前をつけたのか。と思ったとおりを主人に聞きましたら大変叱られてしまいました。夕食には主人が作ったお寿司をご馳走になりましたが、その美味しかった味は、今になっても忘れられないものがあります。その時私は「自分は幸福である」と、つくずく思いました」。田舎にいれば毎日毎日麦飯で、米の飯は、正月や祭りか法事の時以外食べられないのに、東京へ奉公に来たお陰で、こんなに美味しいものが、毎日食べられる幸福を感じたのです。その夜は長い汽車の旅で疲れていたので、床に就くやぐっすり眠ってしまいました。翌朝七時頃に目を覚まして起きましたら、おかみさんは、お勝手でご飯を炊いており、主人はいませんでした。朝四時半頃起きて魚河岸へ買い出しに出かけたのだそうです。顔を洗ってぼんやり外を見ていたら、おかみさんが、「お前おいで」と呼ぶので、出口から外へ出てみますと、そこに近所の人が共同で使う井戸があって、竹竿の先につけた釣瓶で水を汲む仕掛けになっていました。井戸のそばに高さ１m位の台があり、その上に升樽がのせてあって、樽の底から青竹の節を抜いたパイプで水を店先まで引いて、水桶に溜めるようになっていました。おかみさんは、竹竿の釣瓶を上手にツルツルと滑らせて水を汲み上げ、樽の中へザアットあけて見せて、「さあ、今あたいがやったように、もういいと言うまで汲みな」と言いつけて裏口から家へ入ってしまいました。私は言われたとおりやってみましたが、竹竿は汲み上げるに従って、上の方でフラフラしてとてもやり難かったし、汲み上げた水を樽に入れるのが又一苦労でした。樽の高さが私の肩の辺りに当

たるので、うっかりすると、自分の体に水をかぶってしまいそうでした。一生懸命、五六十杯も汲んだ頃、主人が買い出しから帰って来て朝食になりました。ご飯は釜底にほんのり焦げた美味しい飯でした。主人が、「お前はお焦げが好きか」と聞いたので、「はい、大好きです」と言いましたら、「それはよかった。寿司屋の飯はお焦げが出来るから毎日それを先に食べるのだ」と言われてとても嬉しかったのです。食後主人が買い出しの帰りに持って来てくれた荷物を整理して押し入れにしまい、母が作ってくれた、木綿縞の着物に角帯を締め、さあ今日からは寿司屋の小僧生活が始まるのだと、前掛け姿で店に降りて行きました。

奉公２　板についた出前姿　「チワー」の掛声も勇ましく

　木綿縞の着物に角帯、前掛け姿で店へ出て来ますと、主人が、「その格好じゃ商人の小僧さんみたいでいけねえ。明日河岸で半天を買って来てやるからな」と言いながらせっせとねたの仕込みをしていました。来てから五六日は、無我夢中のうちに過ぎて行きましたが、自然と私のやる日課が決まってきました。朝四時半に起きて裏の井戸からその日に使うだけの水を汲み上げるのが、約一時間、それから店を開けて掃除をする。雑巾掛け、水撒き、それが済むと食器の洗い片付けを全部やってからご飯炊きです。寿司屋のご飯炊きは、特別のコツがあって、なかなか難しいものであります。その要領を述べると次のようになります。寿司米といって特別に各産地の米を調合した米を仕入れる。その米を目の細かい篩にとって選別しておく。選り分けた米を前夜とぎ上げてから、米ざるに入れて水をきっておく。一回に炊く米の量は一升から二升までで、それ以上は炊きません。最初釜に一定量の水を入れて沸かし、沸騰点に達したら、米ざるにある米を入れて大しゃもじで静かにかきまぜ、水加減をして蓋をする。次に再び沸騰点に達した時に火を引き、蒸らし炊きにして、約十分もすると、釜底にうっすらと焦げ付く程度の美味しいご飯が出来上がるのであります。ご飯が炊きあがった時分に、買い出しから主人が帰って来て、魚の仕込みが始まります。小鯵（こあじ）こはだは開いて平らなざるに乗せ、塩でしめて置きます。あなごは開いて味噌、醤油、

砂糖で煮ます。エビは塩茹でにします。生魚の仕込みが済んでから、朝食を食べるのが九時頃で、食後主人の助手を勤めておぼろ作りと、卵焼きを始めます。おぼろ作りは大変手間のかかるもので、小エビを茹でて皮をむき、摺鉢で摺りつぶしてから、紅で色づけをしながら、甘煮にするのです。卵焼きは最初に、つなぎにする白身の魚を摺鉢で摺りつぶしながら砂糖を混ぜて行き、次いで卵を割りながら、つなぎと混ぜ合わせて、段々と量を増して、すっかり攪拌出来たものを、卵焼き器で焼くのです。準備がすっかり出来た頃に、出前の注文が来ます。主人の握った寿司を私が岡持に入れて、配達するのですが、その出で立ちは真岡晒の半袖シャツに半モモ引、めくら縞の腹掛に印半天、そろばん縞の三尺帯を横ちょに締めて、豆しぼりの手拭で、ねじり鉢巻、足には紺の素足足袋という、威勢の良い姿で、岡持片手に、「チワー。おかめ寿司でございます。毎度有り難うございます。」と教えられた通りに出前するのでありました。お昼前後に五、六件の出前があって、あとは夕方まで暇になります。その間に前の夜に配達したものの出前下げをして、皿や丼を洗って片付けておくのも私の仕事であります。当時は寿司の値段は割合に高く、種物が一個二銭　エビ五銭　のり巻き五厘で、一人前　上二十銭　中十五銭　並十銭が相場で、ちらし丼もにぎりと大体同値でありました。夕方からは活気づいて店も忙しくなります。出前の他に店で食べて行くお客さんがやって来ると、私は大声を張り上げて、威勢よく「いらっしゃいまし、あがり一丁」と言って、大きな湯呑み茶碗にお茶を入れてお待ちどう様と出すのです。お客様の帰るときには。「有り難う存じます。毎度あり〜」と繰り返しやるわけです。最初は恥ずかしいと思ったものが、段々と板についてくるのでありました。

奉公３　車を曳き河岸へ買い出しに　今は鼻につく寿司の味

　門前の小僧習わぬ経を読む、で寿司屋の小僧ぷりも板について、お客様から、「いい小僧さんじゃないか、しっかりやんな」と褒められて嬉しが

り、一段と声を張り上げて、「毎度あり〜」と愛嬌をふりまくのでした。立ち食いのお客さんも少なくなる、十時頃になると、腹も減ってくるし、店も暇になってくる。私の夕食は、見本に作ってある寿司を最初に食べ、それから残った寿司飯に、自分で好きな種を握って食べるのですが、東京へ来た時あれ程美味しかった寿司が、段々嫌になってきたのは不思議です。ご飯が早く売り切れ、早仕舞いにして、別に炊いた酢の入っていない普通の飯をお味噌汁とお香こうで食べる時の味は格別の楽しさでありました。

　東京へ来てから一ヶ月ばかり過ぎた或る日、主人が何処からか、牛乳屋が配達に使っている様な、中古の箱車を、一台買って来ました。箱の両側にペンキでおかめの面と寿司と字が書いてありました。主人が「お前明日からこの車を曳いて買い出しに行け」と言って、その晩地図を書いてくれました。翌朝は四時に起こされて支度をし、表に出ましたら、まだ薄暗かった。地図を頼りに初夏の朝露を踏んで、まだ寝静まった東京の町を車を曳いて走るのはとても良い気持ちでした。丸山町の電車と通りから駕篭町白山を通り、帝国大学前から本郷三丁目、二丁目、一丁目を走り抜けました。「アラヨアラヨ」と掛声も勇ましくガラガラと明神坂を一気に駆け下りて。昌平橋を渡り、須田町交差点の広瀬中佐と杉野兵曹長の銅像を左に見て、今川橋を渡って真直に電車道りを本石町へ出、室町の三越前にある指定された、甘栗屋の前に着いたのは五時頃でした。私より後から家を出た主人は、電車で来て待っていました。主人は、「ここで待っていて荷物を持って来たら、受け取って車の中へ入れときねえ。」と言いつけて、せわしそうに甘栗の横町へ消えて行きました。当時の魚河岸は、この三越前から日本橋の河岸に至る、左側一帯にあって、朝暗いうちから魚の売買で、賑わいを極めていたものです。箱車の梶棒に腰をかけて流れる汗を拭きながら、ぼんやり辺りを眺めていると、魚の入った木箱を担いだ人が、「おかめ　おかめ」と呼びながら近づいて来ました。私は黙って見ていると、その人は、「やいやい、手前おかめだろ、間抜けめ、何故声を掛けねんだ。」と、どなりつけました。私はびっくりして、「へい」と言いましたら、「手前ねすだな、まあしょうがねいや。お前ちの名前呼んで来たら、声を掛けなきゃあ駄目だぜ、こちとら忙しいん

だから。」と怒られました。あれは魚を配達する軽子という者だと、後で分かりました。荷物を車に積んでいると、次から次へと色々な品物が届いて来ました。魚や氷、つまやわさび、折や経木、笹の葉もありました。暫くすると主人が来て、届いた品物を調べ、二銭銀貨を一枚くれました。「この二銭で明神坂を立ちん坊に押してもらって早く帰れ、ぐづぐづしていると、魚が腐ってしまうぞ。」と言われました。来る時は空車で道も平均に下り坂が多かったから、軽かったが、帰りは魚と氷で、約十貫目位の荷物で随分重かった。昌平橋附近まで来ると、多町の青物市場や魚河岸から帰る車が多く、明神坂は大変な混雑でした。立ちん坊に車を曳いて貰って、坂を登って二銭払うと、今度は自分で曳いて走り出すのですが、道が悪く車は重く、なかなか思う様に走れません。本郷三丁目から白山までは、赤レンガが敷き詰めてあって、車は軽い心地良い音を立てて、ガラガラと走り出しました。店へ着いたのは、約二時間かかって、八時頃でした。

奉公４　立ちん坊の押し賃を節約 焼き芋大福餅の買い食い

毎日車を曳いて買い出しに行く様になってから、私の日課が少し変わって来ました。それは、朝の水汲みとご飯炊きが無くなった事です。その代わりに腹が減ってたまらなくなって来ました。毎朝四時に起きて日本橋まで往復二里の道を買い出しから帰ると、八時頃になります。その後主人と生魚の処理をして、九時頃朝食になります。起きてから食事までに五時間の労働は、とてもつらいものです。そこで考えたのが、明神坂で立ちん坊に払う二銭を節約する事でした。或る時立ちん坊に頼まず坂を登ってみました。欲と二人づれで、一生懸命車を曳いて登って行くと、坂の上から戻って来る立ちん坊が、「小僧さん押しましょうか。」と声を掛けてきました。「いくらだ」と聞くと、「二銭だ」と言うので、もう坂を半分以上も登っているのだから、まけてくれと掛け合ってみました。何人かの人に掛け合っていると、「よし、まけてやれ」という男があって、この男に押して貰って坂を登り一銭払いました。残りの一銭で、坂上に露店を張っている焼芋屋から、焼きたて芋を買いましたら三本くれました。香ばしい焼き芋の味は、空きっ腹の私には、とて

も美味しいものでした。腹掛けの丼に入れた焼芋を食べながら、車を曳いて元気よく走りました。途中共同水道の水を飲み飲み芋を食べると、一銭の芋も結構腹の虫を満足させる事ができました。
次の日からこの方法で、毎日毎日立ちん坊の押し賃を値切って、焼き芋の買い食いを続けたものでした。或日腹がそれ程すいておらず、焼き芋を買わずに帰ったことがありました。その次の日は、金が二銭になったので、今まで食べたい食べたいと思って、横目でにらんで通った、焼き大福を買って食べましたが、実に美味しかった。当時の労働者が食べる、塩餡の入った大福餅を、大道で七輪の上に鉄板を乗せて、焼いて売っていました。二銭で一個買えました。一度味を覚えた大福餅が食べたい一心で、立ちん坊に押して貰わずに明神坂を登ることを工夫しました。それは坂の途中まで来て、どうしても重くて登れなくなると、車をわざと横にして待っているのです。すると後から来た車が、邪魔になるから一寸押してくれます。その勢いを利用して、一気にじぐざぐ行進で少し登ります。又立ち止まって待っていると、次の人が押してくれます。この方法を繰り返しているうちに、坂を登りきってしまうのでした。或る時など、電車の線路の上でどうしても動かす事が出来ずに困っておりましたら、電車の運転手が降りて来て押してくれた事もありました。中には通りがかりの人で、坂の上まで押してくれる親切な人もありました。こうした日課を毎日毎日繰り返しているうちに、段々車を曳いて坂を登る要領も上手になり、力も出て来て、自分で登る事が出来る様になってきました。二銭の押賃で色々な物を買い食いしながら走る朝の買い出しが楽しみでありました。
　或る日いつもの様に車を曳いて神田須田町まで来ると、後から、ガラン、ガランと勢い良く走って来る、消防ポンプを見ました。当時の消防ポンプは、二頭立ての馬車で、赤塗りの蒸気機関を乗せて釜に火を焚いて蒸気を起こし、機関を動かす仕組みになっていました。その時の火事は今川橋の松屋呉服店で、今の住友銀行神田支店の所でした。私が車を曳いて松屋の前まで来ると、窓から黒い煙を吹き出して、燃え始めたばかりという状態でありました。朝は早いし、まだ皆寝ているのか、近所の人達五六人が、「火事だ、

火事だ」と叫びながら、戸を叩いて起こしていました。早く消せばいいのになと、思って見ていますと、先程見た消防馬車は、本石町の方へ走って行ったかと思うと、又引き返して火事場を通り過ぎ、須田町の方へ行ってしまいました。私はその時、これは消防ポンプではなくて、あの大きなガラガラという音で、町の人達を起こす役目の車かなあと思いましたが、やはり消防ポンプで、しかも当時としては、最新式のものである事が、後で分かりました。近く或いは遠く半鐘がジャンジャン鳴り出して、火は勢い良く燃え出していました。

奉公５　所変われば品変わる　さっぱり分からぬ東京弁

今川橋松屋呉服店の火事は、私が生まれて初めて見た貴重な体験でした。最初から通りがかりで見ていた私は、まるで夢でも見ている様な錯覚にとらわれました。建物の窓窓から、もこもくとわき上がる黒い煙に混じって、時々赤い炎が吹き出している。幾人もの人が黙々と走り去って行く。不思議な程静かな永い時が過ぎた様な気がしました。そのうちにどこにこんなに沢山の人が居るのかと思う程、大勢の人が集まって来ました。鳶口を持った町の火消しや在郷軍人が、消火にかかり始めた頃になって、やっと蒸気ポンプが放水し始めました。その時には、火はもう大きな建物一面に広がり屋根へ抜け出していました。幸い風が無かったので、大火にはならず、松屋と附近数件の全焼で鎮火しましたが、子供心に火事の恐ろしさを身にしみて感じたものでした。この日は火事のために買い出しも遅くなり、家に帰ったのは十一時頃でした。

おかめ寿司へ奉公に来てから、三ヶ月位は全く夢の様に過ぎてしまいました。毎日の仕事にも慣れて、少し面白くなりかけて来た或る日、明神坂上で一休みして水を飲んでいるところを、電車で帰る主人に電車の窓から見つけられてしまいました。帰って来ると早速、買い食いに使った金はどうしたんだ。と聞かれるので、今までの訳を話してあやまると、主人は大変怒って、「太えやろうだ、押賃をごまかして買い食いなどしやがって」と横っ面を二つ殴られてしまいました。次の日からは、押賃の二銭はくれなくなってしま

ったので、又腹が空いて困りました。今まで癖のついていた、買い食いが出来なくなったのがとても辛く、楽しかった買い出しが、いやな辛いものになってしまいました。家に居れば、腹一杯食べることが出来るのになあと、故郷を思い出したものでした。寿司屋の仕事は、朝起きてから夜寝るまで、実に忙しいものです。一寸の暇もなく追いまくられる様になっています。午前中は種の仕込みにかかります。店で食べるお客様と、出前の配達、出前下げに、皿丼の洗い整理、水汲みと、毎日毎日同じ事を繰り返すのでしたが、腹はいつも空いていました。配達に行ったお得意様の奥さんに、歳や国を聞かれて話したことがありました。「まあ、十才なの、しっかりやりなさいよ。」と言われてお菓子をくれました。その時お菓子を食べながら、うれし涙がぽろりと落ちましたが、これを見て奥さんが、「可哀相に。」と一言つぶやかれたのを聞いて、私は心の内に反発を感じたものでした。それからの私は人に身の上話を聞かれても、同情的な事を言う反面、私の両親を非人情に言われるのが嫌さに、話さない事にしました。

　近所の魚屋の小僧や、そば屋の出前持ち、酒屋の小僧等と友達は出来ましたが、皆年上で而も東京生まれで生意気で、私の言葉がおかしいと言って、馬鹿にされました。現在では東京の言葉は標準語となり、全国の人が聞いても大体話は通じますが、大正初期の東京弁は、分からない言葉が沢山ありました。山の手言葉と、下町言葉に職人言葉があって、更にそれをごっちゃにした様な言葉等妙な言葉を使っては、江戸っ子だと威張っていたものだった。東京へ来てから間もない頃に、主人の使いで八百屋へみかんを買いに行って、まごついたことがありました。八百屋へ行って私は、山の様にあるみかんを指して、「おくれ」と言うと、「おみかんで御座いますか、おいくら差し上げましょうか。」と早口にぺらぺらと言うのが、私にはさっぱり分からない。「このみかんをくれ」と顔をまっかにして私が言うと、八百屋は「おみかんおいくら。おいくつ差し上げましょうか。」と聞き返すので、又、私はまごついて分からなくなってしまいました。三四回押し問答をした末に、やっとみかんを十銭買う事ができましたが、八百屋が上におの字をつけた為に分からなかったのです。当時分からなかった言葉に、おてふき、お

しぼり、おすもじ、上がり、おめんち、あたえんち、おむら、おてもと、おみおつけ、なみのはな、おなら等等所変われば品変わる。おらが国さじゃ『へ』と申す。

奉公６　十五銭の浅草情緒　楽しみだった盆の公休

　東京の言葉にも慣れて、「何言ってやんで、べらんめい、こちとら江戸っ子のご先祖でい。」（三河の国は江戸開府徳川家康の出生地）と啖呵も切れる様になったのです。小僧生活も段々慣れて来た時分に初めての薮入りがやって来ました。前から楽しみにしていたお盆の公休日です。七月十六日主人からお小遣い銭として二十銭と市電の乗車券を二枚に、昼食用ののり巻きをもらって、今日一日は我が天下とばかりに、喜び勇んで待望の浅草見物に出かけたものでした。当時の市内電車は乗り換えが三回まで無料でした。小石川宮下町から電車に乗って、本郷三丁目で乗り換え、次に上野広小路で浅草行きに乗り換えるのです。ここの乗り換えを利用して、松坂屋伊藤呉服店（現在の松坂屋）を見物してから上野公園へ行き、西郷さんの銅像を見て電車で浅草雷門まで行き、観音様に参拝しました。奥山のごちゃごちゃした掛小屋の間を通り抜けて、浅草名物の十二階へ登って見ました。入場料は大人五銭、子供二銭位であったと思います。エレベーターで登って、一番上の展望台から見下ろす眺めは雄大なものでした。今と違って建物も高いものはなかったし、見通しもきいたのです。私が今でもありありと思い出すのは、隅田川が赤羽辺りの上流から、大川まで一本の白い帯となって、俯瞰されたことです。明治初年に英国人の技師が建てたという、十二階の高さに感心して、昼頃まで夢中でぐるぐる廻って見物しました。十二階のすぐ前に江川館という玉乗りの見せ物がありました。犬や猿を使って曲芸や芝居を見せる常設館で、筵の花道に衣裳を付けた犬と猿が待機していたものでした。入り口の高い台の上に若い男が居て、声を張り上げて、「サアー評判評判。札銭は大人が五銭に子供は二銭だよ。いよいよお待ちかねの江川大夫が綱渡りと御座い。サアサアお早くいらっしゃい、いらっしゃい。」と呼び込みながら、筵の幕をキリキリと巻き上げるのです。中では丁度赤い衣裳を着た犬猿が、舞

台に渡した綱を、下座の囃子に合わせて渡り始める所で、又幕は下りて仕舞うのでした。呼び込みは面白おかしく口上を言いながら、時々幕を上げて中の様子を見せてくれるので、私は中へ入らずに外で永い間見物したものでした。活動写真は一回も見ていなかったので、今日の楽しみの一つでした。どれを見ようかと、先ず一軒づつ木戸銭と看板を見て廻ってから、大勝館に入る事に決めました。木戸銭は大人十銭に子供五銭でした。尾上松之助の猿飛佐助に、真田十勇士を配した諸国漫遊記で、敵国の様子をさぐり徳川方を悩ませるという、当時流行の忍術活動写真で、初めて見る私には、たまらなく面白く思われました。その他にも母ものの新派悲劇が一本と、西洋もの一本の三本立てで、時間も一回見るのに五時間位かかりました。私は忍術が気に入って、松之助を二回見て外へ出たら八時頃になっていました。夜の浅草は、アセチレンガスを点けた夜店が奥山一帯に出ていて、その賑やかさは現在以上で、又変わった面白さがあったものです。松井源水の独楽回し、薬売りの居合い抜き、がまの油売りの口上等、金も使わず只で見物出来る面白いものが沢山ありました。遊び疲れて家に帰ったのは十一時頃でした。二十銭の小遣いは五銭余っていました。

奉公７　なつかしの故郷　寿司屋から暇をとる

奉公に来て病気になる時程困ることはなく、淋しいことはありません。労働過重と偏食から来た私の病気は、脚気でした。農村の者が都会へ出てかかる病気で、最も多いのがこの脚気で、この病気は故郷へ帰れば、すぐ治ると言われていますが、今と違ってその当時は、百里もある愛知県までは、なかなか帰る事も出来ず、自宅療法で治すことにしました。毎日朝早く素足で土を踏み歩き、米食を止めて、小豆やおからを食べて、治療をした結果、段々良くなり、いつの間にか治って終いました。

　私は奉公する時の約束で、夜学に通わせると言う主人の言葉を信じて、少しの時間でも暇があれば、教科書を開いて勉強をして、学校へ行けるのを楽しみに働いたものでした。ところが、主人は約束を実行してくれず、私がその事を話すと、「今お前を学校にやると、子守りをする者がいなくて困るか

ら、来年になったら上げてやる。」と言って取り上げてくれないのです。国元の父に手紙を出して、学校へ行く約束を実行してくれる様に頼んでみましたが無駄でした。

その年（大正５年）の十一月に突然長兄秀一が訪れて来ました。上京以来七ヶ月目に肉親に会った気持ちは実に涙ぐましいものでした。長兄は、小学校を卒業すると同時に、名古屋市内の綿ネル問屋へ奉公していましたが、三河出身の木綿問屋山田商店へ、奉公替えする為の上京でした。山田商店は日本橋小舟町二丁目に店舗を構えた足袋地木綿や広幅木綿の卸問屋で、山田藤五郎幸次郎氏の兄弟で経営する兄弟商会であり、従業員も全部故郷の三河から集めた新進気鋭の木綿問屋で、経営者兄弟は共に二六商会の出身でした。この店は当時なかなか繁盛した店で、同店出身者には珍しく多くの成功者を出しています。今では物故された主人の祥月命日である三月九日には山久会と称して、毎年会合がありますが、集まる人は二十数名に達し、盛会である由、現代社会の範たるものと思います。神田付近に店舗を持って営業している山久会員には、秀花本店、早川正商店、高須商店、正藤商店、山久商店等があり、その他各地に於いて、それぞれ成功しておられます。その時主人に一日の暇をもらい、兄と二人で積もる話をしながら、春日町まで歩いて行き、一番安い写真を写したのが、私の初めての写真でした。貴重品でしたが、残念ながら三枚よも無くしてしまいました。十六才の長兄と十才の私は木綿縞の着物に角帯を締めた小僧姿で、生真面目な顔をして、写した写真を思いだすと、面白いものです。兄の話す日本一の商人になって、金持ちになるのだと言う理想論を聞いていると、急に寿司屋が嫌になって来て、寿司屋を止めて兄の店に行きたくなって来て、その事を長兄に話したら、学校を卒業しない者は、大きな店では使わないから駄目だと言われてがっかりし、いよいよ以って学校へ行きたい思いがつのるのでした。年の暮れには色々な行事があるもので、べったら市、羽子板市、年の市、酉の市等珍しいものばかりでした。なかでも、お酉様の熊手は主人が大きなおかめの面のついた三尺もあるものを、店に飾って景気直しとするのが、年中行事の一つで、気のせいかお神さんの顔もおかめに似て、だんだんふくらんで来る様な気がするの

でした。

寿司屋の店も寒くなるに連れて忙しく、暮れから春にかけては、掻き入れ時でした。上京以来全く夢中で過ごしているうちに、何時の間にか一年が過ぎて、四月の新学期が始まりましたが、主人は学校に行かせてくれないので、私はますます寿司屋が嫌になって、父と兄に交渉してもらい、寿司屋から暇を取って、三河の故郷に帰ったのが八月でした。その時は大雨が降り続いて、東京下町一帯が大洪水になり、隅田川へ上流から家や材木が流れ、大被害がありました。これは大正六年のことでした。

帰郷１　再び都会に憧れる　落第坊主と騒がれて

遠大な理想を抱いて東京に行った私は、雄図虚しく破れて、一人淋しく生まれ故郷に帰るのでした。去通った道を又戻るのですが、思い出の箱根山、富士山、海も、そして矢作川も私の心を慰めてはくれませんでした。「男子志しを立てて郷間を出づ、若し学ならずんば、死すとも帰らじ」と固い決意を抱いて東京に出た私が途半ばで挫折して帰る気持ちは、妙に淋しいものがありました。安城駅まで迎えに来た父と二人で、夕闇迫る二里の田舎道を、こっそり我が家へたどり着いたものでした。家の者達は私の気持ちを察したものか、温情を以て迎え入れ、別に小言も言われませんでした。東京に居た時夢にまで見た、懐かしい生まれ故郷の全ては、誠につまらぬものであり、幻滅の悲哀を感ずるのでした。広いと思った道が狭く思え、大きな建築物だった寺や学校が貧弱なものとなり、美しい川や山が、汚いものに見えるのでした。又村の大人や子供達と話してみても、少しの面白さもなく、時代遅れの無気力で、進歩も活気もなく、牛の様な日常生活が目に映るのでした。そして僅か一年半ではあるが、都会の空気を味わった私には、この平凡な農村で一生を送る人達が、むしろ気の毒に感ずるのでした。早く病気を直して、どんな苦労をしても、都会に出て出世をしようと考えたのは、帰郷してから数日の後でした。出世をするにも奉公するにも、義務教育だけは受けておかねば、都合が悪いので、村の学校へ行く事にして、父が私を学校へ連れて行ったのです。私の考えでは、私の元の級（五年二学期）へ編入してもらうつ

もりでした。ところが、学校では三学年しか終業していないから、四年生編入しか出来ないと言うのです。私は東京に行っていても、学校へは行かなかったが、教科書で勉強して、充分出来る自信があるから、試験をして出来たら五年に入れてくれと頼んだのですが、学校では修業証書がなければ、上の級へは入れない規則だと言って、編入を認めてくれないので、やむなく四学年に編入してもらって、九月の二学期から通学を始めたのでした。

前から一生懸命勉強してあったせいか、別に難しい処も無く、むしろ易しすぎる位でした。学問の方は別に困る事はないのですが、前の学友と喧嘩する時には困りました。喧嘩は強い私でしたが、彼らが逃げる時に、声を揃えて落第坊主落第坊主と囃し立てられるのには困りました。楽しかる可き学校も故郷も、私には少しも楽しくない月日が続き、都会の空にあこがれも出て来るのでした。丁度その頃次兄護正が、名古屋市内の畳表問屋へ小僧に行っていましたが、その兄を世話した大池紙店という、大きな紙問屋へ奉公する事になりました。二学期も終わった年の暮れに、私は父の曳いた車に荷物を積んで、二人で村を夜出発したのでした。名古屋まで約十里の道を、夜通し歩いて、朝七時頃名古屋に着き、奉公先の大池紙店に行くと、その店は中央区末広町二丁目の目抜き通りに、間口十間位奥行一丁もある大きな店でした。番頭を通じて主人に会うと、六十才位の主人は、私に一生懸命に働いて二十年位勤めれば。暖簾を分けて紙屋の店を出させてやるからな、と言って私に勘吉と云う名前を付けてくれました。

帰郷２　五十六番目の小僧　何より嬉しい三度の飯

その日の夕方店を終わってから、主人が家族や従業員に引き合わせてくれましたが、その人数の多いのには驚きました。主人側の人に、大旦那夫妻、若旦那夫妻、中旦那夫妻（若旦那の弟の事）子供さんが五人の計十六名、従業人側には支配人格の一番番頭の喜助さんを筆頭に、助の字の付く番頭さんが七人、平の付く手代が十三人、吉の字が付く中僧、小僧が十五人子守り兼小間使いが四人、下働きの女中が三人、井戸の水汲み、薪割りの下男が二人、紙を裁断する裁断係が三人の計五十人、家族と合わせて総計六十六人と

いう大所帯でした。

私は五十六人目に一番下の小僧として、住み込んで奉公する事になりました。いかなる運命のいたずらか、東京へ奉公に行った時は、たった一人の小僧でしたが、今度は五十六人目の小僧でした。

主人に対する礼儀作法は厳重で、番頭さんが教育係となって仕込んでくれたものでした。一番下の吉から平になり、更に一番上の助になって、それから独立して出世をするのは大変な事だと私は思うのでしたが、それは一番番頭さんの歳が六十才位だったからでした。

名古屋へ奉公に来てから間もなく、大正七年の正月を迎えました。この年は欧州大戦が連合軍の大勝利に明けた年であり、諸物価は上向き、商人は好景気に成金続出の年でもありました。その反面一般大衆は、米の値上がりによって、生活が苦しくなり、その結果米騒動の起きた年でもありました。株価の値上がりはもの凄く、投機は盛んになりましたが、その年の暮れには、大暴落となり、一夜成金は、一夜乞食となって倒産者続出で、よく夜逃げ騒ぎのあった、経済界混乱に明け暮れた年でした。私の奉公先大池商店は何代も続いた旧家であり、商法も手堅い卸屋であったせいか。何の変化もなかった様でした。

いずれにしても、私は未だ小さく商売の事は何も分かりませんでした。ただ真面目に働いて上の人から褒められるのが唯一の楽しみでした。東京の寿司屋と違って大所帯なので、三度三度腹一杯食べられるのが、何よりも嬉しかったものです。名実共に大店の奉公で、上下の礼儀はやかましく固苦しいものでした。

次に当時の店の暮らしを書いてみると、従業員はわずかな通い番頭さんの他は全部住み込みでした。従業員が約五十畳位ある店の間に枕を並べて寝るのですが、朝六時頃になると、下男の叩く木の音を合図に飛び起きて、自分の寝具を一纏めにして。大風呂敷に包み、二階の納戸部屋へ運び上げると、直ぐに掃除にかかるのです。この掃除も自然と区分がついていて、上から五人位の番頭さんが、店の奥の間にある御主人夫妻の居間の掃除をする事になっており、その次に位する番頭さんが、店の帳場や商品棚の掃除や整理を

し、次の番頭さんが、店の畳の掃き掃除をする。ここまでが大体「平」の字の付く番頭さんの仕事で、次に「助」の字の付く手代は、店の大戸を開けて商品の陳列やのれん掛けをします。「吉」の字の付く小僧は店の土間や表道りの掃き掃除に、雑巾掛けをするのです。掃除が終わると顔を洗って、初めて朝の挨拶でした。挨拶にも順序があって、一番先に主人の部屋へ行くと、ご主人夫妻は部屋の中央に並んで坐っていられるのでした。その前へ行って、行儀を正して坐り、両手をついて、「旦那様お早ようございます。ごっさま。お早ようございます。勘吉お先に朝ご飯呼ばれさして戴きます。」と朝の挨拶をするのです。その時にご主人夫妻は、挨拶の返事をすると共に、必要な注意や小言を云われるのですが、五十人もの大勢の挨拶を受けられるのだから、さぞ大変な事だろうと思ったものでした。ご主人の挨拶がすむと店へ行き、番頭さん全員に挨拶をしてからやっと朝食でした。

帰郷３　極楽のような奉公暮らし　配達の途中で大八車失う

八時頃になると、通勤の番頭さんや若主人が出勤して、一日の仕事が始まります。番頭さんや手代は市内外のお得意廻りをやって注文を取って来、小僧は注文品の配達を荷車でするのが役目でしたが、私の仕事は車の後押しをしながら、地理とお得意様を覚える事でした。午前中に近い所を二回位配達をして昼食を食べ、午後は遠い所へ配達に行くならわしでした。夕方六時頃になると、店の大戸を閉めて、夕食後帳合をやって八時頃には終了するのでした。家の風呂に入って就寝するのが十時頃で寿司屋の事を考えると、まるで極楽の様な奉公暮らしが続いたものでした。配達のない時等は店番をしながら、全員で障子紙をつなぐ仕事がありました。私はこの仕事が上手く出来るので、時々競争に勝って主人から褒美をもらい、得意がったものでした。紙の裁断にもこつがあって、なかなか難しいもので、大勢いる奉公人の中でも、古い番頭さんがするならわしでしたが、私は包丁を研ぐ度に、くず紙の裁断をさせてもらう事が出来るようになり、注目の的になったものでした。

紙屋に奉公してから数ヶ月は夢の様に過ぎ去り、市内の地理も様子も大体分かり、奉公の要領」も良くなって来た或る日、二年位私より先に来た栄吉

と云う小僧と、一緒に熱田まで午後から配達に行ったことがありました。大八車にちり紙、半紙等のこも包みの商品を積んで熱田神宮の前にあったお得意先へ届けて帰途に着くのでした。帰り道に大須観音の横町に車を置いて、二人で境内にある活動写真や見せ物小屋の看板を見て遊んだあげく、店へ帰ろうと車の所へ戻ってみると、車が無くなって居たのです。さあ大変な事になったと二人共すっかり慌てて、近所の人に聞いたり附近を探したり、大騒ぎをした結果、その車は二十分位前に手代風の人が曳いて行ったということが分かりました。車を持って行った人が大池紙店の者らしい、とすると、二人が大須観音で遊んだことが分かってしまうので、私達は困ってしまいました。私達は賭所に引かれる羊の様に、力なく夕闇迫る大道りをとぼとぼと店まで帰ってみたら、店はもう大戸を下して静まりかえって居ました。店の前に十数台の車が整理されて、その中に私達が曳いて行った車があるのでした。ああよかったと安心すると同時に、恐ろしくなって店へ入れず、途方に暮れて店先でまごまごしていると、折よく番頭さんの善平さんにつかまって、店へ連れ込まれたのでした。車は得意廻りをしていた文助という手代が曳いて帰ったもので、番頭さんは私達の帰りが遅いので、心配していた処でした。二人は番頭さんの前に坐って、「悪い事をしてしもうてすみません。もう決して致しませんから許しておくれやす。」と一生懸命詫びるのでした。

帰郷４　奥の使いも役得の一つ　寿司屋の要領で配達

「今度の事はまだ御主人には内緒にしてあるので、気つけなあかんぜ。お前達のやった事は泥棒と同じに悪いことだで。金や品物を盗むばかりが泥棒じゃない。使いの途中で暇を盗むのも泥棒と同じじゃ。時は金なりと云うてな御主人の時間を盗んだ事になるだ。」と番頭さんに意見をされた事を今でも覚えています。世間には案外この時間泥棒が沢山いるが、自分では悪い事と気づかずにいるようです。私はこの時の番頭さんの意見を守り、時間を無駄にせぬよう心がけて大いに益するところがあったと思っています。この車紛失事件があってからの秋は、配達中で休む時も、車の側を離れずに梶棒に腰を掛けて休むようになったのでした。当時の名古屋は月遅れのお盆でし

た。八月十五十六日は公休で、故郷へ帰る者や、市内へ遊びに行く者で各盛り場は大変な繁盛でした。私は奉公に来てからまだ日が浅かったのですが、一通りの仕着せをもらって、主人から小遣い二円を支給され、喜び勇んで出かけるのでしたが、行く時が大変で、大主人夫妻、若主人夫妻を初め番頭さんに挨拶をして廻るのでした。「勘吉今日はお盆で遊びにやらして戴きます。」と挨拶をすると、「ゆっくり楽しんでいりやせも」と云って、小遣いを少しずつ紙に包んでくれるのでした。私は平常家族の人達に可愛がられていたせいか、ひと廻りしたら、三円程もらいがあったものでした。喜び勇んで店を出掛けたのが八時頃でした。名古屋市内は東京と違って遊ぶ場所も少なく、大須観音境内で芝居か活動写真を見る位のものでした。私は前から約束のしてあった父の妹の嫁ぎ先である熱田の叔母さんの所へ遊びに行くと、家中で朝から御馳走を作って待っていて、大歓迎を受けたものでした。午後から叔母さんに連れられて活動写真を見せてもらって、夕食を済ませて店へ帰ると八時頃でした。御主人や番頭さんに帰った挨拶をして、寝ながら今日一日の楽しみを手紙に書いて、故郷の父母に報告するのでした。使った金を計算してみると、叔母さんにみんな出してもらったので、一銭も使っていませんでした。明日は皆貯金をすることに決めて、夢路をたどるのでした。

　紙問屋の営業も真夏は割に暇で、秋の彼岸前後から急に忙しくなって来るのでした。この頃では可成り重い荷物も一人で積み降ろし出来る様になり、従って配達も一人で行く事が多くなって来るのでした。一里二里と遠い所へも百五十貫位の荷物を大八車に積んで一人で配達する時等、行きは重いので骨が折れたが、帰りは空車で楽なので、東京で寿司屋の買い出しに行った要領で、ガラガラと走って帰るので、私の配達が早いと、主人や番頭さんから褒められましたが、他の配達仲間の小僧からは、意地悪されたものでした。小僧生活の内でも奥の用でお使いに行くことは、役得の一つであり、楽しみの一つでもありました。奥さんの御用で親類へ届け物に行く時等、必ず駄賃を紙に包んでくれるものでした。誰でも奥の使いは喜んでしたがるものでしたが、私は遣いが早いというので、よく使いを頼まれたり、又御供をして出かけることが多くなり、その度に小使いを戴くのが楽しみでもあり、幸福な

小僧生活が続きました。巻き紙や障子紙作りも楽しみの一つでした。雨降りで配達のない時や、店の暇な日は、全員で広い店の間に板張りを並べて、裁断された紙を一定の数だけ連ぎ貼りするのですが、慣れると面白い程上手に出来ました。今と違って昔は巻紙と障子紙は随分売れたものでした。

再上京１　人生の転機つかむ　再び上京して綿布問屋へ

　或る日配達から帰って来ると、急にぞくぞく寒気がして、体がだるく風邪でも引いたらしい様子なので、番頭さんに話して早めに二階で寝てしまいました。広い広い海高い山、奇麗な花が野原一面に咲いている野原へびがうようよといる沼、鉄棒を持った赤鬼青鬼、ああ怖いと思った途端に、体がすうっと空中に浮かび上がる。ああ良かったと思った瞬間に真っ逆さまに墜落する。まるで地獄と極楽の交響曲である。誰かに名前を呼ばれた様な気がしたので、飛び起きようとしたが、体中を畳に縛りつけられた様で、身動きも出来ない。変だなあと思って目を開けてみると、私は床の中に寝ていて、枕元には父が坐っているのでした。父の話によると、私が風邪を引いて寝てから朝になって、番頭さんが様子を見に来ると、私は四十度以上の高熱で、うわ言を云っていて、意識不明の状態だったそうで、驚いた番頭さんが、すぐに主人に報告し、医者を呼んで見せたのですが、急性肺炎で危険だという見立てに驚いてご主人は、使いを走らせて父を呼び寄せたのでした。それから丸三日間は熱は下がらず、その日になって初めて気がついたのです。今でこそペニシリン等で、割合軽く済む肺炎も、昔は命取りの病気でしたが、父に連れられて故郷に帰り療養に務め、全快まで三ヶ月もかかった程でした。私は今までに死線をさまよった事が三回ありますが、この時が第一回の死線を突破した時でした。

　思わぬ大病によって挫折した私の運命に、一大転機がやって来たのは大正八年でした。大正五年四月一日、遠大なる理想を抱いて、大東京に来た私は、雄図虚しく破れて故郷に帰り、中京名古屋に奉公して又病に倒れ、前途に暗雲立ち込めたる時、突如として現れたる一筋の光明がありました。その光明とは、私が再び東京に行ける道がついた事でした。当時日本橋小舟町の

木綿問屋山田商店の店員で会った長兄が、外交先のお得意様でした神田岩本町三十番地の綿布仕立物卸商福田勝太郎商店から、小僧を頼まれたので、私の事を話すと、すぐに話がまとまり、上京する事になったのでした。初めて東京に来た時から、三年目の大正八年四月一日夕方、福田商店へ到着、奉公する事になりました。この福田商店の当主は、二代目に当たる人で、先代の福田勝造と云う人が、若い時に埼玉県から出て来て、岩本町で仕立物卸を開業して成功を納め、土地家屋を各地に所有する資産家でしたが、二代目になってから、商売は余り熱心ではなく、地代や家賃の上がりで、楽な生活をしている様な状態の家でした。店員も斉藤千代松と云う二十才位の手代が一人しか居ませんでした。家族はなかなかの大所帯で、主人夫婦に先代の奥さん、主人の妹さんに元店の番頭さんを養子にして店を任せていた人（数年前に病死）の子供一人と、主人の子供五人、女中三人でした。店舗は現在の岩本町八番地電車道の滝清釦店の位置にあり、奥の部屋は今の昭和通りの真中辺り、広い庭のある大きな住宅でした。主人は当時四十五才で、大家の坊ちゃん育ちと云うにふさわしい人格者であり、囲碁が道楽で強く、三段位の強さで、毎日二階で碁を打って居たものです。兄妹は全部で五人あり、主人が長男で後は女ばかり、私が奉公に行った時は、もう皆他家へ嫁いでいましたが、何かあるとその人達が、夫婦に子供を連れで集まって来て、広い住居も狭くなる程の賑わいで、中には三四日も泊って行く人もあって、物入りは大変なものだったと思われます。

再上京２　勉学の道拓かれる、福田商店での毎日

私は主人の許しを得て、現在の千桜小学校の夜間部へ通学する事が出来る様になり、同校を卒業後更に主人の進めにより、東京商工学校の商科に進学する幸福を喜んだものでした。夜学とは云え、義務教育を終え中等教育を受けさせて戴いたご恩は、一生忘れる事は出来ません。なおその上に私を初め兄弟全部が、福田家より習い覚えた仕立物製造卸の技術により、一家を成し生活させて戴いている職業指導のご恩に対して、感謝を捧げると共に、これを次の若き者達に引き継ぎ、導く覚悟であります。

又例によって第三回目の奉公先である福田商店の日常生活を述べる事にします、店に住んで居るのは、斉藤と云う店員と私に、主人の妹さんに娘さん（神田女学校二学年在学中）お春と云う十六才の女中の五人でした。主人は午前中だけ裏の住居から出かけて来て手伝い、午後は帰ってしまうのでした。朝五時頃に起きて掃除を済ませる時分になると、お客様が来始めます。九時頃になると客足が遠のき、その時分を見計らって朝食を済ませます。十二時頃までお客様はボツボツ見えますが、お昼過ぎは皆無です。昼食後店に裁ち板を出して裁断をし、四時頃になると職方が製品を持って来ます。品物を受け取り、裁断地を渡し、店を片付けて大戸を下して一日の仕事が終わるのでした。今考えると当時の商売は誠にのんびりしたものでした。営業品目は股引、腹掛け、シャツ、手甲、脚絆、袴、厚司、長半天位のもので、生地も木綿に限っていましたし、種類も極く僅かでした。夏より冬は需要が多く、八月頃から秋冬物を一定の生産量を造り溜めて置くと、十二月には一品残らず売れたものです。洋服は毛織物既製服製造卸の領分で、ズボン類を綿布で造る様になったのは、関東大震災を境にして急速に製品需要が変化してからの事です。下帯がメリヤスの猿股に変わって、上着も変わって来たのでした。

再上京３　勉学の道開かれる　福田商店での毎日

大正八年当時の岩本町付近の地理は、現在とはまるで変わっていて、一寸想像がつかない位です。今思い出すままに当時の状況を記してみましょう。先ず中心をなすものは和泉橋です。現在位置の東側に巾三間位の木橋で、やや太鼓型をしていたと覚えています。電車の線路は橋の西側に鉄橋を掛けて通し、現在の線路を千住大橋から土州橋まで通しており、一方九段方面から来る電車は須田町から、今の鉄道博物館の横を通り、万世橋で交差して、土手通りを和泉橋で交差、柳原通りを真直に浅草橋の袂で交差して両国橋上へ出ていました。この土手通りは道巾は現在のままですが、電車の線路が川寄りに片寄せてあり、電車線路にだけ敷石が置いてあって、その他は舗装もされてなく、雨でも降ると泥田の様な悪い道でした。しかし、片側には有名な

ツルシンボウの古着屋、洋服屋が軒を連ねて、朝早くから夜遅くまで繁盛を極めていたものでした。川寄りの片側は、舟からの荷揚げ場や赤煉瓦の倉庫等があって、大昔の柳原土手風景を所どころに残しており、又川の向こう側は米屋の倉庫がぎっしり建ち並んでいたものです。和泉橋の西河岸に和泉小学校があり、橋の袂から学校の板塀にそった空き地に、古着屋さんの露店や人力車の溜り場があって、昼間は常に雑踏を極めていたものです。現在の岩本町都電交差点付近は、最も変化の大きかった所であり、関東大震災後の区画整理によって、昭和通り、大正通りが完成した為に、昔の岩本町の大半を道路に取られてしまい、竜閑町と合併して現在の岩本町を形成したわけです。和泉橋から南にかけて電車通りの西側、今の昭和通りの道路の中程辺りまで一帯に、木造平屋建ての大きな古着市場があり、その向かい側現在の特調ビルの所に第二市場があって、朝早くから出店者が商品を持ち込み、午前中に取引を終わるのが常でした。この古着市場の歴史は古く、遠く徳川家江戸開府時代に、当時府内を荒らし廻った甚内と称する武士崩れの三人の泥棒がありました。時の役人は苦心の末、彼らを逮捕しましたが、処刑に当たって、時の為政者はこれを赦し、毒を以て毒を制する妙手を考え、一人を今の人形町付近の葦の密生した湿地帯を与えて、市内に散らばっていた街娼を一ヶ所に集め、遊郭を開いてその取締に任命したのです。後に付近が非常な発展をするに及んで、目障りになって来た時分に、大火があり、遊郭は全焼してしまいました。徳川幕府は再築の許可を与えず、当時府外の入谷田圃の日本堤下に換地を与え、尚その上に莫大な立ち退き料を払って強制疎開をさせ、往事の新吉原を開かせたのです。現在も大門通りと云う商店街を結成して、昔の吉原を懐かしがる粋人が多いのには、地下の吉原開祖甚内先生もさぞかし御満足の事であろうと思うわけです。富沢甚内には吉原の隣地、今の日本橋富沢町に土地を与えて、古着市場を開かせて、その取締となし、高坂甚内は浮浪者（今の愚連隊）の取締をさせ、治安の実績を擧げたものでした。この高坂甚内は十人力もある強い男で、後に悪事を働いて役人に追われる身となりましたが、腕力が強くてなかなか捉えられず困っていると、或る時甚内がおこり（中風）になって寝ている処を難なく逮捕して、鳥越の刑場で磔の刑

に処せられたのです。甚内は悔しがって、自分に病さえなかりせば、木っ端役人共にむざむざ捕まるのではなかったに。大勢の人我を頼め、我が思いでおこりを直してみせる。云々と、今も甚内は鳥越神社境内でおこりの神様として人気を集めている由です。今はないのですが、甚内橋という小さな橋がありました。一方富沢甚内によって創立された古着市場は種々変化を生じながら発展し、明治初年まで日本橋富沢町にあったものを、東京市が岩本町に移転させたのだと思われます。以上は私が風聞によって得た事で、正確でない事をお断りしておきます。

再上京４　主人の留守に意地悪　大喧嘩して一人残る

古着市場を中心に、毎朝活発な商取引が行われていたのですが、私が奉公に来た大正八年時代には、古着市場と云っても、半分以上は新しい物で、既製品を売っていたものです。市場の出店者は種々雑多で、二百店位も有ったと思いますが、駒割の権利を持った出店者は、大風呂敷で商品を背負って来るお婆さんから、大八車に籠に入れた商品を何十個も積んで、大勢で運びこむ大問屋までありました。取り扱い商品もボロ古着から、中古着、又は新しい花嫁衣裳まであり、呉服屋あり、洋反物屋あり、寝具屋に洋服屋、綿布仕立物屋に布帛メリヤス屋等、衣料品全般に亘って販売されていたものです。中でも面白い事は、新しい物より古い物に人気があって、良く売れたことで、古い物は誂え物の質流れで、上出来がと云う訳で高く売れたので、そこで古着屋さんは、新しい既製品を仕入れて、少し古くして売るという様なインチキをする者もあったくらいです。

当時の労働者の服装は、職人は盲縞の紺股引に腹掛伴天姿が一番多く、その他は三綾か相棒のシャツ、股引に木綿縞の着物姿であり、商人はくり衿シャツに七分股引き、その上に印半天に着物、角帯に前掛という云う時代でした。洋服を着る人は極く限られた勤め人か、贅沢な人の余所行き姿でした。

現在の被服業者の前身である、綿布仕立物商は、神田と日本橋に僅かしかなかったものです。古い店では、松本大貫商店、大草商店、福田商店、安藤商店、斉藤商店、横山商店、三浦商店、沢井商店、池田商店、田嶋商店等が

あり、上記の店で現在まで続いているのは、僅かしかないが、今は二代目の時代であります。又店員であった人が多数現存して、吾が被服業界の中核をなしているのであります。

私は十才の時に上京して寿司屋に奉公し、一ヶ年半を過ごし、更に名古屋の紙問屋で一ヶ年奉公した経験がありますので、今回の奉公は三回目に当り、言葉も礼儀作法も一通り心得ていて、商売の客扱いにも馴れているので、大変主人に可愛がられたものでした。ところが私の上である斉藤という店員が、やきもちを焼いて、毎日の様に意地悪をして、私を物差で殴るのでした。しかし私をいじめるのは、必ず主人の留守の時に限っていました。仕立物の仕事で一番難しいのは、裁断でした。今と違って当時は誠に幼稚なものでしたが、型紙は一切使用せず、物差一本で直接作図をしながら、裁断をして行く方法を、一般に実行していたものでした。使用する生地も大部分が小巾物であり、長さも一反か一疋の長さでした。股式腹掛は花形商品であり、最も難しいものと云われていた時代でもありました。たまに広巾生地を裁断する場合なども、わざわざ二つ折に畳んで、小巾にしてから一足づつ包丁で裁断するという様な、非能率的なのんきな時代が続いたものです。私は生まれつき手先は器用な方で、特に包丁の扱い方が上手で、裁断も一ヶ年位の間に全部覚えてしまう事が出来ました。奉公に来てから一年位経った或る日、私と先輩の斉藤と云う店員と、わずかの原因で、大喧嘩をしてしまいました。主人は非常に困り、仲裁をして両方を宥めたのですが、二人とも意地を張って仲直りをしないのです。前々から斉藤の我儘に困っていた主人は、私を呼んで、斉藤の悪い事は分かっているが、今斉藤が居なくては店が困るから、無理ではあろうが、詫びを云ってくれ、と頼まれたので、私は涙を呑んで斉藤に謝罪したのでした。ところが、斉藤は主人の困ると云う足許に付け込んで、早川を首にしなければ、自分が暇を取ると言い出したので、主人も腹を据えかねて、斉藤を首にしたのでした。そんな事でとうとう仕舞には福田商店には私一人になり、私の責任は重大で、私の為に主人に迷惑を掛けてはならぬと、一層一生懸命に働き出したものでした。

再上京５　十五才で羽織を許さる　理事会に出席し意見を吐く

大正九年秋の九月福田商店へ奉公に来てから一年半経過した時、私は一人になってしまったのです。幸いにして小学校は、優等の成績で九月に卒業する事が出来ました。更に主人の勧めに従い、東京商工学校商科夜間部へ入学の手続きを済ませ、通学する幸福を得た時に当たり、先輩と意見の衝突をして、その結果一人になってしまったのです。主人は店の事は余り関係しない人でしたから、何から何まで自分に責任が掛かって来たのです。私は死物狂いで活躍したものです。仕入れ裁断、販売、配達、発送等、全部一人でやるのです。裁断等で不明な点があれば、夜下職の家へ行って覚えて来たり、自分で工夫しながら、やったものでした。裁断方法も従来の一足裁ちでは能率が上がらず、一人では販売数量に間に合わないので、掛尺機を使用して重ね裁ちをする方法に改め、当時としては一大改良をしたのであります。尚炭坑方面に一部需要のあった炭坑ズボン（乗馬型）や、半ズボンを職方から覚えて来て、製造してみたら、非常に評判が良く、好く売れ出したので、売上高も前年より大巾に増加して、主人に喜ばれたものでした。

大正九年末決算に於いて調査した処、売上、利益共に前年度より良好でしたので、主人も安心して、私に商売を総べて一任される信用を得たのでした。大正十年私は数え年十五才を迎え、名実共に福田商店を背負い立つ番頭として、羽織を許されたものでした。昔は二十才にならなければ、羽織を着る事は許されなかったものでしたが、私の場合は、主人の代理に色々な仕事をする関係上、早く羽織を着せて信用を付けさせる必要があったものと思われるのです。その当時には同業者間の連絡機関はなく、互いに我田引水の競争を続けていた時でありましたが、下職関係に東京シャツ縫製組合が結成されて、工料値上げ問題が起きた事がありました。最初は高を括っていた問屋側も、下職組合が一斉にストライキに入るに及んで、大いに慌てて、東京シャツ問屋組合同業界を結成したのであります。この会は戦前まで続いておりましたが、現在の東京被服協同組合の母体であります。その時福田商店も理事となったので、十五才の私は主人の代理で連日理事会に出席して、生意気な意見を吐いた事を覚えておりますが、今考えると汗顔の至りであります。

この時の争議は、下職側の要求を入れて解決したのですが、この様な問題が出ると云う事は、既製品の需要が多くなりつつあったのが原因であります。各業者が自転車を利用し始めたのも、この時分であり、従って着物は不自由であるので、ズボン、厚司が売れる様になって来ました。最近は殆ど見かけなくなりましたが、板裏草履が発売されて、永い間時自転車乗りの代表的履物となったものが、現在ではサンダルに変わっている様に、吾が被服業界の商品も、大正後期よりボツボツ変化を見せていたものが、大正十二年の関東大震災を境にして、全く一変してしまったのであります。

当時のお得意先（小売商）は古着屋さんが多く、古着を売るついでに、股引、腹掛、半天、厚司、シャツ、ズボン、洋服、外套と、衣料品なら何でも扱いました。元来は質流れ品や、素人から直接買った品を販売するのが、本業であったのが、段々お客様の需要に間に合わなくなり、既製品を販売する様になったのです。次に足袋屋さんは、お客様の注文によって、誂え足袋を造るのが本業でしたが、職人の労働着である股引、腹掛を全部手縫いで造って販売していたものが、段々既製品を扱うようになり、重要なお得意になって来たものであります。その他は地方の万屋洋品店でも一部取扱っていたものが、大正末期から昭和の初期に掛けて、作業服（労働着）を専門に販売する専門店が多くなり、商品も股引、腹掛に代って、ズボン、ジャンパー、作業服、連ぎ服の全盛時代へと労働服が一変して来たのでした。

岩本町１　岩本町変遷史　江戸っ子と祭りと朝風呂

我が業界の中心たる岩本町も、種々変遷して来たものです。街も、営業も、人間も、私が岩本町に来てから、過去三十八年間を振り返ってみると、実に大きな変化がありました。これを大別しますと、大正十二年の関東大震災前を前期時代とし、関東大震災後から、大東亜戦争終戦までを中期時代、終戦後を後期時代に分ける事が便宜ですので、この方法を利用させて戴くことにします。前期時代の岩本町は、前にも述べました如く、古着市場を中心に、町内の過半数は、古着問屋、寝具蚊帳問屋、足袋問屋、既製服問屋、綿布仕立物問屋の、いわゆる繊維衣料問屋街を形成していた事は、現在

と似ていますが、商売の分布状態は、まるで違っていて、当時は古着屋、呉服屋が一番多く、次に足袋屋であり、洋服屋でありました。作業服屋の前身である仕立物屋は、一番少なかったものです。旧い店では、松本、大草、福田商店があり、新しい店では、松本商店出身の沢井、広田、大草商店出身の斉藤商店、他に新興売出しの安藤商店だけで、中でも安藤、沢井商店は、ずばぬけて人気があり、販売高を競っていたものでした。その他に竜関町に、シャツの三浦千吉商店があり、大和町には、横山満吉商店がありました。現在我々業界で活躍している小谷野衣料社長小谷野正巳氏や、スマートマン印の徳永商店社長徳永良太郎氏等は松本商店出身であり、豊田被服社長豊田光雄氏、佐貞商店社長佐藤貞男氏、岡本商店社長岡本喜美三氏、田嶋商店社長田嶋林太郎氏、野村商店社長等は、共に沢井商店の出身である。安藤商店の出身者には、神田衣料社長吉岡与助氏や、細野精一氏、江森商店社長等があり、大草商店の出身者には、前記斉藤商店、金子商店、浅田商店等がありましたが、いずれも戦時中廃業して、現在は転業しているのであります。

現在は岩本町に合併されて、在りませんが、当時竜関町と大和町、松枝町の一部は、菓子問屋の集合地帯でありました。駄菓子から上菓子、羊羹、飴玉等種々雑多なお菓子を、製造販売していたものです。朝暗いうちから仕入れ客が集まり、菓子屋の小僧が、見本を入れた菓子箱を持って、右往左往して、他の人は歩けない程の雑踏を極めたものです。町中の設備不完全な家内工業的な製造所である為、夏等は蝿が密集して不衛生なものであったのを、東京市が震災後強制的に錦糸町に移転させたのです。現在の衣料街発展を助長したのも、菓子屋の移転による処が大でありました。飲食店では、今でも有名な、「ふな亀」が、うなぎ専門で、町民に愛好されており、天ぷらでは「天鉄」あり、洋食では気賀亭がありました。寿司屋では、元岩井町の梅寿司が当時から、旨い店として知られ、そば屋には春木屋がありました。

江戸っ子と銭湯は、切っても切れないもので、銭湯は近くに三軒もあって、それぞれ繁盛していたものです。岩本町に和泉湯、松枝町に大黒湯、大和町に大和湯と、それぞれ朝湯会と云うものがあって、朝四時頃から終日入れる様になって居たものです。

江戸っ子に花見、花見は当時リクレーションの一つであり、楽しみの大なるものでした。出入りの職方家族一同で、朝早くから酒肴を用意して、向島、飛鳥山と乗り込んで、一日遊び暮すのでした。山へ行くにも上野から汽車に乗って、王子で降りると云う不便な時代でしたが、面白かったものです。

江戸っ子と祭。江戸三大祭の第一、神田明神の氏子であるせいか、祭は賑やかでありました。岩本町が派手になったのは、戦後の事で、当時は商売柄地味でしたが、青物市場である神田多町や須田町は、名作揃いの台車を引き出し、芸子、手古舞姿と実に立派なものであったが、関東大震災の時に大部分焼失してしまったのは、誠に残念です。夏の花火は、毎年七月二十日頃、両国橋の上下流で、鍵屋、玉屋が技術を競い、町民は花火舟を仕立てて、神田川を下って行ったのも懐かしい一齣でありました。

岩本町２　商売の転向を決意　機械電気学と取組む

前期時代の問屋街は、昼間は多忙でしたが、夜は暇で実にのんびりしていた時代でした。問屋の主人や番頭さん達の間に遊芸が盛んで、時々貸席を借りて、道楽の発表会がありました。松枝町に松月と云う貸席があって、毎晩の様に色々な催しものがありました。私は主人に連れられて出掛けたものですが、一番義太夫が多かった様に思います。支度は立派な見台に袴を付けていますが、芸の方は皆な下手くそでした。然しお寿司や、お弁当を戴いて、義理に手を叩いて褒めたものでした。長唄や清元、新内の会も随分聞いて歩きましたが、中でも私の一番好きなのは、琵琶と声色で、主人も声色が好きで、又非常に上手でした。

或る時、主人が酒の席で声色をやり、お前もやれと云うので、聞き覚えの左団次の声色をやったら、主人より上手だと、大変褒められてしまいました。人の良い主人は、私の声色を聞き、お前は筋が良いから、勉強したら、今に名人になるぞと、私を連れて芝居小屋歩きをしたものでした。二長町にあった市村座や浜町の明治座、新富座や歌舞伎座と毎月見物しているうちに、私も段々好きになり、各名優のくせ、やせりふも上手になって、主人と二人で、筋書き通りに、各配役の声色を一幕やってのける様になりました。

当時早稲田大学出身の沢田正二郎が、新国劇を創立した時分で、沢正の日蓮辻説法や国定忠次の山形屋の場等は、特に印象に残るものがあり、主人は、よく彼を料理屋に呼んだので、私も一緒に沢正の声色を使って、褒められたものです。芝居の他に落語や講談も、随分聞いたりやったりしたもので、昼間は商売、夜は主人の酒席のお供と、官費の茶屋遊びが、約二年間と続きましたが、さすがの主人も、女だけは世話しなかったのは、今でも感心する次第です。

大正十二年の春になって、主人は前々から、自分の家業である仕立物が嫌になって、廃業する決意を明らかにしました。上野桜木町に静かな広い屋敷を買ってあった主人は、岩本町を売って移転すと云うのでした。私の処置については、主人が三つの条件を出したのです。一つ、この商売を独立してやるなら、お得意先と、商売用の道具に看板はやるが、他の同業者へ奉公する事は許さぬ。二つには、これからの日本は、自動車の時代に成ると思う。就いては、自動車屋をやってみたいが、お前が相棒になるなら、自動車屋を起こす考えである。三つには、前の条件が二つ共嫌なら、桜木町へ来て書生代わりに居る分なら、何時まで居ても良いと云うのでありました。色々考えた末、主人の意見に従って、自動車屋になる決心をしたのであります。自動車屋になるには、先ず運転と修理に、機械電気学と、専門的勉強をしなければ、試験が受けられなかった時代で、今と違って中々大変なものでした。そこで大正十二年三月から、品川にある東京自動車学校へ入学して、朝の九時から午後五時頃まで、毎日毎日六ヶ月間通って、見事に試験に合格したのです。１９２３年製の旧式フオードで習った技術は、貴重なもので、今の自動車運転は、技術は不要と断言出来る位精巧になって居るし、修理等も自動車屋まかせで良いのだが、昔の車は運転手が常に修理が出来るのでなければ、車は動かせない位不備なものでした。店の方は春から夏にかけて、廃業の準備を進めて居たので、残品等も全部売り切れて、今は移転を待つばかりで、店も買手が付いて取引も終わり、九月一日朝から荷馬車に荷を積んで、運び始めたのでありました。

関東大震災１　大震災に襲わる　上野の山に続々と避難

大正十二年九月一日、昨日の嵐もすっかりおさまり、気温も上がり、蒸し暑い日でした。第二回の車に残った荷物を全部積み終わって、家の掃除を済まし、新しい家主に引き渡しも終わり、手伝いの人達と最後の昼食に頼んであった、ふな亀のうなぎ丼を食べ始めた時でした。南の方からゴオーと腹を締め付ける様な音が聞こえて来たかと思う間もなく、グラグラーグラグラと地面が揺れ始めたので、慌てた私は表に飛び出した。しかも、片手に食べかけのうなぎ丼をしっかり持っていたものです。外へ出て家を見ると、屋根瓦がガラガラ落ちて、土煙で目も開けていられない様な状態です。道路は車と人で溢れ出した大水の様な騒ぎで、一時はどうなる事かと心配でしたが、地震は約十五分位で治まりました。しかし、附近の家々は満足なものは一軒もなく、電柱さえ倒れている有様でした。地震の大きさに急に恐ろしくなり、私達は最後の荷物を積んだ車を引いて、上野桜木町へ向かったのでした。途中の道路は、運び出された荷物や人で、ごった返しの中を、二時間程かかって、上野の移転先へ着いたのでありました。もうその時分には、市内各所から出火した火の手は、猛威を奮い、消防も自由に活動できず、燃えるにまかせる有様でした。上野の山には、焼け出された避難民が、次から次へと押し寄せて、さしも広大な山も人と荷物で埋まる程でした。地震と同時に、電気は停電、交通通信は途絶、次々と襲う余震と火災におびえ切った市民は、不良朝鮮人の暴動があって、子供が惨殺されるという、流言蜚語が伝わって来たので、各町毎に自警団が組織されて非常線を張る始末でした。私も狩り出されて自警団の腕章を付けて竹槍片手に、夜通し警戒に当ったのでした。

夜になると、東京市内は山の手を除いて全市一面に火の海、空は真っ赤になり、次から次へと燃え広がる火事に、民衆は無関心如くに、我が家を捨てて黙々と広場を求めて避難し、その列が続々と続くのでした。上野の高台から見ていると、実に静かな感じがするのです。家や町が焼け、人が死んだり片輪になったり、肉親や親子が生別死別しているというのに、不思議な程静かです。この世の終わりを宣告されて、諦め切った人間の姿の様に、泰西の名画ミレーの晩鐘を見る様な、錯覚に捕われたものです。昼間の疲れで、火

事を見ながら、私は何時の間にかそこで寝てしまいました。目が覚めた時は、夜が明けていて、赤い火は黒い煙と変わり、所々が広い焼け野原となっているのが目に映りました。福田家には焼け出された親戚知人が、数家族も避難して来たので、庭にまで急造の小屋を建てて、寝起きをする事で、解決はついたのですが、食料はたちまち困って来ました。早速近所の米屋、乾物屋、酒屋等を廻って、手当たり次第に買い集めたが、主食になる物は皆売り切れて、手に入らないのでした。
主人の奥さんの実家が、埼玉県の大門村にあり、可成り大きな農家なので、主人の命令で車を引いて、米の買い出しに行く事になり、三日の朝早く、私と主人の長男に、避難をしている親戚の人と、三人で車を引いて出発したのであります。谷中通りから、道坂、神明町、上富士町、駒込、王子、赤羽と、避難者と車で雑踏する中を歩くのは、大変な骨折りでした。この道中の両側の地は火災は無く、地震による被害も割合に少ない様でした。川口町から鳩ヶ谷を通って、目的地大門村に着いたのは、午後二時頃でした。朝七時に出て、七時間歩き通しの私達は、空腹と疲れで、ヘトヘトになっていたのです。奥さんの実家の人に、手紙を出すと、親切に労われて、すぐにご飯を御馳走になり、実に生き返った様になったものでした。実家の人達は、今日は泊って明日帰ったらと、云ってくれましたが、大勢の人達が食べ物が無くて困っているのを思うと、直ぐに帰る事にして、米やら、うどん粉、味噌、醤油、野菜等を一杯車に積んで、帰路についたのは、午後五時頃でありました。

関東大震災２　東京は三分の二を焼く　人ごみに母を見付ける

　車に積んだ宝物？食糧を満載した車を引いて、一人が綱引く一人が後押し、私が梶棒で、元気よく意気揚々と東京目指して帰るのでした。赤羽辺りまで来ると、暗くなって来ました。東京の空は真っ赤です。所々にある自警団の警戒線で尋問されるので、手間の掛かる道中でしたが、無事に上野へ戻ったのは夜中の二時頃でした。食糧が着いたので、家中皆んな元気になり、大喜びでした。三日三晩焼け続けた火事も、四日の朝方には、自然に収まった様であります。関東地方には戒厳令が敷かれ、武装した軍隊が地方か

ら上京して、自警団に代って警備に付いたので、治安も回復に向かって来ました。報道関係も全部焼けてしまったので、新聞もなく、全体の状況は分からず、、不安な思いで暮らした三日間でしたが、四日に初めて号外が出て、被害が意外に大きいのに驚いたものです。静岡県、神奈川県、東京市が最もひどく、関東一円に及んでいる事が分かりました。中でも横浜市と東京市は市内の三分の二を焼失し、死傷者二十数万に達する災害と発表されているのを見て、急に親兄弟の事が心配になり、私は主人に暇をもらって、当時日本橋箱崎町四丁目に住んで居た両親の家を、尋ねて見る事にしたのであります。桜木町から坂本町二丁目へ出て、上野車坂附近までは焼け残って居ましたが、上野駅前から神田方面は一望の焼野原となって、見通せるのでした。ところが不思議な事に所々島の様になって、焼け残った場所があって、何事も無かった様に、人が住んでいるのでした。風の加減か防火の力か、実に妙な焼け残り方でした。道路は電線や焼けトタン瓦等で足の踏み場もなく、又所々に焼け残りが白煙を上げてくすぶり、その中を和泉町まで来ました。
この附近は神田川まで相当広い区域が残っているのでした。和泉橋の上に立って見渡すと、電車通り両側に掛けて北の方、佐久間町、和泉町、練塀町が焼け残っていて、南の方は全部焼けており、焼け跡の水道管から水がチョロチョロ出ており、焼け残りの金道具を掘り出している人や、立ち退き先の立て札を立てている人や、焼け跡を片付けて、附近から焼けボックイや焼けトタンを集めて、小屋を造っている人もあり、早くも復興の意気のある人達を見て、私は感心したものであります。

　九道橋の所まで来ると、川の岸に死体があるのを見ました。今まで気が付かずにいましたが、何処の川にも無数に死体があり、まだ、人手が足りず、手がつけられないのだそうです。通りがかりの人の話では、本所、深川は、最もひどく道路一面に焼死体がころがっているので、車も通る事が出来ないとの事。又本所被服廠跡には、三万人からの人が死んでいて、死体の山が出来ているのを、今見て来たとの話に、私はビックリしてしまいました。天災とは言いながら、一瞬のうちに尊い生命を奪われた犠牲者は、誠に気の毒に堪えないものがありました。私は思わず口に出る念仏を称えて、両手を合わ

せ心より死者の霊を弔うのでありました。小伝馬町から人形町土州橋へ来て見ると、一望の焼野原で、ガッカリしながら、両親の家のあった所までたどり着きました。見ると小さな木の札が立ててあって、家族全員無事、宮城楠公銅像前に立ち退く、と書いてあるの見て、ほっと安心したのでした。それから、私は直ちに宮城前に行って見ましたら、あの広い広場は、避難民で一杯で、足の踏み場も無い程の雑踏で、芝生にござやむしろを敷いて、松の枝に焼けトタンや天幕を張り、夜露をしのぐ工夫をして暮らしているのでありました。紙や布に両親や知人の名前を書いて、探し求める人々の声で、大騒音をなしている有様でした。私は人込みを掻き分けて、目標の楠公像附近を探し、母の姿を認める事が出来ましたので、思わず「おっかさん」と大声を張り上げて走り寄り、「おっかさん、皆な大丈夫か」と母の手をしっかりと握り締めるのでありました。

関東大震災３　母の決意で東京に留まる　道路に戸板で商売

大正十二年と云う年は、早川家にも私にとっても、実に記念すべき意義深い年でありました。この年の二月に長兄秀一は、奉公先である山田商店を退店して、日本橋箱崎町四丁目に世帯を持ち、独立開店する事になり、今迄故郷の三河で農業をしながら、上京出来る日を一日千秋の思いで、待ち焦がれていた父母や弟を呼び寄せる事になりました。前から準備していた父は、先祖伝来の田畑や家屋敷を処分して金に換え、家財道具も東京に送って、背水の覚悟を決めて、二月四日に上京したのであります。丁度その日に父母達が、東京駅に着いた時分に、駅の構内に火事があり、大騒ぎでした。東京に来る早々に火事に出会った両親は、全く驚いてしまったものです。

兄と父は協同して木綿問屋を二月十二日に開店し、業績も上がり生活も安定しかけた六ヶ月目に震災に会い、全てを失くしてしまったのです。父や兄は放心した様にがっかりしていましたが、母は割合にしっかりしていて、何事も仏様の思し召しであり、宿縁であるから、元気を出して新たにやり直そうと、父や兄を励ますのでした。故郷の親類達は、又国へ戻って来る様に、色々親切に云ってくれましたが、母の決意は堅く、東京に留まる事になりま

した。

宮城前の避難先から、当時建築中であった、明治神宮外苑の競技場に移り、更に神田明神前へ変わりました。その間父は一人でコツコツと焼跡にバラックを建てていました。家族が全部箱崎町に戻ったのは、十月中旬頃でした。元々小資本で始め、丸焼けとなり、更に減少した資本で再興を計る兄の商売は、非常に骨の折れるものでした。震災後の東京は、復興計画に区画整理の発表があり、各地より復興資材や救援物資が送り込まれ、大勢の建築業者が地方から乗り込んで来たので、仕立物の需要が急激に増大したものです。岩本町の衣料品問屋は、大多忙を極め、特にズボン、シャツの売れ行きが盛んになって来たのであります。岩本町付近の復興は、以外に早く、焼跡にまだ建築も出来ないうちから、道路に戸板を置いて、その上で商売を始める程でした。焼け残った下職関係は、連日徹夜で製造しても追いつかない程の注文で、我が世の春とばかりに資産を残した者が多かったのです。従って問屋側も利益が多く、震災に依る損害も瞬く間に取り返し、繁盛を極めたものでした。市内の大半を焼失した痛手に、全般の復興計画は中々捗らず、焼土の処分と交通の整備は、手間の掛かる仕事でした。東京市が円太郎バスと悪口を云われた乗合バスを走らせて、市民の便を計ったのもこの時分であり、東京の電車は満員電車、いくら待っても乗れはせぬ、たまたま来たかと思うたら、だめだめと手を振って、何だ故障車かボロ電めナメチョンダラギチョンチョンデ、パイノパイノパイ、パリコトパナナデ、フライフライフライと流行歌で悪口を云われたのもこの時分でありました。歌は世につれ、世は歌につれ、と云う諺があるが、その時分盛んに歌われた流行歌に、枯れすすきや、籠の鳥があり、災害に打ちのめされて住むに家無く、同居生活を余儀なくされた人達や、一時的に希望を失った市民の気持ちが表現されている様に思われます。

私は上野桜木町の主人の家で、震災後の雑用に追われ、夢の様な三ヶ月は瞬く間に過ぎてしまいました。

或る日主人は、「自分は実に運が良かった。商売に見切りをつけて、岩本町を全部売ってから焼けたのだから、自分の考えが正しかったのだ。自分は

現在遊んでいても、一生食べて行ける財産を金に替えてあるから、今更危険な商売をするのが嫌になったから、自動車屋を開業するのは、取り止めだ。」と誠に無責任な事を云われたので、私はがっかりしてしまいました。前にも述べた様に、仕立物は全盛の波に乗っている時であり、独立するには絶好の時期ではありましたが、何と云ってもまだ十六才の私は、独立して一人で商売をやって行く自信が持てなかったのです。

関東大震災４　第二の死線を突破　病癒えて兄達に協力

震災後三ヶ月を過ぎた頃私は又運命の岐路に立たされたのです。独立か、奉公か、転業か、実に困りましたし、又迷ったものでした。その時お得意様であった田村松太郎氏が、下谷練塀町の焼け残った自宅で、製造卸を始めたので、是非仲間になって手伝ってくれと話があったし、又一方では兄が再開した木綿問屋も、資本が少なく、回転の早い仕立物に転業したいから、協同でやってくれと頼みに来たのであります。私は主人の勧めで習い覚えた、近代事業の自動車に魅力を感じていた時なので、なかなか決断がつかずに迷ったのです。或る日母が尋ねて来て、「お前は自動車屋になりたがっているそうだが、あんな危険なものは是非止めてくれ、若し人でも轢き殺したら、一生その罪を心に背負って暮らさなければならないのだ。」と、涙を流して止められたので、一層悩んだものでありました。そうした時分に私は何となく健康が優れず、毎日微熱が続いて顔色も悪く、息切れがするので、医者に診てもらったら、急性肋膜と診断されて、直ちに入院する事になりました。震災者救助対策として、済生会病院が、下谷入谷町に、バラックで大きな分院が設置された時であったので、私はそこへ入院する事が出来ました。病名は左乾性肋膜炎で悪くすると、肺病になる恐れがあり、絶対安静療養を要するとの事でありました。原因は心身過労と不規則な生活が病を誘発したものでした。入院以来毎日体温計と首っ引きの病床生活が、約一ヶ月も続いた頃に、ようやく病院内を歩き廻る位に快方に向かいましたが、退院は中々許可になりませんでした。医者の云うには、君位の年令は一番大切にしなければならない時だから、今充分療養しておかないと、再発の恐れがあるから、僕

が良いと云う迄、気持ちを落ち着けて入院している様に、と忠告されたものであります。病院は施療であったから無料ですが、小遣いは相当にかかり、心細かったものです。約三ヶ月病院生活をして、大正十三年三月初旬に目出たく退院する事が出来ましたので、改めて主人から正式に暇を取り、医者の忠告に従って、生まれ故郷の愛知県へ転地療養する事にしたのです。母の実家へ遊びに行き、約一ヶ月暮らして、すっかり丈夫に成る事が出来たのです。これが私の第二回目の死線を突破した事に当たると思うのであります。四月初旬帰京した私は、父母の勧めに従って、兄弟力を合わせて早川家再興に当たる事になりました。日本橋箱崎町の家は借家でしたが、その時には家主が新しく、二階建て四軒長屋に新築していた。間口二間奥行五間の上下で四室であった。次兄護正は、十九才で、長兄の勤めた山田商店に奉公中であったが、暇を取り、長兄次兄に私と三人でその名も早川兄弟商会と改めて、父が監督兼助手となり、弟顕則が小僧となって、営業品目も、広巾、小巾、木綿並びに綿布仕立物卸商として、再出発しました。
ミシン縫製の下職も募集し、私が裁断、販売、と、営業を開始すると、製品は面白い様に売れたものです。間に合わない時には、他製品も仕入れて販売しましたが、自家製品は自信を持って売れますし、且つ利益も多かったので、長兄や父も生地を止めて、仕立物を手伝う様になり、長兄は裁断まで覚えて、増産に務める様になったので、非常に高調な業績を挙げる事が出来たのでした。私は午前中裁断をし、午後からは、自転車に荷物を乗せて、お得意廻りをして販売するのですが、全部売り切れになる位良く売れたものです。父は自転車に乗れないので、箱車を引いて東京市内の新しいお得意先を、開拓しながら販売するのでした。

　長兄は生地仕入れと、店番をしながら、裁断と帳合を行い、次兄と弟は生地の卸外交をすると云う様に、一生懸命に働き出したので、商売は繁盛し、世間の評判も良く、両親も安心したものでした。こうして平和な暮らしが続いた一年目に、意見の衝突から、兄弟喧嘩を引き起こしてしまったのです。

独立１　兄弟商会を解散　独立して別世帯を持つ

大正十四年三月末、兄弟商会を創立して一年目に、大変な事になってしまいました。利益の分配から、私と長兄と衝突してしまったのです。最初に私が入る時の約束では、利益は父を含めて四人で平等に分配すると云う事であったので、私は大変喜んだものでした。ところが、いざ分配の段になると、私に零である。その理由は、総利益から貸倒準備金、別途積立金、値下り準備金を充分に引当て、更に出資金配当を差引き、その残額を四等分するのでありました。その時の給料が平等に五円であって、兄は酒も煙草ものまず、つましい人ですが、私は酒も飲み煙草も吸い、毎日外交しており、小遣いも掛かるので、毎月十円位余分に前借りしていた訳です。その前借り分を差引くと、私の受取分は零になる計算なのです。父と長兄次兄は、出資してあるが、私は病気の為に、金を使って出資がしてないから、不利な条件になるのでありました。一生懸命に分配金を楽しみに働いて、約三千円位の利益を挙げたのだから、少なくとも五百円位の分け前ありつけると思っていた私は、腹が立って来たのであります。兄に抗議すると、兄の曰く、「規約通りの計算であるから仕方がない」との返事であり、私は更にそれでは、この計算法で行くと、私は何時迄経っても金が出来ない事になる。給料を上げるか、販売歩合にしてくれと話したが、兄は承知しなかった。種々もめた末、兄弟商会は解散して、別々に商売をする事になったのです。父の理想であった共同体は一年にして失敗に帰したのであります。私は当時の事を思うと、父に対して誠に申し訳なかったと思いますが、又今日ある事を考えれば、あれが正しかったとも思われます。何れにしても、性格の違う、競争意識の強い兄弟の協同経営は、お互いに我儘が出てうまく行かないものであります。

大正十四年の四月から、箱崎町の家で変則的な協同生活が始まったのです。父と長兄の組は、早川秀一商店、次兄は早川護正商店、私は早川英俊商店と、それぞれ独立の経営体で競争が始まったのです。長兄は木綿生地と仕立物、次兄は生地専門、私は仕立物専門で、毎日外交販売を行い、各々成績も良好でありました。現在では余り見かけない四つ釦の半ズボンや、編み上げ式半ズボンが、非常に良く売れたものです。大正十五年一月、長兄は、二

十六才で現在の姉と結婚しました。まだ私は二十才でしたが、兄弟が結婚したのをみると、急に女性に対する関心を持ち、独立の所帯、並びに結婚へと、気持ちは躍進するのでした。長兄は間もなく三河島に店舗を借りて、別居する事になりました。私もその年の八月に、下谷竹町十九番地、今の下谷竹町小学校前の路地裏に借家をして、別世帯を持ったのです。その家は二階建で、私は二階に住み、階下を下職であった沢寛次郎に貸して、仕事をさせ、出来た品を私が販売すると云う具合で、誠に都合がよく、四台のミシンで、裁縫する位では間に合わなくなり、ミシンを増設して、工員を募集したのでした。その頃の工員の給料は、男子の熟練工で、住み込み食事付きで、一ヶ月十円から十五円位、見習いの女工さんは三十銭、経験者は五十銭位が相場でした。外交の店員も三人雇い入れ、合計十三名も使用人を使う経営者となって、私は得意の絶頂に、いささか自惚れていたものです。その時分姉妹で王子から通勤していた、ミシン掛けの女工さんがありました。十五才の妹娘の利発な可愛さに、心を惹かれた私は、何時の間にか愛情を覚えるのでありました。金は儲かる、我儘気ままは出来る、毎晩の様に遊び廻ったものです。

その年も暮れて年号が変わり、昭和二年の春を迎えた私は、適齢期に当り、徴兵検査の事が心配になって来たのです。若し合格して入営する事になれば、営業も一時休止せねばならず、不合格になるなら、このまま発展させる方が、得策であるし、その見通しに迷ったものでした。

独立２　良き伴侶を見出す　易者の駄目に益々燃える愛情

昭和二年の頃は世界も平和が続き、軍備縮少時代でした。日本も常備兵力を、陸軍九個師団に縮少を発表した時でもあり、且つ服務期間も、三年から二年に短縮し、尚青年訓練所修了者や、学校に於いて軍事教練を受けた者は、一ケ年半で、帰休除隊を許す制度まで出来た程だから、多分不合格になる事が多いと思ったが、それでも心配でならなかった。友人や知人も心配して、上野池之端にある高嶋易断は百発百中と云う位良く当たるから、見てもらったらどうかと、勧められたので、私は或る日出かけてみたのです。上野池之端に、大きな門構えの高嶋易断本部と、書いた看板の下がっている家へ

入って、先生に会って見ると、広い部屋の中央に、大きな机を前に坐った先生は、私の顔を見るなり、「君は今運命の岐路に迷っているな。」と云われたので、私は自分の悩みを打ち明けたのです。先生は明細に易を立ててやるから、見料を払えと云うので、高い見料を払ったものでした。易の結果は徴兵検査は不合格であるから、商売は続けてやって良いと云うのでした。私はホッと一安心して、次に結婚の事に就いて、易を立ててもらった。相手は王子から通勤している妹娘です。先生曰く、「この縁談は大凶であり成就しない。無理に結婚しても故障が起こり、必ず破談になる。」と云う見立てでした。私は元来迷信は気にしない方でしたが、兵役は逃れると云う事は実に嬉しかった。早速その方針に基づいて、営業する事になり、二月に近所の十七番地に、便利の良い二階建て貸家が空いていたので借り入れ、今迄の家は人に譲って、私は店員と女工さんを連れて、新しい家に入ったのでありました。王子から通勤していた富沢姉妹に住み込んでもらい、食事の世話をしてくれる事になったので、好都合でした。

この家の隣の住人が、現在神田大和町大門通りで営業している高須商店社長の父親、高須治平氏の新世帯であり、ズボン卸を始めて間もない頃でした。今の社長高須真治君は、生まれたての赤ん坊で、子供好きの私は、毎日抱いて遊んでやった事を思うと、面白いものです。高須君とは同郷でり、長兄と同じ山田商店の出身者でもあったので、特に懇意になり、その後永く友情を保ち、交際を続けたものでしたが、不幸にも病の為、大東亜戦争中に病死された事は、誠に残念ですが、彼の遺児達が苦労の結果、親御さんの時代より以上の成功を収めて、営業しておられるのを見て、彼も泉下で喜んでおられる事であろう。

話は少し横道にそれましたが、私は易者に駄目だと云われた事が、妙に反発を感じて、益々妹娘に愛情を感じるのでした。その娘の家は、王子町東十條にあって、父は勤め人、母親は内職に店で乾物屋をやっており、女四人男四人の八人姉弟の次女で、学校は高小卒だが、一年生より卒業まで主席で通した秀才でした。当時はまだ、お下げ髪姿の可愛らしい童顔であるのに、家事の切り盛りから、外交員の品出し入れ、金銭帳合まで、完全にやってしま

うのでした。公休日で従業員が遊びに行っても、自分は留守を守って、掃除をして置くと云う様に、まるで女房気取りの若奥さんを見る様でした。

その頃の私の日課は、朝食後、午前中に裁断を行い、午後から外交、夕方帰って来て又裁断と、実に忙しい毎日の繰り返しでした。外交員三人の販売高より、私一人の売り上げの方が、常に多かったのも、福田家に居た時からの上得意が贔屓にして戴いたお陰であります。京橋八丁堀のH商会やT商店、神田多町のＹ商店等は、私の店で出来る製品は、絶対に他からは仕入れず、無条件で買って戴き、売り上げの良い製品の製造指図までして戴いたものでした。私がジャンパーや作業服を覚えて、安く売り出したのも、以上三店によって得た処が大であり、感謝に堪えない次第であります。この時分は震災後急激に増加した同業者で、競争が激烈になって来た時であります。

独立３　二人で固い決意　喜んで勘当を受ける

昭和二年三月十五日、私は満二十才の誕生日を迎えたのであります。仕事も早仕舞いにして、従業員一同と、赤飯を炊いて、ささやかな祝宴を張りました。住み込みの娘さんや、下職の沢さんの細君や、私の家の品物を専門にブローカーしていた、池内利三郎氏の細君等が、朝から手伝いに来てくれて準備した手料理で会食する楽しさは、又格別でした。過去十年の私の歩んで来た、様々な道程を振り返ってみると、感無量の思いがするのであります。十才で寿司屋の小僧に行って一年半、病気で帰郷、紙屋の小僧一ヶ年で病気、死線突破、再上京して仕立て屋の店員、主家廃業で転業の決意、大震災に遭遇、疲れから病気、療養三ヶ月の後、兄弟商会へ参加、一年後意見の衝突で解散、と、実に目まぐるしい十年間でした。幸いに独立後の商売も順調に行き、資産も出来て一応の安定を見たが、前途を考えると、一抹の不安を感ずるのでありました。徴兵、結婚、経営と未経験な問題が控えていたのです。震災後あれ程好況を続けていた景気も頭打ちとなり、下り坂となって、町には失業者が溢れ、物資供給過剰で、競争が激しく、売れ行き不振となり出し、一方では思想活動が盛んになり、労働争議が起こり、共産主義の弾圧等、物情騒然たる有様でありました。商売も現金販売が減少して、掛け売り

回収が悪く、資金繰りも困難になりつつあった時でもありました。
　誕生祝いの宴も終わって、八時頃には皆んな帰ったり、遊びに行ったりしたので、私と娘さんと二人だけになり、私は彼女に話し掛けたのです。「骨折りをさせて済まなかった。本当にご苦労様でした。ところで、君に一寸聞きたい事があるが、正直に答えて戴きたい。君は私が好きか嫌いか。」と聞いたら、「それはどういう意味ですか？。」と反問したので、私は、結婚を対象としてだと云ったら、彼女は、一瞬びくっと体を震わせて、下を向いて無言でした。…暫くして顔を上げ、「好きです。」とはっきり云ったので、私はほっとしました。「それでは、私と結婚する事を承知してくれるね。」「ええ、でも両親に話して下さってからですわ。」「両親は承知してくれるだろうか。」「多分承知してくれると思います。」「若し、反対された場合でも、僕と結婚する固い決意がありますか。」「…はい。」と、彼女は決意を示してくれました。結婚の約束の出来た二人は、嬉しく恥ずかしく、ぎこちない思いがするのでありました。
　早速翌日、私は彼女に案内されて、上野駅から汽車に乗り、王子へ行ったのです。王子駅から歩いて、王子製紙下十條工場の近くにある、彼女の家へ着いたのは、夕方でした。母親には何回も会っていたが、父親に会うのは、初めてでした。私は初対面の挨拶をしてから、形を改めて、娘さんを嫁に戴きたいと、申し込んだら、父親は、姉妹を預かって置きながら、姉を差し置いて、妹を呉れと云うのは、非常識極まるものだ。第一歳も若いし、又この様な話に本人が直接来る様な人には、絶対に娘をやる事は出来ぬと、断られてしまった。尚そんな処へ娘を預けて置く事は出来ぬから、直ぐに引き取る、と大変立腹でした。次の日に箱崎町へ行って、私の両親に話をしたら、これも反対されてしまった。その理由は、二人ともまだ歳が若過ぎるし、第一自分が使った人を、嫁にする事は、世間体も悪いと云うのでした。私は自分が好きで貰うのだし、もう本人と約束もしてあるし、私は彼女を理想の妻だと思うから、どうしても貰うと言い張ったら、父は怒って勘当すると言いだしたので、私は喜んで勘当を受ける事にしました。分家届けを父の承認を取り、下谷区長宛に分家届けを提出して戸主になったのです。私の主人の福

田勝太郎氏が、上野桜木町の住居を売って、王子駅前に旅館を経営していた時であったので、私は主人に頼んで、富沢家へ正式に申し込んで貰い、福田御夫妻の媒酌で、目出たく富沢智恵子と結ばれる段取りがついたのでした。

結婚と入営１　甲種合格になる　涙ぐんで見送る新妻

　昭和二年四月十六日、この日は、私にとっては生涯に記念すべき、大出発の日でありました。人生に於ける三大出発とは、この世に生まれ出た時と、結婚に依る人生の転換と、死んであの世へ往く時であると云われますが、私はその大二の出発を成し遂げたのであります。福田さん御夫妻に仲介の労を取って戴き、頑固な娘の父親を承知させて、富沢智恵子と結婚式を擧げる事が出来たのです。二十一才と十六才の若い夫婦は、今後如何なる困難苦難に会うとも、必ず人に後ろ指を指される事のない様に努力し、信頼し合って暮らそうと、決意を新たにしたものでした。夢の様に楽しい新婚生活が続いた七月中頃、私の徴兵検査の日がやって来ました。下谷御徒町小学校に於いて、検査を受けた私は、甲種合格になりました。易者の言葉を信じていた私は、籤逃れになるものと、別に気にも掛けていなかったのです。ところが、八月末に突然召集令状が配達されて来たのでびっくりしてしまいました。入隊先は第十九師団歩兵第七十三聯隊で、場所は、朝鮮羅南であり、入隊の為に集合する場所は、大阪で、期日は十一月三十日と誠に悪い条件ばかり重なり合っていたのです。易は見事にはずれてしまった。然し、先輩の話しに依ると、集合場所と兵営で、再び身体検査があり、欠陥のある者は即日帰郷になると云う話です。私は四年前に肋膜炎をやっているので、或いはその時に帰されるのかも分からない、とすれば、易者の言が当たった事になる。準備の期間は三か月しかない。色々考えた末、私は商売を一時止める事に決めて、店員やミシン掛けの就職を世話するやら、商品の処分をしながら、売り掛けの回収を始めたのですが、前にも述べました様に、不景気は益々深酷になりつつあった時で、思う様に集金が出来ないのでした。住んで居た家も区画整理に掛り、立ち退き期日が迫っていた時でもあり、私の留守中に妻を一人で置く不安もあったので、妻の実家の隣地を借りて、小さな家を建築し、

妻に小売をさせながら、私の帰りを待つ様に段取りを付け、一方毎日私は貸金の取り立てに回ったものですが、二百円位の貸金でも、入金は五円位でした。まだくれる家はいい方で、居留守を使う家が多かったものです。さすがに古い取引のあったお得意様は有り難いもので、私が入営の為に商売を止めると聞いて、まだ期日の来ない売掛け分まできれいに払ってくれて、更に残品の処分も有利に手伝って下さったものでした。　お陰で買掛けの借金も一部を残して、支払いが完了したのは十月末でした。まだ未回収の貸金が二千数百円あり、半分入れば妻の生活は安定するので、先ずは安心であると思った。品物を持って売り込みに行くのは、気持ちの良いものですが、払い渋る売掛金を取りに行くのは実に嫌なものです。私は毎日毎日集金に歩いて、入営の日を待つのでした。この時分に次兄は嫁を貰って、神田東福田町に所帯を構えて、作業服卸に転向したので、私の得意をそのまま譲り渡したので、好都合でした。父母達は箱崎町から三河島へ移転して、父は相変わらず箱車を引いて、股引腹掛の仕入れ商品卸をしていたものです。いよいよ入営出発も近づいた或る日、妻から妊娠を告げられ、私は嬉しいやら不安やらで、悲喜こもごもと云う感じでした。十月二十九日夜行で東京駅を出発する事になり、王子の新宅から近所の人々に送られて、王子電車に乗り、三河島の父の家へ行ったのです。父母兄弟と一緒に最後の食事をしてから、親類身内に送られて、東京駅に着き、大阪行列車に乗って行くのです。妻は誠に淋しそうに、後の方で涙ぐんで見送っていた。これから一人で苦労するだろう、可哀相にと私は思うのだった。私達の結婚に就いて勘当までして反対した父母も、入営を機会に総てを許してくれ、嫁は私達が守っているから、心置きなく国家にご奉公してくれと、私を激励するのでありました。

結婚と入営２　寒さに震え異国に上陸　陸軍歩兵上等兵となる

　私の家では初めて兵隊さんが出たのだ。父は名誉な事だと感激していたらしい。東京駅出発の時間を知っていたお得意様や取引先の人達に、友人知人が見送りに集まって来て、激励して下さった。私は軍人としての本分を全うする決意と、見送りに対する感謝の言葉を述べて、挨拶も終わり万歳の声に

送られて車中に入り二カ年の別れを惜しんで、東京駅を出発した。途中故郷の駅で乗り込んだ祖父や伯父さんと、名古屋まで車中話しながら、別れを惜しみ、列車は一路大阪を目指して驀進するのであった。翌朝六時三十分大阪駅に到着、軍から指定された天王寺の宿舎へ入って、集合所受付へ到着届を出してから、宿へ帰ってから寝てしまった。十二月一日午前九時から再検査を受ける為に、検査場へ出頭して検査を受けたら、期待に外れて合格だった。不合格になって、即日帰郷を命ぜられた者も可成りあったが、彼らは喜ぶ風もなく、ガッカリしていたものです。大阪出発は六日で、それ迄に毎日午前中は部隊の編成や輸送中の注意や、当番が決められ、午後は自由行動でした。私は内地と二カ年間の別れを惜しんで同宿の戦友と、大阪市内を見物して歩いたのでした。待ちかねた出発の日が来た。集合所に整列した私達は、隊伍を組んで大阪築港まで行進し、桟橋に横付けされた六千トン級の輸送船に乗り込んだ。小学生や在郷軍人、青年団や市民等の盛大な見送りを受けて、出港したのでした。船室に籠る者は一人も無く。皆な上甲板に集まって、内地との別れを惜しんだものだした。船が風光明媚な瀬戸内海を抜けて、関門海峡を通過すると、波も高くうねりも強く、船は不気味な音を出して揺れ始めたので、船室へ入って寝てしまった。船に弱い人は、金盥を抱え込んで、苦しそうにゲイゲイやっているので、眠る事も出来なかった。玄界灘へ来た頃は、一層激しく揺れて、私も気持ちが悪くて遂に戻してしまった。退屈な三日三晩の航海を終えて、清津港へ着いたのは、九日の朝でした。山に囲まれた小さな北鮮の港は、雪が降っていて白一色、寒さに震え上がった私達は、北極へでも来た様な感じがするのでした。上陸開始。上陸後各部隊毎の人員点呼があって、部隊編成も終り、輸送指揮官の訓示があり、羅南へ向けて出発するのでありました。清津から羅南まで約四里の道を行軍して、部隊に到着、二等兵に迎えられて、各班に分けられ、昼食後身体検査を受けて、合格者に被服が支給された。二年兵の戦友に手伝って戴きながら、軍服を着ると、新兵さんが出来上がるのであった。内地から身に付けて来た物は、荷造りして送り返すか、部隊の倉庫に預けるのでした。私は第五中隊第一班に編入されたのです。十二月十日午前十時、営庭に於いて入隊

式、フンドシ以外は全部官給品で、身を固めた私達新兵は、班長殿や助教助手の二年兵殿に、服装や姿勢を直されながら営庭に整列した。二年兵は全員武装で整列。ラッパの音を合図に、型の如く入隊式を終わり、私達は陸軍歩兵二等兵となったのであります。聯隊長、大隊長、中隊長、班長とそれぞれ訓示があり、その度に「○○以下何名は十二月十日付けを以て、陸軍歩兵二等兵を命ぜられました。ここに謹んで御申告申し上げます。終わり」と何回となく不動の姿勢を取って云うのでした。その夜は赤飯に皿盛の御馳走と酒まで支給されて会食があり、御祝いをしてくれるのでした。三日後に軍事教練修了者の検定試験があり、これに合格して在隊中勤務成績優秀な者は、一ヶ年半で帰休除隊が出来る制度が出来た年であったので、希望者は申し出る様にと班長殿から達しがあった私は、永い小僧生活や、商売で、軍隊の事や、教練の事等何一つ知っていなかったが、早く帰りたい一心で、箱崎町にいた時分、青年団に入っていた事があるので、軍事教練終了はしていなかったが、途中まで受けたからと云って、受験を申し出たのであります。

軍隊生活１　要領本意で試験合格　上等兵候補者を命ぜられる

班長は受けてみろと許可をしてくれた。なお試験の要領を教えてくれたので、私は戦友の二年兵に頼んで、その晩から一生懸命で学科の勉強を始めたのでした。軍人勅諭、歩哨守則、歩哨の動作等を丸暗記するのです。各個教練は特別に助手の上等兵殿に頼んで教えてもらったが、運動神経の鈍い私には無理でした。その間私達新兵は、営内の見学や支給品の受取整理や、中隊長の学科位のもので、まるでお客様扱いでした。十二月十四日試験が始まった。各中隊から集まった受験者は、約六十名で、皆出来そうな緊張した顔をしていたので、私はがっかりして、なるべく後ろの方へ整列したものです。それは要領が分からないから、人のやる様子を見て覚える為でした。最初は不動の姿勢、敬礼、速足行進、左右向け、廻れ右等の各個教練があって、執銃教練、機械体操があり、夜間は歩哨の動作、斥候動作等で第一日を終り、第二日目は学科試験があって、全科目を終了したのでした。私は要領本意でやったので、全く自信が無かったが、積極性が認められたのか、幸運にも試

験に合格したのでした。入隊以来一週間を過ぎた頃、新兵の教練が始まった。班内の生活も一変してしまった。今迄親切であった二年兵が鬼の様に恐ろしくなって来た。起床から就寝まで、戦友の二年兵殿の身の回り全部の世話をしてから、自分の始末をするのです。室の出入り、敬礼、掃除、手入れ、使役、教練、食事上げ、入浴等一寸の暇もない程追い廻され、ビンタを喰わない日が無い位つらい修行期間が、三ヶ月続いてから、第一の検閲が終了して、一息ついたものです。その晩点呼の時に、週番下士官が、命令下達を報告。陸軍歩兵二等兵早川英俊は、三月三十一日付けを以つて、陸軍歩兵一等兵を命ずる。と選抜一等兵の名前が読上げられた時、私は飛び上がらんばかりに嬉しかった。なお同日付けで、上等兵候補者に命ぜられ、候班教育を受ける事になったのです。軍隊と云う所は不思議な所で、私達新兵が一緒に営門をくぐったのは、約二百八十名でした。それを十個中隊に分配して、第一期の検閲まで同じ様に教育し、その中から三割位の上等兵候補者を選抜して、特別教育を行い、その他は一般兵として勤務や使役に使うのです。この人達は大部分が、最後まで一等兵であり、進級の道はないのでした。除隊する時に進級する、営門上等兵もあったが、極く僅かでした。何事も最初の努力が大切ではあるが、軍隊では特に甚だしいと思った。

上等兵候補になってからの日常は、実に忙しく一般演習の他に、候班間稽古と云うのがあって、朝早くから夜遅くまで、教練と学科に縛られ通しでした。班内に帰って来れば古参一等兵に意地悪をされて、ビンタを喰ったり、学科をやらされたりするのでした。日曜休日にもめったに外出する事もなく、班内に居て、妻へ便りを書くのが楽しみであり、又妻からの便りを読んで、気持ちを慰められるのでした。衛兵勤務に就いて歩哨に立っている時等、冴え渡る月を見て、特に故郷を懐かしく思うのです。当時流行した歌に、＃月が鏡であったなら＊＊＊と云うのがあって、私はよく口ずさんで。妻の面影を月に写して見るのでした。

軍旗祭は軍隊に於ける無礼講のお祭りであり、楽しいものでした。各中隊競争で色々な催物をして面白く遊ぶのです。この日は地方人も自由に営内へ入って、見物する事が出来るので、大変な賑わいで、特に婦人の姿には、兵

隊達は大喜びで歓迎するのでした。第五中隊は、新派悲劇「不如帰」を一幕出して、私は浪子の「ばあや」役をやり大好評でした。夜は皿盛りに酒が出て、中隊全員で会食、のど自慢大会で、それぞれ隠し芸を出し合って、夜の更けるまで騒ぐのでした。私は声色や落語をやって人気を集めたが、次の日二等兵に反動をとられて、ビンタを喰らったものでありました。

軍隊生活２　異郷で父親になる　胸を痛める妻の手紙

軍旗祭が終わってから、間もなく第二期の検閲が始まった。中隊教練から大隊対抗演習、陣地攻撃等に、私達上等兵候補者は、分隊長となって参加、検閲の講評も良好であった。六月三十日付けを以て、私は上等兵に進級、伍長勤務を命ぜられた。二年兵の中から、帰休除隊になって帰る者もあり、更に七月十日、後期入営の新兵さんが、入隊して来ると云う、二期入営が始まった時でした。私達前期入営者は、半年で二年兵株になっていたのです。私達より一年前に来た兵隊は、三年兵株で、まるで神様扱いでした。後期兵は誠につらい立場でした。同じ年に徴兵検査を受けた前期兵が仏様で、その上に神様があって、誠に扱いづらいものがあった。私は初年兵係の助手を命ぜられ、続いて候班係の助手と半年間を、教育係として勤務したので、大きな行軍や演習に参加する事はなく、大変楽をしたものでした。入営以来の一ヶ年間は、私の人生にとって一番有益な時期であり、且つ又貴重な体験でした。古参兵が除隊して、又新兵さんが入営して来たので、私達は神様になってしまった。演習と勤務以外は、全部新兵さんと仏様がやってくれるのでした。私達古兵は、満期除隊の日を、一日千秋の思いで待ち焦がれるのでした。満期カレンダーを作って、後幾日経てば、帰れると言い暮らすのでした。私は中隊では先任上等兵となったのですが、教育助手を永くやった為に、機動演習は苦しく余り得意でなかったので、衛兵勤務に回される事が多かった。衛兵指令の勤務は、責任は重いが、身体は楽で、下番日は一日中寝ていられるのでした。私が入営する時に妊娠していた妻は、七月一日に無事女児を出産して、恵美子と命名、母子共に無事であるとの報告を受けたのですが、異郷の空で激しい軍務に就いていた私には、子供に対する愛情は涌いて

来なかったのです。ところが、二年兵になって気持ちが落ち着いてみると、切実に妻子が恋しくなってくるのでした。現役兵で正式に妻子の有る者は珍しく、聯隊内に二人いただけでした。その為に初年兵時代は、二年兵に何かと焼餅を焼かれて、いじめられた私も二年兵になった時には、逆に敬意を表される立場に変わったものでした。妻子の写真や、近況を知らせる手紙も、戦友達に見せて、彼等をうらやましがらせたものです。私達夫婦は早婚であったし、一緒に暮らした期間も短いせいか、異郷の地に分かれて生活していると、思慕の情が特に強くなるもので、恋人同士の様に、激しい文通によって、お互いの心を慰め合うのでした。妻は服務中の私に心配をかけさせない為か、生活事情を余り書いて来ないのが常でした。ところが、昭和四年の一月に来た手紙には、総てが詳しく報告されていて、私を驚かせました。

拝啓、貴男様御入営以来、早二年余りの春をお迎へ遊ばされ、誠にお目出度く存じ参らせ候。毎度のお便りにて、貴男様の益々元気なご様子を拝見致し、嬉しく存じ居り候。又その節の事、私の事、恵美の事ども、種々お尋ね之有候へども、御奉公中の貴男様に御心配相掛申し上げてはと、私一存にて何事もお知らせ申さず居り候。お手紙の度に子供の成長を楽しみ遊ばされる、貴男様を思ふにつけ、私の胸は心苦しく、ついつい御無音になりがちの有様に御座候へば、今迄の事ども御怒りを承知の上で、お知らせ申上げ候。貴男様にはさぞかし御立腹の事とは存じ候へども、何とぞ御許し下され度く、伏して御願ひ参らせ候。実は恵美子事、初産にもかかわらず、割合に安産にて順調に発育致し居り候へども、三ヶ月程経過致し候時より、体にむくみが見え初め、小水も遠のき候等、変調が感じられ、早速岡本医院に連れ参り、診察致し候処、慢性腎臓病にて、用心する様にとの御注意にて、私は誠に驚き居り候。それ以来今日まで、医者も三カ所変え申して治療に専念仕り候へども、はかばかしからず、悲しき事に御座候。少しでも快方に向ふ事を神仏に念じつつ、筆止め参らせ候。かしこ

軍隊生活３　つらかった耐寒行軍 アバジイ上等兵とアダ名される

妻の手紙によって、未だ見ぬ吾が子の病気を知った私は、子供の事よりむ

しろ妻の事が心配になったものです。小柄で若年の妻が、病児を抱えて世帯の苦労をして居る事を思うと、可哀相でならなかった。早速手紙を書いて、妻を激励し慰めたのでした。その後に来た妻の手紙によると、内地は不況が益々激しく、売掛け残金も殆ど入金不能の有様であり、出産病気と引続き出費増大で、手持ち金も残り少なく誠に心細く、子供の看病しながら、ミシン掛けの仕事をしており、石にかじりついても、貴男の帰るまで頑張る決意である、と伝えて来たので、私もほっとしたものです。

朝鮮羅南は、北鮮一の都会であり、師団司令部の所在地であって、歩兵、騎兵、砲兵聯隊や衛生病院があり、兵舎や官舎が建ち並んだ兵隊町でした。夏は割合に暑く、春と秋は短く、冬は永く寒さの厳しい所です。毎年二月になると、耐寒行軍という行事があって、教育中の新兵を除いて全員が参加するのでした。完全武装で雪中行軍をして、露営しながら、七日間歩き通すのですが、実につらいものでありました。防寒服装で重い背嚢を背負って、零下二十度位の山路を行軍する時等、全く泣きたくなる程です。然しうっかり泣こうものなら、大変で、その涙が凍り付いてしまうのです。雪は粉雪で水分はなく、濡れる心配はないが、始末の悪いものです。吹雪の時等は、目も明けていられない程で、軍隊の行動は不可能に陥るのでした。水分は総ての物を凍り付かせてしまうので、油断が出来なかった。又うっかりしていると、凍傷にかかるので、休憩中も常に顔や手足の摩擦運動を続けるのでした。こうした厳しい寒さの後に、二三日暖かい日が続くのでした。これは、三寒四温と云って、北鮮特有の気温の変化であります。つらかった耐寒行軍も無事に終了して、聯隊に帰り班内の暖かいペーチカに向かい合った時は、極寒地獄から一足飛びに極楽へ来た様な感じがするのでありました。

軍隊に於ける私的制裁は、固く禁じられていたが、仕来りで、前から申し送りと称して、二年兵は初年兵を制裁するのでした。幹部は暗々裏にこれを黙認若しくは助長するのが常でした。私は入営してから上等兵に進級するまでの半年間で、百三十九個のビンタを喰らったものでした。お付き合いビンタや激励ビンタは余り気にもならなかったものですが、個人の感情的なビンタは、実に悔しかった思い出があるので、私的制裁は絶対にやらぬと、心に

誓ったものであります。ところが、自分が二年兵の神様になって、新兵を見ると、実にだらしなく見えるものでして、軍人精神を充実させるには、気合いを入れる意味で、時にはビンタもやむを得ないと思ったが、私は自分の信念に於いて、最後まで一個のビンタもやらなかったものでした。その反面相手が得心の行く迄、言い聞かせる方法を取ったので、学科上等兵と云うあだ名を付けられてしまいました。又早川上等兵に学科を喰うよりも、ビンタの方が男らしくてさっぱりすると、陰口を云われたものでした。妻子持ちのせいか、気持ちが老けていたせいか、私はアバジイ（朝鮮語で老人）上等兵と云うニックネームを付けられたものです。私は落語好きであり、割合に上手であった事は、前にも述べましたが、柳家金語楼の自作落語　兵隊　を入営前に覚えていたので、軍隊へ来てから、その内容が余りにも実感的であるのに感心して、密かに研究していた私は、或る時これを発表したら、大変な人気を博して、落語上等兵のアダ名も付けられたものでした。軍隊では、アダ名を付けられる様では余り成績は良くないものですが、私の場合、二年兵になってからだったのは幸いでした。金語楼の山下啓太郎君は、私より二年先輩の歩兵七十三聯隊機関銃中隊の出身者でした。兵営生活の消灯ラッパは、実に懐かしい思い出の一齣です。新兵の時には、小便して床取って寝るのだよ、又寝て泣くのかよ、と、もの悲しく聞こえてくるのでありました。

軍隊生活４　待ちに待った休帰除隊　うまい自由の空気

金五楼の落語で皆んなを笑わせた、二等兵時代には、消灯ラッパも楽しい除隊の数取りに、聞こえて来るのでした。二期入営の朝鮮では、五月末と十一月末の二回に分けて私達二年兵は除隊になる。一日も早く帰りたいのは誰でも同じです。五月の帰休除隊は、全員の注目の的でありますが、発表までさっぱり分からないのが、常でありました。私達は何時発表があっても間に合う様に軍服を注文したり、記念品の盃や手拭を誂えて除隊準備を、完了するのでありました。三月末の或る時、中隊長殿から呼び出しがあったので、直ちに出頭したら、中隊長は一通の封書を私に示して、「早川上等兵誠に気の毒であるが、お前の留守宅から自分宛に手紙が来て、君の子供が死んだ事

を知らせて来た。就いては君が力を落とさない様に、適当な時期に知らせてくれとの事である。去る三月十二日に死亡、十五日に野辺送りも済ませたから、」帰る必要はない。軍務に精励する様に伝言を頼む」と云うことでありました。中隊長曰く、「君の細君は若いが中々しっかりした立派な人だ。君も細君の気持ちを察して、気を落とさぬ様に、除隊までしっかりやってくれ。」と可愛いい子供の死を知らされた私は子供に対する愛惜の情よりも、妻に対する同情の方が強かったものです。その夜は早速子供の霊に対する御経を読むとともに、妻に手紙を書いて、慰めるのでありました。

四月五月の二ヶ月間は演習中も勤務中も、常に除隊後の生活設計が頭にこびりついて、夢にまで見る程でした。

待ちに待った帰休除隊者の氏名が発表されたのは、五月二十八日の聯隊会報であり、五月三十一日付けを以て、帰休除隊を命ぜられた者は、同年兵の内、約三分の一で、幸運にも私はその中に含まれたのでした。手の舞い足の踏む処を知らずとは、全くこの事で、実に嬉しかったものです。然しまだ半年残つて寒い冬を送る、三分の二の戦友の事を思うと、私達除隊組も気の毒で、騒ぐ気にはなれなかったものでした。翌日から早速除隊準備に取りかかり、兵器、被服の返納やら、私物の受領や旅費の支給、軍隊手帳の記入を受けて、永い間住み馴れた班内と別れを惜しむのでした。三十日の晩に班内で送別会をして、三十一日朝に除隊式があり、中隊長を始め、中隊幹部や戦友に挨拶も終わり、荷物を持って、営庭に整列、戦友や新兵さんの見送りを受けて営門を出た途端に、私達は現役軍人から解放された個人の人格を持つことが出来たのでした。思えば、一昨年十二月十日にこの営門をくぐってから、一か年半の永い間、軍規に縛られて、自由のなかった私が、今は全く元の自由になったのです。自由の空気のうまさをつくづく感じるのでありました。種々の思い出深い兵営と別れをつげて、羅南へ到着。他の聯隊から帰る除隊者と一緒に列車に乗って、清津港へ行くのでした。羅南から清津港まで、約四十分位で到着した。港には私達除隊者を運ぶ輸送船が停泊していて、国境方面の部隊から集合した除隊者が乗船していた。私達も桟橋から伝馬船に乗って、沖合にある本船に乗り移り、船室に落ち着くと間もなく船は

出港した。甲板に並んだ私達は、思い出の北鮮に別れを告げて、帰心矢の如く、船足の遅いのが癪にさわるくらいでした。三日三晩の船旅は、自由で愉快で嬉しいものであり、連日ドンチャン騒ぎの連続のうちに、六月四日の朝、大阪築港に到着した。検疫と税関の検査を受けて、上陸解散になった。各人思い思いの方向へ分かれて散って行くのでありました。私は東京に帰る戦友と、一緒に大阪へ行き、乗車券を買って、荷物をチッキに預け、家へ電報を打ってから、市内見物をして、最終の東京行き列車に乗りました。明日は懐かしい両親や妻に会えるのだと思うと、目が冴えて眠る事も出来ませんでした。
故郷の愛知県を真夜中に通過した列車は、東へ東へと走って行く陸軍歩兵上等兵の除隊服を着た私を乗せて、進んで行くのでありました。

苦難時代１　理想を高くかかげて　無資本で出直す

　昭和四年六月五日十時三分私を乗せた列車は、東京駅へ到着したのです。ホームには、前もって通知をしておいた父や兄に、友人達が出迎えて居て、お互いの無事を祝しあったのです。

　一緒に来た戦友達と別れの挨拶をした後、私は出迎えの人達と駅の降車口へ出たら、改札口の所で待っていた、妻や親戚の人に迎えられたのでした。永い間の苦労の為か、妻は面窶れして見る影もないくらいで、病み上がりの様な状態でありましたが、私の無事な除隊姿を見て、ニッコリして、「貴男お帰りなさいませ、御目出とう御座います。」と挨拶する妻を見ると、胸にぐっと熱いものが込み上げて来るのですが、人前もあるので、私は「留守中色々と骨折りをかけて済まなかった。ご苦労だった。」と優しく慰めるのでした。駅前から市電に乗って、王子の自宅へ戻り、細やかな祝宴を張って、久しぶりに妻と語り明かすのでした。妻の話に依ると、不況の程度は、私の考へていたより深刻の様でした。僅かに二か年でしたが、商売から離れていた私には、全く新しく出直す覚悟でなければならなかったのです。無資本の私ではありましたが、幸いに軍隊で鍛え上げた、健康な体と精神が資本であります。大いに頑張り通してやって見せるぞと、決意を新たにするのであり

ました。私は妻に云うのでありました。「私達夫婦は誰の世話にもなる事は出来ないのだ。二人で協力して困苦欠乏と闘い抜こうではないか、努力すれば必ず道は開けるものだ。と云う信念を持ってやり通そう。昔、尼子十勇士の一人山中鹿之介は、『我に七難八苦を与え賜へ、限りある身の力試さん』と実に男らしい宣言をしているではないか。僕たちは両親の反対を押し切って、勝手に夫婦になったのだから、どんな困難にぶつかろうと、泣き言は絶対に禁物である。如何なる苦難も二人だけで片付ける責任があるからね。」妻は「はい、必ず貴男の仰せに従います。」と決意を示すのでありました。

翌日私は乗り馴れた昔の自転車で、親戚知人へお礼に廻りながら、商売の様子を探るのでしたが、不景気である事には間違いはなかった。三四日はお礼廻りや、お得意様の挨拶廻りで過ぎ去ってしまった。

或る日、妻の弟を連れて、近所の映画館へ活動写真を見物に行った帰りに、当時五才位であった真治と云ういたずら坊主の義弟に、「お前は何が一番好きか。」と聞いたら、いきなり、「剣に鉄砲、刺身にたこにバナナ」と一息に並べ立てられてたのには驚いた。「タコは揚げる凧か？」と聞いたら、「揚げる凧と食べる蛸だ。」と六品も注文されて二度ビックリ。こんな小さな子供にも、自分の望みがはっきりしているのを感心し、私は彼の欲望を満足させてやる為に、貧しい財布をはたいて買ってやる事にした。先ず玩具屋へ行って刀に鉄砲と凧を、次に寿司屋へ行って、マグロとタコを食べさせ、帰りに大房のバナナを土産に与えたら、彼は天下でも取った様な喜び様であった事を、今でも思い出す。思う事は必ず何時かは実現する。理想は高きに持たねばならぬと、つくづく感じたものでした。

数日は空しく過ぎた六月半ば、いよいよ商売を始める事になり、王子から東松下町へ移転したのでした。この家は、現在の岩本町四番地昭和通りの裏で、下駄屋の二階でした。六畳と四畳半二間で、家賃十八円便利の良い分かり易い所でした。資本金は軍隊で貯金した百三十円と、残品が二百円程で、他に百三のミシンが一台、外交用の自転車や、営業用の什器若干が再生第一歩の資産でした。和泉町の百瀬ミシン店から、テーラーミシンを二台百五十円、金は後払いと云う事で買い受け、早速職人三人を雇い入れて、一応製造

の形体を整え、名刺も印刷して、営業再開のスタートを切ったのは六月末でありました。

苦難時代２　除隊後の営業再開は　半年で見事に失敗

私が除隊後に営業を再開した昭和四年六月頃は、世界的経済不況の煽りを喰って、日本全土に不景気の嵐が吹きまくっていた。当時の浜口内閣は、高橋蔵相の意見を用いて、金解禁の準備を行いつつあった頃でした。綿布仕立物業界も、関東大震災後の一時的好況に誘われて、新規開店や転業者が岩本町周辺に軒を並べるという有様で、一方外交専門の卸屋さんが、下町一帯に無数に出来て、激烈な販売競争が展開されていた。私の兄秀一は、三河島から三輪の大関横町に進出して卸売りの店を開き、次兄護正は神田東福田町から、地の利を得た松枝町に進出して、ズボン、ジャンパーの専門卸でそれぞれ繁盛していた。そんな中で私は非常に不利な条件で、除隊後早々の営業再開をしたのです。得意先廻りをして見ると、昔馴染みは有り難いもので、初めは義理買いでどうにか販売は出来たが、義理買いはそう永く続くものでもなく、それに商品の種類も段々と多くなっており、小資本の悲しさに、製造販売の経営は、実に困難を極めたものでした。三人の職人が仕立てる製品を持って外交に走り廻り、帰りにはその日の売上金で生地を仕入れて来て、裁断をするという小回りのやり方は、回転も早く小資本で利益の挙る商法ではありますが、それも造った品物が全部売れての話です。ところが、不景気と商品過剰の当時では、なかなか思うようには売れず、別の注文が出るといった具合で、やむなく同業者から製品を仕入れて、得意先に届ける始末だが、それでは利益が薄くて商売にならない。それでも夏場の霜枯れ月をどうにか切り抜けて来たが、秋物に移る段になって、資金関係でとうとう自家製造が難しくなった。当時岩本町に太陽印の作業服で売り出していた、田村商店の主人松次郎氏に事情を打ち明けて、歩引きで商品を廻して貰い、次兄の早川正商店の商品を借り受けて、外交販売に全力を注いだ。然し都合の悪い事に、両店の商品は全部ネーム付きで、且つ現金問屋で、その上に市内に外交員を出している関係から、私が販売しても二分の歩引きだけが利益でした。

市内の得意先を廻れば売上げは多いが、利益は少ない。それで相場に暗い遠方まで足を伸ばして販売するのでした。早朝から自転車に十六貫位の商品を積んで、八王子まで飛び、翌日は市内を、その次は千葉まで飛ぶといった具合で、必死の外交を続けたが、思う様に利益は出ず、毎月赤字を出す始末でありました。不景気は益々深刻となり、仕入れも代金未納から不首尾となり、遂に閉店を余儀なくされ、暮れに迫って神田から、浅草地方今戸町のタバコ屋の二階に逃げ出してしまった。除隊後僅か半年にして商売に失敗した私は、全くの無一物となり、次兄の店には仕入代残金百二十円の焦げ付きを生じてしまったのです。翌日から生活に困るので、田村商店に泣きついてミシン仕事を出して貰い、家内に内職させる傍ら、私は職探しに走り廻ったが、おいそれと職にありつけず、万策尽きて日本橋室町にあった、シンガーミシン会社の月賦販売外交員になったが。半月やって一台も売れず、結局只働きで止めてしまった。次には日本橋橘町にあった、第一謄写株式会社の地方出張外交員の職に就いた。この会社は固定給三十円で、他に販売歩合がつくという話で、出張先も指定されていた。新聞広告で募集した大勢の外交員を、一週間教育してから、十名一組になって、地方へ出張させる仕組みでした。私の組は岐阜県が指定地区で、昭和五年一月に二十四日の夜東京駅に集結された、一行十一名は幹部社員に引率されて出発。翌朝岐阜駅に到着し、駅前横町の安宿が本部に決められた。休憩もそこそこに私達新米外交員は、市内の会社とか、学校廻りに行動を起こしたのでありました。我々新参の外交員は、地図を頼りに岐阜県下の町や村の学校、役場、組合等を宣伝外交し、注文が取れると、相手方の承認判を貰って、これを本社に送るという仕組みでした。原紙や鉄筆インクの注文はあっても、謄写器の注文はなかなか取れるものではありません。

　小型の見本機械を示して、実用新案の長所を説明したり、実演をやって見せて一日がかりでやっと大型一台と、付属品の注文が取れれば大出来で、それが取れた時の嬉しさは天にも登る心地でした。疲れ果てて町の安宿へ泊ったり、村の役場の宿直室に一夜の宿を乞うたり、まるでジプシー生活さながらの旅外交でした。指定された地区を全部廻り終わって、本部へ戻ったのが

二月三日、それから散っていた外交員が集結され、その日の夜行で東京に帰り、本社に行って販売高の整理報告と歩合の精算をして、半月ぶりで我が家に戻り、妻の笑顔に迎えられた時は、それまでの苦労も忘れて、しみじみと家庭の有り難さを感ずるのでありました。

苦難時代３　妻と二人でミシン踏み　釦の露天商人となる

しかし、永く家を離れて出張外交で、飛び廻る様な生活は、私の性格に合わないし、加えて収入の不安定はどうする事も出来ず、遂に意を決して謄写器外交員に別れを告げてしまいました。そして妻と二人で、ミシン仕事を専門に始めました。すると今度は、階下に住む家主から、苦情が出て立ち退きを迫られる始末で、まったくの泣き面に蜂でした。やむを得ず翌日から貸家探しに駆け回り、やっと千住中組町で三間の家を家賃十五円で借り受け、移転したのが三月三日の事でした。安普請ながら新築の一戸建で、猫の額ばかりの庭もあって、住み心地は上乗でした。周囲は広い空き地で、二百メートル程離れて荒川の流れがあり、工場や倉庫の立ち並ぶ間を、帆掛船が望見され、川を上下するポンポン蒸気の音が、のどかに聞こえて来ると云う環境でした。

結婚以来、二人だけの生活というものが少なかった私達にとっては、この頃の生活が一番楽しい思い出となっております。朝から寝る迄夫婦で一心にミシンを踏んでいれば、楽しくも呑気で、食べる事は心配ないのですが、金を残すと云う訳にはいきません。そこで先行きの不安もあって、いろいろと考え抜いた末が、少資本で利益の上がる露天商を思い立ち、或る日、前から取引関係のあった東京一番の、日本橋大伝馬町の板倉釦問屋へ出向いて、ご主人に会って事情を打ち明けたところ、大変同情されて、釦は種類が多い上に、新物を仕入れて売ったのでは、利益も少ないから、半端物やハネ出しを仕入れて、自分で整理して上手に売りなさい。と、親切に手ほどきされ、その場に支配人を呼んで、いろいろと指図をしてくれました。私は支配人にも仕入れ資金の乏しい事を話して納得して貰い、夕方又出直して来なさい、というお約束を戴いて自宅に帰り、夕方改めて自転車で板倉商店へ行ってみま

すと、日本橋の大問屋は大戸を閉めて静まりかえっていました。くぐり戸を開けて中に入ると、店内では大勢の店員が、荷造りする者、帳合をする声で喧騒を極めておりました。私を見た支配人が出て来て、土間に積んである十数個の石油箱を指差して、これだけ出して置きましたからお持ち下さい。と云われるのです。私は驚きの目で一つの箱を覗いて見ますと、中には釦、尾錠、コハゼ等雑多な物がぎっしり詰め込んであり、目方も一箱十貫目はありそうでした。私はお値段は幾らでしょう。と聞くと、支配人はあなたのお持ち合わせだけで結構です。と云う事で、私は持って行った二十円也を支払って、この人情釦を仕入れたような次第でした。実を申せば、私は露天商をやろうと決意はしていましたが、心の何処かに気恥ずかしいものがあった事は、隠しきれません。しかし、板倉商店のご主人の熱い人情に触れてみて私の決意は、キッパリと不動のものになりました。さて十五個の荷物を引き取る方法ですが、持って行った自転車ではどうにもなりません。美倉橋際の貸車屋まで走って荷車を借り受け板倉商店から、釦入りの石油箱十五個を汗だくで、千住の住居まで運んだのが夜の十一時頃でした。翌朝には車を返しに神田に行き、帰りに和泉町と竹町にあった、ボール紙の落裁屋に寄って、屑ボールを買い入れて来ました。その日から約一週間は釦の選り分け整理です。同種類の釦を選別して、ボール紙に縫い付ける仕事ですが、この間は妻も私もミシン仕事はそっちのけで、従って収入はありません。今日にでも露店商いに出なければと、気ばかり焦るのですが、肝心の露天を出す道具もない始末です。そこで材木屋から材料を買い入れて来て、自分で六尺三尺の売台を造り、天幕まで調整して、さて、いよいよ露店商開業の段取りです。

苦難時代４　露店の釦売りで生活に目処は立ったが

さていよいよ　露店商人の第一日が始まりました。古いお得意さんで大沼さんと云う人が上野松坂屋前に夜店の権利をもっておられたので、休んでいる間は使ってもよいと、親切に仰言って下さるので、渡りに船とばかり開業の第一夜は上野の盛り場へ夜店を出しました。手製の売台を組立て天幕を張り商品を並べて電灯をつけてみると、まんざらでもない露店です。腰をおろし

てタバコを一服つけたところへお客さんが来て、十銭の釦を
十個買ってくれました。うれしい口あけ商いでした。その日は午後十一時頃までに八円五十銭の売上げがあり、大喜びで家に帰り妻と祝杯をあげました。二日目は三円、三日目は五円五十銭と一ヶ月間の売上げ平均は五円前後でしたが、雨降りや風のひどい日は休むので、月のうち実働は二十日間ぐらいのものでしょう。それでも月間売上げは百円前後にはなりました。こうして生活もまず安定し、ぼつぼつ貯金も出来るようになって、前途に希望が出てきました。すると五月になって大沼さんがまた夜店へ出られることになったため、大沼さんの権利をお借りしていた私は、露店を張る場所を失ってしまいました。仕方がないので縁日へ出てみましたが場所が悪くて全然商売にならず、場所代を払うと損のいくような日が多いのです。露店商も場所を得ないとこうも違うものかとつくづく感じました。一口に露店商といっても、その内容はピンからキリまであって、なかなか複雑なものです。銀座、上野、浅草、新宿等の盛り場に出店許可をとって出る夜店は、上の部で彼らは毎日同じ場所で同じ商品を売っているのでお客の信用もあり、内店同様に相当の売上げがあるものです。

縁日の商人は一ヶ月に数カ所を定めて、市内各所の縁日に店を出してこれもお客から親しまれたものです。この他のタカマチと云って、年に二回位ずつ開かれる千住のボロ市や、世田谷のゴミ市等と同じような市が、東京の近県各地に時々開かれて、露店商の大部分の人は、浅草のように人手のありそうな場所を選んでは、転々と渡り歩くのが常でありました。売り方にも三寸といって、商品を並べておいて、お客に自由に選んで買わせる方法と、タク売りと云って、商品を面白おかしく説明しながら売りつけるテキヤと、二通りあって、大体テキヤの扱う商品は特定の一品ものが多かったようです。

両者共それぞれの組合があって、組合加入者は他の縄張りへ行って商売をする時には、面通し（挨拶）をすれば、天場所（よい場所）を割当ててもらうことが出来る仕組みになっています。然し一旦この組合に入ると、親子兄弟分の関係が成立するので、自分の都合だけで足を洗って組合を脱けることが困難になってくるのです。そんな訳で、私は最後まで組合には加入しなか

ったので、いつも一番悪い条件の場所で商売するのが常でした。幸いに私の扱い商品がボタン専門で、種類も豊富で珍しいので、露店を出す場所が、人出さえあれば五円以上の売上げは固いところで、段々と露店商人生活に自信もついて来ました。しかし一生を露店商で終わる気持ちはないので、仕立物業再開に対する私の信念は、何時如何なる時でも消えることはありませんでした。晴れた日は露店商となり、雨降りの日は、妻とミシンを踏んで一生懸命に働きつづけました。

苦難時代５　内職気分を精算して　ミシン縫製業に踏み切る

昭和五年頃はまだまだ不況の嵐が68吹きすさび、街には失業者が群れをなしていました。落ちるところまで落ちた私も、やっと立ち上がりの体勢が整い、前途に希望が芽生えつつありました。そこへ突然実弟の茂孝が転がり込んで来ました。この弟は日本橋横山町の森タオル店に住み込み店員として、真面目に働いていましたが、不図したことからグレ出して、店を飛び出し、果てはテキヤの群れに身を投じ、旅廻りを続けていましたが、目が覚めてテキヤ仲間から足を洗う決心をして、東京に舞い戻っては来たものの、誰一人相手になってくれる者はなし、万策尽きて私の所へ泣きついて来た様な訳でした。好ましくないお客様だが、兄弟の情でやむなくこの厄介者を、家に引き取って、彼にボタンの露天商をさせて、厚生させることにしました。ところが、悪い事は重なるもので、同じ時分に妻の実家の父が失業して、家族九人の大所帯が生活に窮するという事態が起こり、私はこの方にも援助せねばならず、負担は益々重くなるばかりです。そこで今まで内職程度にやっていたミシン縫製を、本職に転換する為に、妻の姉と弟を引き取って、ミシンも増設し、本格的な加工業に踏み切ったわけです。私は昼間は製品の配達やら、裁断仕上げの方を受け持ち、夜はボタンの露天商で稼ぐといった具合で、脇目もふらずに一生懸命働きました。

家賃節約の為、千住末広町に家賃五円五十銭の家を探して移りました。こうして約一年間苦労してみますと、多少の蓄えも出来たし、仕事に自信もついてきました。そこで昭和六年の春には、飛躍を志して末広町から、千住高

砂町に移り、ミシンも足踏み式から動力機に切り替え、住み込み雇い人を使って、ミシン四台で、前三ズボンを毎日十打づつ仕上げる加工所にまでこぎつけました。その年の八月に予備役の勤務演習に招集されて、麻布三聯隊で、四週間の勤務で汗を絞られましたが、かっての現役時代の戦友と暮らした四週間は、別の意味で楽しいものでした。また配属された五中隊の中隊長殿が、亡くなられた秩父宮さまであったのも懐かしい思い出です。勤務演習から家に帰ると、また大車輪の商売です。

その頃長兄は三河島から、神田岩本町に進出して業績も順調に伸びていたので、私の方の仕事も早川本店の専属職方という形でした。

昭和七年の春に妻が妊娠して、出産は十二月と予定されました。最初の子は、私が軍隊生活中に生まれて、除隊前に死んでいたので、今度生まれ出る子が、結婚五年にして初めて私の前に子として姿を現す訳です。男の子か女の子か、兎に角一日も早く生まれてくる様にと指折り数えて待つ気持ち、やがて生まれて来る子供の名前を考えながら、妻と意見の喰い違いで、口喧嘩をすることも度々で、こうした心持ちは初めて子を持つ人なら誰しも同じであろうと思います。十二月九日産婆さんの注意で、産室の準備などをして、私は夜中の一時頃まで待機しましたが、どうもそれらしい気配もないので、妻の云う通り腰紐で私の手首が縛られて、信号綱とし、私は押入れの上段で眠りにつきました。何時頃か私の手が激しく引っ張られるので、はっとして飛び起きて、それから自転車で夢中で産婆さんの所へ急ぎました。産婆さんを抱え込む様にして、自転車で家まで運びました。こうして、朝の五時頃、男の子が大きな産声と共に誕生しました。昭和七年十二月十日、私は一人の男の子の父となったのであります。長男の名前は、私の名前、英俊の一字を取って俊一としました。

和泉屋創立１　永年の念願叶い　神田街に進出して開業

永い苦難時代をどうにか切り抜けた私達夫婦も、長男という子宝を授かって、家庭は急に明るくなりました。昭和八年の春の或る日に、長兄秀一の来訪を受けて、「松枝町松月の隣りに買った家が空いたから入らないか。」という事です。かねて神田へ進出したいと念願していたので、渡りに舟とばか

り、その家を借りて移りました。しかし、この家は伝説で有名な神田お玉ケ池の前方で、場所柄現金売りの利く所ではないのです。またこちらの資本力も乏しいので、商売の方は暫く時期を待つ事にして、ミシン加工専門で発足しました。場所柄だけに配達の手数も省け、急ぎの仕事が常に入ってくるので、収入も一段と良くなりました。当時は衣料品の値段が低落して、競争の激しい時代でした。加工賃は大人ズボン一本の仕立代が、前三で五銭から八銭、本裁ち仕上げで十二銭から十五銭が相場でした。綿ズボンの卸相場も、ベタ雲才、米綾スレンの安物が四十銭台で、特Aギャバジン天満スレンの上物本裁ちズボンが一円二十銭位でした。使用生地も太綾スレン、カルゼ、クレバ、ギャバ、コールテン、フロック等が全盛でした。業者も新規開店や転業者が岩本町周辺に密集して、旧来の業者と激しい対立競争を展開し、その上、新規業者間の対抗意識も相当強かった様です。その当時新規開店又は移転して来た店は、小谷野衣料、福岡被服、上野衣料、徳永商店、岡本商店、豊田被服、八島商店、新興産業、高須商店、神田衣料、ミツボシ衣料、森商店、乾衣料等でした。また途中廃業した店に、細野商店、浅野商店、唐木田商店、下山商店等があります。古い店には、大貫商店、沢井商店、大草商店、横山商店、三浦商店、安藤商店、斉藤商店、高坂商店、田村商店、広田商店、早川本店、早川正商店等が仕立物専門店として営業していました。いずれも競争に火花を散らす商売だけに、裁断には特別の研究工夫がこらされ、型紙要尺等は極秘で、商売敵の裁断見積りを探るのに、出入りの生地屋とか職方を使って、スパイ戦術がしきりに行われました。私は裁断と型はめには自信もあったので、常に新しいデザインや、要尺を節約して極力原価を安く仕上げる方法を研究しました。そして、資本の蓄積を心掛けながら時期の到来を待つ事にしました。

丁度その頃、神田に進出して三年目を迎え、可成り売り込んでいた長兄が、同業者の安売り攻勢に対処して、防波堤のつもりで別に一軒店を開く決意をして、神田大和町十番地に間口十尺、奥行き五間総二階の建物を、敷金三百円、家賃四十円で借り受けました。この家は現在のまこと衣料さんの場所ですが、東隣りには高須商店があり、衣料中央通りに面した絶好の場所で

した。大門通りの向かい側には、当時大判で値段の安い小谷野商店が人気を博しており、毎日店頭には客が群れをなす有様でした。

長兄はこの店を私と共同経営でやらないかと、申し入れて来たのですが、共同経営には、前に苦い経験をなめているので、出資の配当だけで、一切の経営権を私に任せて貰う条件で、引き受ける事にしました。資本金三千円を半分づつ出資する事、利益は折半する事、赤字の場合には私が責任を負うという条件で、屋号は和泉屋商店と名付けました。屋号の出典は私の生まれ故郷が、和泉村であるのと、神田の店の近くには和泉橋があり、町内に和泉小学校があるという訳で、この屋号で発足した様な次第です。そして松枝町の加工所設備一切を妻の実弟に譲り渡して、王子の方でミシン加工所を開かせ、私達親子三人は、いよいよ大和町の新店舗へ移りました。

和泉屋創立２　お手上げ寸前を原価販売で盛り返す

昭和八年十二月七日が和泉屋商店の創立記念日になりました。店舗も改造し、製品も準備して綿ズボン専門で店開きしたのですが、残念ながら宣伝不足で新店の悲しさに客足もマバラで、誠に惨憺たる成績でした。北向きの寒い店に頑張って、通りがかりのお客を、声をからして呼び込みをするのですが、大方は素通りです。遇に足を止めたお客も、品物に信用がないのか、見本に二三本買って行くのが関の山で、日に客が五一六人で、十円前後の売上げという情けない日が続きました。その当時の冬物はコールテンが主で、生地は夏のうちに先物契約で買い付けるのが普通ですが、需要期になると相場も値上がりして、品薄で商品が間に合わないのが常でした。この年もコールテンは、二割値上がりで、安い契約物を持っている他の店とは、まるで競争にならないので、私の方はコールテンを断念して、一番安全な太綾やギャバジンを主力に造ったので、冬場の売上げは実に不振を極めたものでした。一方私は綿相場が高値の時に始めた為、他店に比べて原価が高く付き、利益を犠牲にしても尚売り辛いという結果になりました。

開店の時に長兄の店に居た、桑崎家吉という十六才の少年を店員として来てもらいました。この男は長兄の妻の実家である、千葉県東葛飾郡川間村の

出身で、体も大きく頑健無骨ですが、実に熱心な努力型の少年でした。
　和泉屋商店は店頭現金安売りが目標で、外交販売はやらない方針でしたが、店に客足がつかないのは致命的ですから、やむを得ず桑崎少年を外交に出す決心をしました。宣伝を兼ねた外交ですから、市の内外何処でも足の向くままに、数多く廻る様命じたところ、真面目な桑崎は、朝早くから夜遅くまで、熱心に飛び歩いたので、その効果が現れ、商売もあり、固定客も段々と就く様になりました。私は以前謄写器販売の外交をやっていた折りに売りつけられた、小型謄写器が手元にあるのを幸い、店の全商品の相場表や特徴を記した宣伝文を刷っては、夕方店を閉めてから自転車で方々に配りました。そして相手が根負けして店に来てくれるまで続けてみました。
　丸半年間を必死の努力で、どうやら売上げも上昇したものの、先高相場があった為に、乏しい資本力では実需買いしか出来ず、遂に千五百円の赤字を作って、私の持ち分資本は完全に吹っ飛んでしまいました。　共同出資の長兄もあまりの業績不振に、業を煮やして、閉店を主張するのですが、私にしてみれば、ここで止めてしまったら、四年間血と汗で作った資金が零となるばかりか、またもや職方に逆戻りしなければならないので、資本を引き上げると強硬に言い張る長兄を説得して、一大決心の下に原価販売の断行を思いつきました。店頭には大きなビラを張って、全商品の見積もりを、時の生地相場で、端数切り上げの原価で売り出しました。新しい値段表を刷って、毎晩市内に配ってみますと、五日目頃からボツボツ反響が現れて、朝早くからお客が寄って来て買ってくれました。
　一日に十人か二十人の客で淋しかった店頭が、急に百人以上の客が押し掛けて来る盛況で、忽ち品切れになる騒ぎでした。そこで、お客が時期的に最も要求する品から製造して店に出すと、朝のうちに売り切れとなる状態です。それで俄に職方募集やら、生地仕入れ、裁断販売と昼夜ぶっ通しの活動が続き、或る日は人手が足りないので、お客が手伝いに廻って、職方から仕上がってくる商品の分配販売をする始末です。

和泉屋創立３ 三時間しか寝なかった一年間・うれし涙の利益金三千円

僅か一週間そこらの間に、和泉屋商店の店況は百八十度の大変化を来しました。やる仕事がなくて思案投げ首でいたものが、急に寝る暇も無い程の商売にぶつかったのです。お金を懐にしたお客が来て、朝から晩まで、こちらを追い回わして頂くのですから、実際に夢に夢見る思いです。その上今まで不安で寄り就かなかった生地問屋まで、日に二回も三回もやって来ては、店を手伝いながら、注文もしない生地を届けて来る始末です。ですから製造の方も、研究も工夫もあったものではなく、お客や生地屋の云うなり次第に裁断して、縫製加工すれば、面白い様にどんどん売れて行くのです。先安相場の時代で、生地の値段も買う度に安くなるのですから、回転の早い私の店等は利益も多く、八月末まで夏物を追いかけても残品等一点も出ません。

他の店では、五、六月頃に冬物生地の買い付け契約をして、七、八月頃から製造にかかるのですが、私の店では夢中で夏物を追っているのですから、冬物等眼中にないのです。それが幸いして九月に入ってから、コール天類が値下がりを始め、年内に三割も暴落したのですから、随時買いの私にとっては、絶好のチャンスでした。こうしてとんとん拍子に人気を掴み、一方では優秀な職方さんを、十五軒から獲得して、毎日千点位の製品が仕上がって来る状態です。その当時の事を考えると、マアよくも体が続いたものと、今でも不思議に思う程です。

従業員は私と妻と店員の桑崎と三人きりで、他に長男（満二才）と子守り兼女中の五人暮らしでした。朝五時に妻と女中が起きて、女中が食事の支度にかかれば、妻は職方に出してやる裁断地や付属品を揃える。七時には店員の桑崎を起こして店の戸を開けると、そこへ職方が来る。職方から仕上がりの製品を受け取って、縫製に出す裁断地を渡してやるのが桑崎の役目です。私は六時頃に朝食を済ますと、二階に上がって子供の寝床にもぐり込んで一寝入りします。職方の出入りは六時から八時までと決めてあるので、その間に交代で朝食を摂る習慣でした。お客は八時頃からボツボツ姿を見せて、十時頃から正午頃までが一番混み合う時間でした。私の起こされるのは、大抵九時から十時頃ですから、正味寝る時間は三時間半位のものです。三人で目

の回るような忙しい商売をして、午後から桑崎を外交に出すのですが、午後になると割合に閑散でお客も落ち着いた仕入れをされる方が多く、大口の商談が出来るというわけです。夕方一時立て込んで、店を閉めるのが八時頃になり、それから帳合をして夕食に就くのが十時頃です。外交に出た桑崎が帰るのもその頃です。彼は山の様に持って出た商品を、キレイに売りつくして来るのが常で、実に腕の良い働き者でした。夕食後片付けをして妻と女中が寝るのが十一時頃です。私と桑崎は翌日職方に出す品物の裁断にかかるのですが、千点の製品にするには、広幅四十ヤード(１ヤードは91.44センチ)で約５０反の裁断をするのですから、大変な労働です。昼間のうちに予定してある計画法に基づいて、簡単な物から着手し、午前１時頃頃には桑崎を寝かせて、私一人になってから面倒な物の裁断をするのですが、朝までに１５裁ちか２０裁ちの仕事を片付けてみると、５時頃になります。そこで妻と女中を起こしておいて、私が一寝入りするという具合です。文字道理昼夜ぶっ通しの活動が続きましたが、お陰で利益も挙り、十月には長兄から出た千五百円の出資金に利子を付けて全額返済し、ここに完全な独立経営体に成った様な次第です。取り扱い商品も前三立ズボンや半ズボンが主力だったのが、本裁ちズボン、作業服、つなぎ服、胸当てズボン、ジャンパー等いろいろ種類も豊富になり、商売も好調の波に乗って繁盛し、その年の暮れに開店一週年の決算で、金三千円也の純益をあげた時には、しみじみと努力の仕甲斐があったと嬉し涙がこぼれました。

和泉屋創立４　　十六年目でどうやら1人前になったと思ったら

　昭和二年に徴兵で軍隊生活に入った為、中断した商売が、除隊後の四年夏から再開し、僅か半年で失敗に帰し、それから永い苦難時代を経て、やっと和泉屋商店を創立したかと思えば、六ヶ月間の経営で、資本金の半額に当たる、千五百円の赤字を出す始末です。気を取り直して劣勢挽回に務めた結果、下半期の半年で四千五百円の純益を挙げた上に、思いがけない人気と信用を獲得したのだから、私の喜びも非常なものでした。販売量もすっかり安定し、生地相場も底値に入っていたところから、春物の先物契約をしたの

が、引き取る頃にはぐんと値上がりして、相当の利益を掴むという好調振りです。そんな訳で昭和十年の四月には、新しく数人の店員を雇い入れて、店も賑やかになりました。

当時の生地の取引先は酒井長七商店、鈴木義次商店、西島正治商店、米沢商店等が主力で、他に数軒の出入りもありましたが、現在までずっと取引しているのは、西島、鈴木、太田、大久保のお店です。あの頃の事を思うと、全く懐かしいものがあります。

昭和六年九月十八日の盧溝橋事件に、端を発した満州事変の勃発から、ついに満州国の建国となり、日本経済の大陸進出が盛んになり、景気も一段と上昇しますと、神田衣料品業界もめっきり活況を帯びてきました。

明るい気分に浸っている八月六日に、妻は次男を出産し、和好と名付けました。妻は妊娠中に余り働き過ぎた為か、乳の出が悪く、人口栄養で育てる事になり、次男専門の女中さんを頼みました。名をトクと云いましたが、実に気持ちの良い行き届いた娘で、我が子の様に可愛がって育ててくれたので、私達夫婦も安心して任せっきりで、商売に専念することが出来ました。この年は四季を通じて当たり相場に恵まれて、純益三万円も挙げる事が出来ました。こうして資本的にも信用がつき、営業成績も将に順風万帆というところで、私の店も基礎はすっかり固まりました。

振り返って見ると、大正八年に再上京して、仕立物屋の店員でスタートしてから、十六年目でどうやら一人前になりました。自分で播いた種にやっと、目的通りの実を結んだのですから、私達夫婦も真に感慨無量でした。

岩本町角にある調達庁の建物が、当時は古着市場でしたが、その二階に出張所を開設し、従業員も増やし、住居も倉庫も借り入れ、商品も常に豊富に手持ちして、本店と出張所、外交販売の三本立てで営業面を刷新し、売上高も一流並みに躍進するという具合で、わが世の春を謳歌したものです。

十一年春に妻が三度目の妊娠をしましたが、どうも体の調子が思わしくないので、可哀そうな程衰弱が目につく有様です。長男は数え歳五才のわんぱく盛りですが、次男はまだ二才の赤ん坊です。そこへ三人目が生まれるとあっては大変です。商売も大切ですが、先ず家庭の安全確立を計らねばならな

いと考えた私は、以前住んだ事のある、足立区千住高砂町に家を一軒買い取り、住まい兼工場に改造しました。この場所は千住新橋を渡って、土手下を小菅に向かって、約二百メートル先の左側で、前方は荒川放水路で閑静な所です。神田との交通も便利で、縫製工場を建てるには、好都合の場所でした。

七月の中頃、次男の和好が悪性の消化不良にかかり、幾人か医師を替えてみましたが、サジを投げた形です。私達もすっかり諦めて、もう死を待つばかりでした。そこへ当時店に出入りしていた、ボタン屋さんの片山勘次郎氏（現在片山ボタン店社長の父君で、大東亜戦で戦死された）が、向柳原で開業していた坂内病院長を伴って来て、診察してくれました。坂内博士は小児科専門で、特に消化不良で学位を取られた権威者ですから、私達も一縷の望みを持ったのですが、坂内博士の診断の結果は、もう既に脳漿を起しかけているので手遅れだ、という悲しい宣告です。

和泉屋創立５　次男の重病を大量の輸血療法で乗り切る

商売も順調に進み、多少は資本の蓄積も出来たが、途端に子供が重病で、医師から死の宣告を受けるという破目に立たされました。私は必死の思いで坂内博士に縋りました。「どうにかして治療の方法はないものでしょうか。」すると博士は、「母乳で育てた子供なら、手当の方法もあるが、人工栄養の子で悪化しては難しい。唯一つの道は、輸血療法もあるが、金も多くかかるし、うまく助かっても脳膜炎になる恐れがあるので、私としては責任が持てない。」と、まことに冷たくも心細い返事です。

私が傍らの妻の顔を見ますと、妻は涙を溜めた目で、私の顔を食い入る様に見つめているのですが、私は妻の目から、母親としての愛情の光を直感しました。「するだけのことは尽くして助けてやって下さい。お願いします。」と妻は私に訴えているのです。病児の枕元にいる妻の母親や、女中その他の人達も、無言で私を見つめている、重苦しい空気でした。やがて私の肚は決まりました。「先生この子の生死はお任せしました。やれるだけの手を尽くして診て下さい。」本当に溺れる者は藁をも掴む思いでした。

すると坂内博士は、私に後から来る様に云い残して、妻と病児を待たして

あった自動車に乗せて、病院へ帰られました。私は入院に必要な品々を準備して、病院に駆けつけますと、待ち構えていたように、私の血液検査が始められました。今と違って当時の輸血は、なかなかの大手術であり、又供血者も数が少ないので、値段も非常に高い上に、急場の間に合わないのが常でした。幸いにも私の血液がO型で、病児はB型であったので、私の腕から血液が取られました。そして父親の血が生死の境にある、愛児の脚部から静かに輸血されました。こうして第一回の輸血は見事に成功しました。私は多少不安の気持ちを抱いて帰宅しました。その夜は医師の注意に従って、生卵やほうれん草の増血食を採って、早めに寝につきました。翌日は病院に行って又輸血です。なにしろ一回に一合位の血を採るのですから、それが三四回と続くと、さすがに強健な私も、体がふらついて心細い限りでした。毎日仕事も出来ず、生卵やほうれん草ばかり食べて、ひたすら血を造るのに一生懸命でした。夏のことで、八百屋の店先にほうれん草がないので、千葉や茨城辺りから出て来る八百屋に頼んで、高い値段で手に入れる有様です。大体輸血療法というのは、完全な絶食療法ですから、無論病児には何も食べさせられません。小さな唇を動かして食を求める、いたいけな病児の顔を見ている私の気持ちは、まことに辛いものでした。病室には私と看護婦の他は、一切入れない様にと、医師から厳命されているので、妻も近親の者も、近寄ることも出来ないのです。こうして一週間の輸血が続いた結果は、うれしや坂内博士の口から、「この子は助かるよ。」と天来の声を聞いた時には、私の眼から涙が出て困りました。輸血療法は、輸血を止めてからが大変で、食事も時間を決めて、薄いミルクとか、スープを少しずつ与えながら、経過を見て段々量を増やして行くのです。或る日ウエハースを一枚与えたところ、手に取るが早いか、いきなりかぶりつくように食べて、僅か指先に残った分を、残り惜しそうに食べる様子がいじらいくて、医師に内緒でもう一枚やりたいという、親心が制止きれずに困りました。然し私は、医師の命を守り、心を鬼にして退院までは、一切食物を与えませんでした。病児も日毎に快方に向かい、入院してから三十五日目で、健康な体になって退院しました。一旦は諦めた子が元気な姿で戻ってきたので、家の中は、パッと明るくなりました。

支那事変の頃１　　神田の衣料品業界団体の創立に奔放する

子供の病気入院中、店の仕事も店員まかせでしたが、店員も裁断から販売まで、仕事を飲み込んで進歩を見せてくれるし、お陰さまで、私の体も大分楽になって、世間並みの生活が出来る様になったのも、結局はついていたというものでしょう。妻は臨月のお腹を抱えて、至極幸福そうでした。

昭和十一年十月八日妻は長女賀恵子を生み、私も三人の子の父になりました。予て建築を進めていた千住の住居と工場も完成したので、その年の暮れに移転して、十二年の正月は新居で迎えました。

工場には責任者を雇い入れ、動力ミシン十三台を設置して、住み込みと通いの工員十数名で、フル稼働を続けました。

妻は店の仕事から一切、手を引かせて、三人の子供の養育がてら、工場の監督をさせ、私は毎朝神田の店へ通勤しました。

その頃は大陸では、満州事変から上海事変へと移り、勝報が相次ぐ有様で、日本国内は軍需産業が火花を散らす勢いを示し、連れては一般産業も活気づきました。工場の活動が盛んですから、作業服類の売れ行きも高調です。国内事情に留まらず、朝鮮、満州、南洋方面へもドシドシ輸出されるので、業界もホクホクでした。

その当時、神田の衣料品業界には、業者団体というものが、あるにはありましたが、長老や元老組の親睦機関としての旅行会程度のもので、私達若い経営者達は、横の連携を密にして、縦には統制の取れる様な業界団体の必要性を、深く痛感しておりましたところから、先ずその一段階として、親睦団体青興睦会を結成しました。この会を作るには、上野金太郎氏が、特に熱心に力説されたので、私はその片棒を担いだ様な訳です。青年層を中心に活発な活動を起こす為には、会員の資格も同業者で、満四十才以下の人達を、正会員とし、四十才以上の人は特別会員、業者以外の参加者を賛助会員と定め、正会員以外には議決権を与えない規約で、会員を募ったところ、忽ち大きな反響を呼んで、青年組は双手をあげて賛成加入して来ました。

設立発起人の顔ぶれは、上野金太郎、高須治平、乾長次郎、小谷野正巳、吉岡与助、徳永良太郎、小林辰也、豊田光男、細野精一、早川護正、岡本貴

美三、佐藤貞男、鳥居幸造の諸氏と小生等であった。私と上野氏の二人で、未加入勧誘に個別訪問して歩いた結果、全員で百名になったので、創立総会を隅田川畔の橘場荘大広間で、盛大に開きました。会費は当日持参でしたが、全員の顔が揃ったのには、発起人側でも驚いてしまいました。それだけ若手の経営者達が意欲的であった事が窺われます。そう申しては失礼ですが、老人組は、“若い者に何が出来るか”と冷やかし半分の出席もあったらしいのですが、総会の空気は、非常に明朗活発で、議事の進行も快調で、規約の制定等もトントン拍子に進む有様でした。

総会が終わって大懇親会には、特別、賛助両会員の方々を上座に据えて、正会員は下座に着き、先輩に礼をつくしたので、長老達も非常に気分よく、盛宴の内に総会は幕となりました。第一期の役員は十二名で、任期は一年、再選を許さず、初代会長には、上野金太郎氏が当選し、私は副会長に選ばれました。数え年三十一才の時で、誠に名誉な事でした。団体の世話役は、やり過ぎれば非難を受け、やらなければ無能呼ばわりです。全会員の調和を図りながら、自分の意志を明らかにして、且つ犠牲的精神を失ってはならないという、真にやりにくい仕事です。私はその時から今日まで、二十二年間随分いろいろの役員を仰せつかって来ましたが、人様のお世話は難しいものです。

支那事変の頃２　業界若手の親睦団体が目覚ましい活躍

若手で作った青興睦会の活動は目覚ましいものがありました。会合を度々行い、時局認識を深める為に、講師を招いて後援会を開いたり、研究会も月一回以上はやりました。家族や従業員の為に、シーズンには大運動会を催して親睦を深め、又婦人会を結成して、家庭の奥さんの間の親密を計ったり、営業上の情報の交換とか、親善旅行、会報の発行、団体勤労奉仕の実行から、早起き運動までやりました。

青興睦会が出来る以前は、お互いに商売敵の意識が旺盛で、隣同士でさえ相反目していたものが、会で結ばれると、昨日の敵は今日の友で、真に仲良く協力一致しました。現今の神田被服業界が、親友付き合いで和が保たれているのも、実に青興睦会の遺産であると申しても過言ではないと思います。

昭和十二年四月、深川の清澄庭園を借り切って、会員の家族従業員の慰安大運動会を催し、終日楽しく遊び暮したのも、懐かしい思い出の一つです。この運動会は第二回を芝公園で、第三回は豊島園で開きましたが、戦争のため残念ながら、三回で中止になりました。睦会と併行して谷村勇先生の主催された、奉仕経済団神田支部と神田財界研究会を結成して、上野氏が初代会長となり、私が副会長を務めました。この二つの会も相当活発な活動を続けて、業界に貢献しましたが、大東亜戦中に自然消滅となりました。

昭和十二年七月七日、盧溝橋事件に端を発した、支那事変の勃発は、我が国の経済界に大きな衝撃を与えました。日本政府は早期解決を言明しているのですが、相手方は長期抗戦を主張して譲らず、挙国一致の戦争準備に巻き込まれて行くという有様でした。若い在郷軍人は、次々に赤紙招集で、戦場に送られて行き、新聞は毎日皇軍の連勝を報じています。私は現役出の予備役ですから、何時赤紙が来るかと、毎日が薄氷を踏む思いでした。帝国軍人として、戦場に召されることは、男子の本懐で名誉には違いないが、社会人としての生活も安定し、商売も順調に伸びて、可愛い妻子の身の上を考えると、“戦争はごめんだ”と云うのが、偽りの無い本音でした。然し招集令状は富籤ではなく、長引けば必ず当たり番が来るという、厄介千万なものですから、困ったものです。若しも召集令状が来た時の場合を考えて、私も準備に入りました。先ずその年末限りで、古着市場内の出張所を閉鎖する事、折角設備した工場であるが、これも引き上げて、神田大和町一カ所にまとめる事を決心しました。すると不思議に一つの安心感というか、赤紙に脅える気持ちが去って、落ち着きがでました。

大陸では血みどろの戦いが行われているのに、内地では平和な生活が営まれているのです。物資も豊富で安く手に入り、花柳界や温泉地では、好景気に湧き立って、戦争成金が、わが者顔でのさばれば、バーやカフエーも夜日に継いで、享楽の歓声が渦巻くという騒ぎです。ところが一朝統制の嵐が吹き捲くると、途端に情勢は一変して、見る影もない国民酒場とか、国民食堂に早変わりして、軍需工場がやたらに誕生して、たちまち、せち辛い世の中となりました。当時は国民の誰しもが、日本の先行きはどうなるか分からな

い。飲める内に飲み、食べられる内に食べ、遊べる内に遊べという、捨て鉢気分があったのではないでしょうか。かく云う私も、ご多分に洩れず、善友、悪友を誘ったり誘われたり、諸処方々を飲み歩いたものです。相済まぬ話だが、妻に一番心配をかけ、苦労させたのも、この時分です。甚だ悪い夫であったと今頃後悔している始末です。然し私の人生行路で、一番面白く楽しかった時代でもあれば、人間修行の面でもプラスになったと、今でもそう信じています。その当時からの悪友の一人に徳永商店社長がいます。多分あちらさんも、そう思っているでしょうが、お互い様です。

支那事変の頃３　気の合った悪友連との遊び、妻子とのドライブ旅行

戦時中の悪友の話が出たついでに、その悪友ぶりの一端をご披露しておきましょう。

　或る時、問屋招待の伊豆温泉旅行がありました。帰路に就いたのですが、気の合った悪友連が、数人顔が揃ったものですから、無事には済まされません。弥次喜多もどきに、東海道線を点々と途中下車しては飲み歩いている程に、何時の間にか連れの顔が、一つ減り二つ減りで、翌朝小田原駅前に駐車していた、自動車の中で眼を覚ました時は、T氏と私の二人きりでした。幸いに自動車の運ちゃんが、出勤する前に目が覚めて、一番の汽車で東京に舞い戻りました。またこんなお恥ずかしい話もあります。或る夏の暑い夕方、クレープシャツにステテコ姿で涼をとっていると、同じ様な恰好をした二人の悪友が現れて、“ちょっと、そこの寿司屋まで”と誘われるままに、寿司屋で軽く飲んでいるうちに、元気がついて、そろそろ悪友気分が頭をもたげ、ハイヤーでカフエーを二三軒飲み歩いたあげく、待合いを二軒ばかり場所替えして巡遊し、深夜二時頃になってから、待合いを出て、自動車で品川まで飛ばし、××屋という飲み屋で、明け方まで飲み続け、自動車で岩本町まで来て、屋台の寿司屋でもう一杯傾けて、やっと家に帰るという始末でした。よくもまあ飲めたものだと吾ながら感心したものですが、兎に角生活は安定したが、前途には黒い大きな不安が横たわっていて、日本人は皆落ち着きを失っていたようです。

私は自動車の運転には、多少の心得があるので、道楽気分も手伝って、自動車を買う気分になり、当時日産自動車が売り出した、小型ダツトサン乗用車が千二百円位でした。私は二十五年型の中古車を、七百五十円で手に入れて、毎日千住から神田の店まで、通勤したが、非常に調子の良い車で、燃費も良く、一ガロンで八十キロは走るので、一ヶ月の維持費は、税金共で十五円で済みました。グリーン色で箱形四人乗りで、可愛い車でしたが、後にガソリン統制で、乗用には一ヶ月一ガロン配給割当になった時に、六百五十円で、小林氏に譲ってしまいました。小林氏も暫く闇のガソリンで、乗り回していたが、維持しきれなくなって、地方のお医者さんに売ったと云う話でした。私が自動車を手に入れた翌年の十三年四月に、妻と赤ん坊（長女賀恵子）を伴って、私の運転で、富士五湖巡りと、箱根、熱海、伊東温泉巡りのドライブ旅行をしました。家庭を持ってから、初めての旅行でしたが、赤紙招集を受けて、戦死でもしたら、もうそれっきりです。せめて生きている内に、楽しい思いをしておきたいという訳で、なかなか複雑な気持ちで出発したものでした。千住をスタートして、新宿から甲州街道を八王子、浅川までは道も良く、車も快調でしたが、高雄山の登山口当りから、与瀬町までの山道は、登り一方で七曲がりの難所の連続で、なかなか骨の折れる運転でした。与瀬から大月までは、下り道で展望もきき、折から山桜が満開で見事でした。名勝猿橋を眺め、大月、谷村の織屋の織機の音を聞きながら、富士吉田を過ぎ、河口湖ホテルで昼食休憩し、富士の遠景や樹海を見ながら、精進湖ホテルに到着一泊しました。シーズン外れのせいか、見物客も少なく、旅館も閑静で、待遇もすこぶる上々でした。私達一家の初旅は、祝福された第一夜を過ごしたものでした。翌朝宿の番頭に勧められて、パノラマ台に登りました。妻と子供は人夫四人で担ぐ台に乗り、足に自信のある私は歩きましたが、約二時間で頂上に達し、見晴し台の名望は実に雄大で、天下の絶景と感嘆の声をあげました。眼の前に富士の霊峰を、裾野から頂上までうち眺める景色は、又格別で、樹海や富士五湖の美景が、手に取る様に指呼の間に迫り、振り返れば遠くアルプスの連峰が、雄大に展望され、案内人の説明も上の空で、只只絶景に見とれているような有様でした。傍らの妻も吾を忘れて

四方の景勝に見とれている姿を見て、私も何か妻に良い事をしてやった様な、感激さえ覚えるのでした。日頃悪友達と飲み歩いて、自分だけが好き勝手な真似をしている、と云う様な自責の念が、常に胸中にあった時だけに、妻に対しても、余計不憫の気持ちが湧いたものと思われます。ホテルに帰ったのは十一時頃でした。

支那事変の頃４　子連れの若夫婦を乗せる。旧主福田さんとの再会

富士五湖の勝景を満喫して、次のコース箱根に向かう日の昼過ぎ、ホテルを出ようとする玄関先で、子供連れの若夫婦から、“御殿場まで行きたいのですが、お差しつかえなかったら、車に乗せて戴けないでしょうか”と請われるままに、旅は道連れと、一同を乗せて賑やかに出発しました。この若夫婦は、神戸市内の中学校に奉職する先生で、結婚後三年目に生まれた女の子を連れての、新婚旅行のおさらいと、もう一つ、今度満州奥地の学校へ転勤することになったので、休暇をもらって、内地にお別れの旅行をするということでありました。すっかり意気投合して、自動車の中は、なごやかなものでした。富士の裾野を通って山中湖を過ぎ、御殿場駅まで送って、この若い先生夫婦と別れました。その後任地の満州から礼状が届きましたが、終戦後あの先生ご夫妻は、どういう運命を辿っておられるか、消息は知る由もありません。

さて私達は御殿場から長尾峠をを越えて、箱根強羅温泉に着き、第二夜を迎えました。次の日は箱根の名所旧跡を見物して、十国峠から熱海へ出て、伊豆伊東温泉まで強行軍して、宿を取りのんびりと湯の香りに親しんでおりますと、ふと留守にしてある東京の家の事が気になってきました。思いは同じで妻も早く東京に帰りたいと云い出しますので、翌早朝に伊東を出発して、一気に東京まで車を飛ばしてしまいました。帰って見れば家は何事も無く、子供達も楽しそうに遊んでいるのを見て、安心した途端に一度に疲れが出て、がっくりしてしまいました。その夜は妻の手料理で、一家団欒の夕食の味は、また格別でした。そして平和な家庭程幸福なものはないと、つくづく感じたものでした。

話は代りますが、私の旧御主人である、福田勝太郎氏は、大正十二年の関東大震災を契機に、さっぱりと商売を廃めて、居食いの生活をしておられましたが、後年は滝野川で碁会所を開き、奥さんは長唄の稽古所で、細々と暮らしを立てておられました。親譲りの大きな資産も、僅か十数年のうちにキレイさっぱりまる裸になられたのは、お気の毒というほかありません。それにしても人間座して時を空しゅうすれば、巨万の富も、夢幻と消えて果無いものと、つくづく感じました。

私は苦難時代には、遠慮して顔出しもしていませんでしたので、お詫び方々旧ご主人を久しぶりに訪ねて見ますと、御主人は夢かとばかりに喜ばれて、お茶をすすりながら、夜の更けるまで、尽きぬ思い出話に時を過ごしました。お酒好きな方でしたが、苦しい生活で今ではお酒も不自由されている御様子に、お小遣いを差し上げて、その日はお別れしましたが、その後は毎月若干の仕送りを続け、時には御主人を誘ってその昔、華やかに出入りなすったお茶屋等で、お酒の共をしましたが、上機嫌でいらっしゃる御主人の顔を眺めて、人の世の移り変わりの激しいのには、胸を打たれる思いでした。御主人は年をとっても、酒量は少しも衰えを知らず、一升位は平気でした。その御主人も追々と物資が窮乏して来た、昭和十七年の秋頃に中風で倒れ、お好きな酒を離さずに静かに生涯を終えられました。臨終の少し前に見舞った私の手を力なく握って、”英や、有り難う、私は幸せ者だ“と、さも満足そうに云われたのが、私が聞いた御主人の最後の声でした。六人の子持ちであった御主人の死に水を取ったのは、私と後添いの奥さんとその子の三人切りであり、本当に淋しいものでした。どういう理由か存じませんが、御主人は実子には実に愛情の薄い方でした。自然とお子さん達も、親しみが湧かなかったものと思われます。私にとっては育ての親、職業の親とでも申しましょうか、情に厚い生涯忘れ難い大恩人でしたが、野辺の送りや法事のお手伝いも出来て、せめてご恩の万分の一のお返しが出来た事を有り難いと思っています。あれからもう十七年にもなりますが、奥さんは八十二才の高齢で、今でも長唄や生け花のお稽古で余生を送っておられ、月に一度位は、私の家にも訪ねて見え。昔話しに花を咲かせて行かれます。

支那事変の頃５　　方位学と姓名学に従って懲りる

昭和十三年春、戦時体制下に予ての計画通り、千住の工場を閉鎖して、神田の店へ移す事にしました。当時私共の業界では、盛んに方位学が流行していまして、友人達も何やかやと心配して、工場を移すにも、万一方位を誤ったら大変だからと、熱心に勧めてくれるので、そういう事には余り気にしない私も遂に折れて、その道の権威と云われた大正館の高弟、小関仁斎氏を訪ねました。小関氏の判断によりますと、“直接工場を神田に移すのは良くない。つまり方位の回りが良くないから、一先ず北の方へ二ヶ月ばかり居を移しておいて、それから神田へ出る方がよろしい”という事でした。そんな訳で早速梅田町に貸家を見つけて、三月末に移転しました。丁度その頃妻が臨月で、四月七日に三男が出生しました。

元来私は、迷信的な事は、可成りさっぱりしている方ですが、友達の中に生命学にこった人がいて、しきりに進めるものですから、遂に弱きを出して、下谷御徒町のある姓名学の先生を訪ねて、三男の名前を選んで貰いました。その時私は自分で選んだ名前を、五つか六つ携えて行ったのですが、全部撥ねられてしまって、先生から頂いた名前が、“寛”というのでした。先生の説明によると、寛は字画もよく、早い川である姓に対して、広々とした寛やかさを持ち、人から敬され、長命を保ち、社会的に徳が得られる。という真に結構なお説教を、有り難く拝聴して家に帰り、その事を妻に報告すると、妻はどうにも納得出来ない様な、不服の表情をしているので、私も以外の感がしました。しかし、三男は筋書き通り、早川寛で出生届も済ませ、私も四人の子持ちになりました。家庭は一層明るくなり、幸福でした。

千住の工場の建物は、同業者に賃貸し、設備機械は、全部処分して、若干の金を握りましたので、何か記念に残るものをと考えた末が、新聞広告で見た、千葉県下の山林を買う事にしました。山林と畑で、約二町歩を一万円で購入しました。それが現在の鎌ヶ谷の土地です。神田から東へ六里（２４キロ）国電船橋駅から、東武線に乗り換えて、四つ目の鎌ヶ谷駅の西前方の高台に位置し、周囲の眺望も良く、松林に囲まれた健康地です。東京の都心へ出るのに一時間、将来は立派に発展する土地と、先々を読んで投資した土地

でしたが、大東亜戦争の激化で、空襲から逃れる私達一家の疎開先となったのも、不思議な運命です。そればかりでなく、食糧不足の中、自ら土地を耕し、食糧生産に当たったり、親類縁者の避難所にもなったり、疎開荷物の預かり所にもなったのを思えば、大変貴重な記念投資でありました。

然し、支那事変は益々拡大し、私の知る限り、人々が次々と応召して行く姿を見ていると、次は私かと気が気ではありませんでした。そんな時に三男の寛が、当時流行の百日咳で苦しみ出しました。東大病院で診察を受けますと、幼児だから大事をとって入院させなさいと、云われるのですが、合い憎と病室が空いてないので、東大病院の紹介で、駿河台のＳ病院に入院させました。幸いにＳ院長も心配する程の事はない、と診断されましたので、私共もやっと安心しました。看護婦を雇い、妻と二人が付き添い、私は一先ず店に帰り、翌朝病院へ行ってみますと、経過は非常に良いと云う事ですから、安心して店に戻りました。すると間もなく妻から電話で、“寛の様子がおかしいから、すぐ来て欲しい”という事です。

支那事変の頃６　三男の急死と物価統制令による市場の大混乱

すぐに病院へ戻ってみると、寛の様子は素人目にも分かる程、危険状態にあったのです。私が妻の電話で病院に駆けつけた時、院長は“注射がきいているから心配はいらない”と、はっきり云っているのですが、私にはどうしてもそれが納得出来ないので、寧ろ憤りを覚えて、医務局へ怒鳴り込みました。医師への不信ががどうにも我慢出来なかったのです。すると、医務の方でも俄に慌てぎみで、男女の若い医師が病室へ急ぎ足で入り、病児の顔色を一目見て、大変驚いた様子でした。早速一人は診察にかかり、もう一人は足早に室を出て行きましたが、間もなく数人の医師や看護婦を連れて来て、注射を幾本か続けて打ち、酸素吸入をするやら、病室は急に異状な緊張感に襲われました。然し万事は手遅れでした。愛児寛は間もなく息をひき取りました。その朝の回診で、「大丈夫だ、心配はいらない」と断言してくれた院長さんは、遂に最後まで顔を見せてくれませんでした。病状急変の原因についても、何の説明もなく、実に不親切なものでした。そればかりか、病院側で

は、後がつかえているからとの理由で、諸費用の請求書と死亡診断書を突きつけて、即刻病室の明け渡しを要求する始末でした。余り永く患わずに死んだ子供は、痩せもせず、可愛い顔をして、まるで昼寝をしている様な死顔でした。母親に抱かれて自動車で自宅に帰りました。

まだ生まれて百日足らずの子供の事ですから、町会にも知らせず、親類身内だけで、こっそり通夜を済ませる予定でしたが、問屋筋や同業者の方々、職方まで来て頂いて、賑やかなお通夜となり、極力辞退申し上げた告別式にも、身に余る多くの方々の、お焼香を頂いて感激しました。日頃の親友徳永良太郎氏が、進んで葬儀委員長を引き受けて下さるし、只只有り難く、感激にひたりました。

良かれと思って、方位を取り入れたり、姓名学まで頼って、寛と名付けた子供が、この世に生を受けて、僅か百日足らずの短命で、儚くも親に先立ちました。人の親として子に先立たれる程、身を切られる辛さ悲しさは、子を失った人でなければ、到底分からない気持ちでしょう。それにしても、姓名学とか何とか、迷信的な事には、つくづく不信感を深めた事です。

愛児寛の仏事も済んで、私は掌中の珠を奪われた様な空虚感を味わいましたが、国の内外は戦局の拡大激化で、ごった返す騒ぎでした。町内には防護団が結成され、防空演習は毎日繰り返される一方、政府は輸出入臨時措置法を施行して、統制経済に大きく踏み切る体勢を取ったので、我々業界は全く不安と危惧の念に包まれて、矢次ぎ早に公布発令される、戦時法令や、その施行細則に、毎日血眼になって研究を進め、その説明会等には、小学校の生徒よろしくで勉強に行ったものです。ところが、人間というものは勝手なもので、法律の解釈なども、自分の都合の良い方にばかり聞き取って来るものですから、なかなか本筋が掴めず困ったものでした。商業組合法の改正で、業種毎に組合強制加入が実施され、物価統制令によって、査定価格が実施され、禁綿令によって、綿製品の在庫調査が、全国一斉に施行されるなど、統制の旋風は、国内産業の全面を強襲する騒ぎの中に、今度は中小企業整備令で、商工企業の大統合と、弱体企業の転廃業という、わが産業界空前の大革命が起こりました。昭和十三年六月の輸出入臨時措置法に始まった、統制初

期の頃の業界裏面史を書くと、非常に面白い事が沢山あるのですが、これは割愛して、大東亜戦争突入前後のくだりに移りたいと思います。

衣料品業界の受けた統制の被害は実に厳しいものでした。第一類作業服、第二類既製服、第三類布帛製品、第四類和装、第五類中等学校服、第六類その他に分類して、中央会社が設立され、姉妹団体として工業組合連合会を設立することによって、製造から配給に至るまでの一貫した統制のレールが敷かれたのであります。

わが作業被服業界の場合は、昭和十四年の販売実績五十万以上を以て（企業合同体）中央会社の代行店として業務（裁断配給）を代行させて手数料を支払う。縫製業者は登録ミシン五十台以上（個人法人、小組合等）を以て、組合加入資格者として、工場所在地の組合に加入せしめ、中央会社代行店の裁断する民需品及び組合受注の軍需品を、縫製納品する方法が採られたのであります。

統制経済下１　東京地区一本の作業衣組合に強制加入 常務理事となる

全日本作業被服工業組合連合会という看板が、神田岩本町交差点角の古着市場ビル（現在の調達庁の建物）に掲げられて、理事長に柳沢保治氏、専務理事には沢井大次郎氏が就任され、職員数名を使って、活発な仕事が開始されたのであります。間もなく商工省の指示で、全日本作業衣学童服団体服製造配給中央統制株式会社と、一口では云い憎い永たらしい名称の統制会社が創立されまして、初代社長には、柳沢保治氏が就任され、専務には（現総理）岸さんの秘書をしておられた秋元さんが、常務には沢井大次郎氏がなられました。事務所も岩本町から、下谷御徒町、浅草田原町と人員の増加につれて移転し、最後には各業種が統合体となって、日本橋大伝馬町江商ビルに移り、名称も日本衣料統制株式会社となり、社長には星島二郎氏を迎えました。一方統制会社の下部機構である、卸売業者、生産者及び小売業者方面の企業整備は、大変な混乱を予想されたにも拘わらず、政府当局の強い態度が反映して、割合スムースに統合が進みました。生産販売及び卸売等は、各々認定された実績額を基礎として、転廃業者には中央会社から、実績を買い上

げて、転廃業資金を交付しました。業者の実績持ち寄りによって企業合同（実績額五十万円以上）を行って代行となり、他人の業績を譲り受けて、個人資格を得て、代行店になるという具合でした。

私は自分の実績額十四万円をもって、同業者と合同し、東京作業服有限会社を創立して、取締役社長となりました。その構成メンバーを実績順に挙げると、田村和俊、高坂多四郎、早川英俊、田中清人、徳永良太郎、八島福栄、岩井弥之助、太田鈴三、大滝繁造、宇野広男、浅田徳太郎の諸氏でした。

生産面では先に登録された、ミシン所有者を集めて、第三十六作業服工業小組合を結成して、私は理事長となり、東京都作業服工業組合員となる資格を取得しました。こうして、商工双方の代表者資格を握った私は、傘下の構成員を代表して、戦時統制下に全力を振り絞って、経済活動を続けたのであります。なにしろ、生産部門における裁縫業者は、受託縫製組合を始め、軍需品縫製組合等、十数組合が全部解散して、東京地区一本の作業衣組合に、強制加入を命ぜられたのでありますから、大変な騒ぎでした。特に零細業者の多い受託縫製者の統合は、非常に困難を極めたものでした。

神田の問屋側としては、何としても主導権を取らなければ、万事に都合が悪いし、一方裁縫業者とすれば、生産を主とした統制であるから、自分の方で主導権を握ろうと必死の活動が展開されました。他方大工場を傘下に納めている軍需品縫製業者は、戦時下の統制の主導権は、当然自分達が優先すると、三者三様の狙いで、監督官庁の東京都庁に向かって、猛運動を展開しました。結局のところ、新組合の理事長には、わが業界の長老沢井三五郎氏が決定し、受託組合側から大出二男氏、問屋側から私が常務理事として就任し発足しました。創立当初は、堀川辰男、松井彦治、武田武士と三人の書記を使って、古着市場ビル二階に事務所を置き、旧組合の仕事を引き継ぎながら、新機構に乗せて行くのですが、統制業務には全員不慣れで、困難を極めました。毎日下部機構の団体から引っぱり出されて、説明会を開くやら、自分勝手の陳情攻めには、脅迫と懐柔の総攻撃を受けている様な気持ちでした。

統制経済下２　東京被服工業組合の専務理事の椅子につく

幸いに私は組合法を熱心に勉強し、統制業務には深い理解を持って、業者に接しましたので、最初は私を目の敵にしていた人達も、段々協力支持者に回り、昭和二十四年春、組合が解散するまでの九年間を、東京被服工業組合の専務理事の椅子について貴重な体験を得る事ができましたのは、私にとって大きな収穫でした。兎に角昭和十六年という年は、広くは日本にとって、小さくは私個人にとっても、文字通り多事多難の年でした。国民の全部が自分の意志で、自由に動く事を禁じられ、統制の枠内だけで動くことが許されるという状態でした。衣食住、職業、勉学みな然りです。その上に貴重な生命までも、一片の紙切れが舞い込めば、否応なしに国に捧げなければならない状態でした。多くの友人知人が、赤紙招集で軍歌に送られて行く時、上野金太郎、徳永良太郎御両氏が応召されたのは、特に印象深いものがありました。

七月二十五日、秘密動員による招集令状を受けた両君は、極秘のうちに所属部隊へ入隊されました。商売の方は企業整備で処理された後でしたが、個人的には重要責任を負わされた両君が、家族や従業員を振り捨てて、国難に赴く御心情は、さぞかし身を切られる思いであったであろうと、お察しいたします。

当時青興睦会の会長であった私は、何としても盛大な送別会を開くべきものと、心に決めて、いろいろ工作したのですが、四囲の事情はそれを許さず、そこで、せめては両君に対する感謝を捧げる会を発起して、会員や業者の家を一軒一軒説き回って、七月二十八日の夕刻から、浅草の草津料亭に、上野、徳永両氏をお招きして、感謝の会を催しました。さすがに両氏の徳望は大したもので、参加者は百数十名に達し、草津の大広間も満員の盛況でした。土地の芸者衆もオールサービスで、飲み物もまだ無理の利いた時代でしたから、宴は夜の更けるまで続きました。然し困った事には、出征、応召、動員なんて言葉は一切禁句でしたから、送る人も送られる人も眼と眼でものを云う有様でした。主催者の私が述べた挨拶も、両君の謝辞も、奥歯にものが挟まった様な珍なものでした。私は大体こんな挨拶をした様に覚えています。

「本夕、上野、徳永御両氏を囲む感謝の会を開催しました処、その趣旨を

諒とされまして、かくも多数の御参会を頂きました事は、御両氏に対する友情の現れとは思いますが、主催者として真に有り難く御礼申しあげます。

上野、徳永ご両氏は、この度ご自分の意志によらざる旅に出られる事になりました。御出発当日は、お送りする事が出来ない事情にありますので、日頃御両氏が業界に尽くされた功績に感謝を捧げると共に、旅先での御無事を祈り、一日も早く元気にお帰りになられます様お待ち申しあげます。御旅行中のお留守宅は、私共一同出来得る限りの御支援を致す所存ですから、御安心の上、健康には特に留意されて、元気にお出かけを願います。尚本日出席された方々の名簿と記念品を贈呈して感謝の意を表します。」

上野、徳永両氏から、それぞれ謝辞があって、その夜は三次会まで発展して、名残を惜しみました。

上野氏は、郷里福井県の所属部隊に入隊の為に、七月三十日に東京を出発されました。徳永氏は、戸山ヶ原にあった衛生部隊へ、三十一日早朝に入隊されました。普通の出征軍人を送る風景とは凡そ違ったものでした。店の戸は閉めて幕を掛け、親類縁者や知人と最後の別盃を酌み交わし、出征のご本人は、寝間着姿のままで、フラリと表に出て歩き出す有様でした。近所の人達も遠慮して、家の中から目礼で送りました。家族の人も付き添いの人も、奉公袋を風呂敷に包んで、本人から50メートルも離れて、三三五五後に続きました。私も戸山ヶ原まで送りましたが、勿論部隊の近くまで行けないので、実にあっけない別れでした。万歳の声もなく、旗一本もない、淋しい応召風景でしたが、それが徳永君との六年間の永い別れとなりました。

統制経済下３　戦時下の作業被服工業組合事情

親友の上野、徳永両氏を戦場に送った私の気持ちは、妙に淋しい空虚なものでした。

上野氏は応召後間もなく、マレー半島各地に転戦されましたが、戦場から銃後にある我々に、しばしば激励指導の手紙をくれました。明日をも知れぬ最前線から、家庭や家業の事まで、こまごまと心に留めて書き送られる御心情には、只只敬服したものです。

また、お留守を預かる奥さんが、実に見上げた方で、ご主人の教えを忠実に実行されて、家庭を守り、従業員の育成に当たられ、あの経済事情の困難を極めた悲境時代を、よく切り抜けて、銃後の守りを全うされたお手柄は、戦線の勇士にも劣らぬ見事なものでありした。

この偉大な内助の功があってこそ、終戦後昭和二十一年六月末に、敗戦の痛手を負うて故郷に帰還されたご主人を、温かく迎えて、再起の道を歩き、今日の上野衣料の隆昌を、完成されたのでありましょう。

勿論上野氏の力量手腕と見識の高さによるものとは、何人も信じて疑わないものですが、その陰に誠実と愛情を貫かれた、奥さんの功績が大きく、光輝いている事を見逃せません。どうか上野ご一家が益々繁栄あらん事を祈って止みません。

一方徳永氏は、応召後間もなく大陸満州へ向かい、転進して、あの激戦地ラバウルへ行って、そこで終戦を迎えたのであります。

帰還されてのは、上野氏より一ヶ月程早く、五月末でしたが、偉丈夫の徳永君も、栄養失調にはこたえたとみえて、痩せ細って、やけに背の高さだけが眼につく、気の毒な姿でした。同君の出征後、家庭には不幸が重なり、留守を預かる奥さんは、大変な苦労をされました。年老いた義父母と、十才を頭に三人の男児を抱え、その上妊娠六ヶ月の身重でした。また義父は耳が遠く、義母は眼が不自由でしたから、身重の奥さんが、御両親の世話から、子供さん方の養育に、心労される日々は、並大抵ではなかったと思われますのに、その年の十月二十六日に、三男光伸（三才）さんが、急性腹膜炎で他界しました。ご主人の留守中に、可愛い盛りの子供さんを死なせた、奥さんの心境はどんなでしたでしょうか。奥さんは翌十七年春に、女の子を安産されましたが、その年の十一月には、義父が急死されました。悲喜こもごものお留守宅は、戦争の激化で、いよいよ東京も危険に曝される様になってから、埼玉県熊谷市に疎開して、間もなく終戦を迎えました。

昭和二十一年五月、ご主人が復員後、東京に出て、困難な経済事情下に、徳永商店を復活させた内助の功は、真に天晴れであったと感じ入ります。永い間お仕えになった義母は、天命を全うして数年前八十余才で他界され、三

男一女の子供さん達も立派に成長されました。

しかし、この良き妻、良き母も、天の恵みは意外に薄く、何時か胃がんに侵されて、五十才で去る八月十八日永眠されましたのは、返す返すも残念であり、お気の毒に堪えません。謹んで哀悼の意を表します。

顧みれば、昭和十六年十二月八日、我が国の米英に対する、宣戦布告によって、全日本の国民は、好むと好まざるに拘わりなく、遂に行く所迄行かざるを得ない、悲運に道ずれにされたのであります。

勝負は時の運と云いますが、国を賭けた大ばくちに全国民が、国家総動員法という綱に縛られたまま、無我夢中で働き続けたのであります。

戦時下の作業被服工業組合は、事務所を岩本町角の古着市場ビルから、昭和通りに移して、職員も三十人位に増員されて、活発な活動に入りました。

その当時東京地区内で、第一類に登録されたミシンは、約七千台で全国登録台数の一割強でした。組合員数も百二十名前後で、民需、軍需の被服加工割当から、検査、納品、加工料支払い等が業務内容でした。業務部の職員には、業界出身者が多く従事しました。総務部長には、唐木田義朝君が就任し、製品検査役に就かれた人達で、現在業界で活躍されて居る方々に、岡本商店社長、丸豊商店社長、栄衣料社長、ふたば衣料社長、まこと衣料社長、八島商店社長等があります。

佐貞商事社長や、三浦商店社長等は、中央統制会社の業務部に勤務して、被服業界に貢献された方です。

統制経済下４　経済統制下の庶民の暮らしぶり

大東亜戦初期の頃戦線における皇軍は、連戦連勝で、将に意気天をつくの感がありました。当然国内も戦勝気分が至る所に溢れていました。然し、物資事情は段々と民需品が不足して、徴用は次第に激しくなり、若手は続続と応召して行くので、工員不足となり、作業不能になる工場も出て来ました。

戦局の拡大に連れて、軍需物資の生産が間に合わなくなり、空襲のサイレンが不気味に鳴り渡る、灯下管制下の作業は、益々渋滞するばかりですが、

それでも全国民は、打って一丸となり、必勝を期して、老いも若きも、女も子供も、軍需工場に勤労奉仕に働いたものです。

華やかだった花街の灯も消えて、美しい姐さん達がモンペ姿で、三味線を持った手で、兵器の風船貼りをすれば、学童疎開が始まって、愛し子と別れ離れのやるせない生活が、随所に見られました。日常生活は、総べてキップ制の枠がはめられて、普段酒もタバコもやらない人達が、配給割当を貰って、却って迷惑顔をしている光景も見られました。

国民酒場の行列に、飲めもしない友達を連れ出して、友達の分まで飲んで、満足している様な、手の込んだ飲み方もあったものです。また、あの手この手で、物々交換が盛んとなり、闇物資は百鬼横行の有様でした。町々の姿も一変して、商店は店こそ開けていますが、売る様な商品は一品もなく、商品を山の様に積んでいる所は、配給所と限られていて、早朝から人垣を作っていました。外を歩く人々の服装も、婦人はモンペに防空頭巾、男は国民服にゲートル巻きで、鉄兜を冠っていたものです。頻繁に行われる防空演習ともなれば、町の旦那さんや奥さん方も、鳶口や火はたきを持って駆け回り、バケツリレーを真剣にやったものです。軍の命令で、銃後の国民教育には、在郷軍人が指揮に当り、誰彼の容赦なく、広場に狩り出しては、竹槍教練を強行しました。ヘッピリ腰の構え銃、エイエイヤーの掛声が、やだやだとこだまするのでした。なまじ初戦で勝った事が仇となり、図に乗って手を広げ過ぎた所から、武器弾薬の補給が続かず、次第に負けが込んで、アツツ島、キスカで全滅し、ガダルカナル戦ではガタガタと崩れて、全く処置なしでした。南洋諸島は孤立に陥って、糧食を送る船もなく、将兵は枕を並べて無念の戦死を遂げたと聞きます。パラオ諸島の陥落で、Ｂ２９の航空基地となり、この為に日本全土は、空襲の洗礼を一層激しく受ける結果となりました。硫黄島の攻撃も、敵の物量作戦に屈して、わが将兵は恨みを飲んで全滅しました。

こうして戦況の重大変化に伴い、国内の統制体勢も極度に引き締められ、総てが軍需品優先で、民需関係は文句なしに後回しです。

その頃組合事務所は、昭和道りから、立花ビル（現在の早川正商店）に移転しました。陸海軍の被服を優先的に縫製する為に、民需品の生産は手も足

も出ない有様でしたが、通産省では、各類の大統合を計って、上から下までの一本の団体に、統合命令を出したような次第でした。組合の創立当初は、理事長に沢井三五郎氏、私と大出氏が常務理事で発足しましたが、、沢井氏は半年後に辞任されたので、後任理事長に、麹町の佐藤被服社長佐藤嘉三郎氏を迎えました。ところが佐藤理事長は、ご自分の店の方が多忙で、組合の出勤は、週に一回位で、外部との折衝に不都合を生じて、遂に辞意を表明されたので、私は佐藤氏を口説いて、佐藤被服の常務石丸武雄氏を、後任理事長に迎える事に成功しました。石丸氏は京大出身の法学士で、先代佐藤社長に懇望されて重役となり、当時専ら諸官庁との折衝に当たっておられ、組合理事長には最適任の方でした。こうして各類統合団体には、部制が布かれ、第一類の作業衣部長に私が就任し、第二類の既製服部長に伊藤兵衛氏、第三類の布帛部長に竹内宗太郎氏、第四類の和装部長に山川氏、第五類の中等服部長に鈴木豊太郎氏らが、それぞれ常任理事兼部長として就任しました。

統制経済下５　防衛招集で留守の間に妻が鎌ヶ谷へ疎開決行

　昭和十九年の秋に、東京都と山梨県を地区とする、強力な衣料品工業統制組合が設立されて、事務所も日本橋大伝馬町中川商店跡の大きな建物に置かれ、甲府市、八王子市、青梅町の三カ所に支部が出来て、ここに綜合的な生産統一が進められる段取りが出来上がりました。職員も百数十名の大所帯となりました。一方上部団体である中央統制会社も、各類統合によって、代行店の第二次整備が断行されて、その結果多くの代行店が廃業となりました。私の関係した東京被服有限会社も、この時に廃業解散となったので、私もそれ以来組合の仕事に専念する様になりました。私はそれまでにも徴用令状を三回程受けましたが、その都度陸軍被服廠の証明書のお陰で、徴用解除となっていました。ところが突然或る日に、防衛招集令状が舞い込んだのには驚きました。この令状を受けた在郷軍人は、居住地を離れる場合は、帝都防衛司令官の許可を受ける必要があり、又空襲下の警戒警報発令の時は、直ちに所属部隊に駆けつけて、防衛任務に就くべし、というやかましい規定があったのです。従って常時軍隊手帳と、防衛招集令状は、肌身離さず持っていな

ければならないのです。私の所属部隊は、九段坂上の近衛師団でした。警戒警報がウーウーと唸りだすと、直ちに部隊へ駆けつけて、被服や兵器を受け取って、一時間後には、部隊編成を終わって、出動するというスピードぶりでした。私の派遣されて行く先は、九段坂下にあった憲兵隊とか、ビルの屋上に設けられた高射砲陣地であったりで、常に移動していたので、日雇い兵隊という格好でした。ですから、警報解除になると、部隊本部に戻って、被服や兵器を返納して、私服に着替え、一日分の俸給を貰って帰宅するという具合でした。

こんな非常勤務が数回あった後で、特別教育を受ける為に、当時牛込にあった騎兵隊へ、二十日間の入隊命令が出ました。久しぶりの兵営生活は、結構楽しいものでしたが、教育が終わって帰宅してみたら、意外千万にも、我が家は無人の空き家になっているではありませんか。これにはびっくりしました。家は私の留守中に、妻が予ての計画通り、疎開移転を実行したという訳です。妻は早くから子供達の為に、安全な場所へ疎開する事を、強く主張していました。予てから、千葉県鎌ケ谷町に、古い家を一軒農家から買ってあったのを幸いと、私の招集中にサッサツと移転を強行した様な次第でした。二十日間の特別教育を終わって、ヤレヤレと帰宅して見れば、我が家はこんな状態ですから、私は重い足を引きずって、国電で船橋駅まで行き、東武野田線に乗り換えて、鎌ヶ谷の疎開先まで辿り着きました。この家は五十坪もある古い農家ですが、疎開荷持がそちこちに放り出されている中に、子供達はいたって元気で飛び廻っているのを見て、私も初めて安心しました。妻の姿が見えないので聞くと、リヤカーを引いて畑へ行っていると云うのです。畑へ行って見ると、妻は馴れない手つきで、一生懸命に畑を耕しているではありませんか。私も思わず目頭が熱くなりました。元来私は百姓の三男に生まれて、野良仕事にも多少の心得はありますが、妻ときては、東京生まれで東京育ち、百姓には全く無縁ですから、地下足袋を履いて、肥桶をリヤカーに積んで、二キロもある畑までの坂道を運ぶ様な仕事は、並大抵ではなかったと思われます。或る時、読売新聞記者の訪問を受けたので、いろいろと苦労話をしたところ、読売新聞全国版に、写真入りで、「国家に協力する

模範疎開者一家」の大見出しで、三面記事が載ったので、忽ち村中の評判になったと云う事でした。その後地方新聞にこの記事が転載されたのはよいのですが、困った事に、あまり有名になったお陰で、村では食糧が自由に手に入らなくなってしまいました。村の人達の考えでは、“早川さんにヤミで食糧を売ると、新聞社と仲が良いので、具合が悪い”と勝手に決めて、どうしても食糧を売ってくれないのです。これには私も困りました。仕方がないので、私は組合からの帰りに、東京から高い食糧を買って、田舎へ運ぶという事を繰り返しました。

村では有名人になって大変面目を施したのですが、日常生活の面では、どうも村の人達から敬遠される様になったのには閉口しました。

疎開先１　疎開先から日本橋の組合事務所へ毎日通勤

昭和十九年三月二十七日、私が防衛招集で留守の間に、妻が一家をまとめて、千葉の田舎へ疎開して行ったのは、何と云っても妻の大手柄でした。そして私達家族が、疎開先で味わったいろいろの体験は、人生修行に貴重な教訓となりました。永い年月を都会の混乱の中で、生活して来た私達家族が、いきなり何の準備もなく、田舎の土の生活に飛び込んだのですから、その苦労たるや、並大抵のものではありませんでした。幸いに家と土地は買ってあったものの、配給制度のやかましい戦時下では、バケツ一個でも遠くまで足を運んで、物々交換でなければ、手に入らない始末でした。畑仕事の道具を一通り揃えるまでには、私達の持っていた衣類も大分減っていました。買ってあった山林と畑で、四千五百坪もあり、燃料には不足しないのですが、山から取って来るのに、人手不足で困りました。

私は毎朝早く日本橋の組合事務所へ出勤し、帰宅は大抵夜の十時頃になりました。家では小学六年生になった長男を頭に、五人の子供を抱えて、妻が中心となって働きました。

私達が疎開してから間もなく、妻の両親が、病身の妹を連れて同居する様になりました。そこで子供達の世話は、妹に頼み、両親と妻の三人が畑仕事をするようになりました。戦時中の事ですから、村でも当然疎開者も夜警と

か勤労奉仕の割当があったのですが、若い働き手のない私の家では、いろいろ困った場面に直面しました。私は日曜日以外は家にいない日が多く、妻は乳飲み子を抱えており、妻の両親は老人のことであり、妻の妹は病身ですから、無理な仕事は出来ません。そこで小学六年になる長男を代表格で奉仕に出してやる羽目になりました。十一やそこらの子供が、学校を休んで、飛行場の草取りや、道路の補修に狩り出されるのですから、私共夫婦も真に辛い思いをしました。また夜警当番の時など、空襲警報が出ると、高い火の見櫓に登って半鐘を鳴らすのが、この長男の役目でした。半鐘の音を聞きながら、どうぞ落ちない様に、無事で降りてくれます様に、と念仏を称えていたと、妻は今でもその当時の事を思い出して語っています。不思議な事に、私の在宅中は、空襲のあった事はなく、いつも留守の時に限って、ブウブウ警報が鳴りますので、私も長男には気の毒でなりませんでした。まだこの頃は本格的な空襲はなく、小型の偵察機が二三機位、三日目置き程度に飛んで来るのを、日本軍の高射砲が撃ちまくり、時たま敵味方の飛行機の空中戦が、展開されるくらいのものでした。東京の人達も図々しくなって、警報が出ても避難する者もなく、中には屋上に出て、空中戦を見物する様な光景も見られました。

昭和十九年末になって、B29の空襲を受けて初めて東京都民も、空襲の恐怖を感じ取った様です。

この時の空襲は、数機のB29が東京の上空を西から侵入して、東へ抜け房総沖へ出たのですが、所々へ１５０キロ爆弾と焼夷弾を落としました。神田駅付近に投下された爆弾の被害が、一番大きかった様に思います。この日私は地方に出張していましたが、帰京して久しぶりに、疎開先の我が家に帰って見ますと、村中が騒がしく、妙に殺気だっています。家族の者達も顔色を失って、恐怖に戦いている様子です。訳を聞いて私もビックリしました。村が爆弾の洗礼を受けたと云うのです。いつもの様に警報は出ていたが、まさか爆弾を落とされるとは思わないので、気楽に寝ていたら、突然ザアッと物凄い音が、屋根すれすれにしたかと思うと、いきなり天地も裂ける様な爆発音が起きて、家がぐらぐらと動き、戸障子が外れ飛ぶ中を、家族達が外へ飛

び出すと、頭からざらざらと砂嵐が降って来たそうです。

疎開先２　250キロ爆弾13個の至近直撃を受け9死に1生

　２５０キロ爆弾が、私の家の背戸から１００メートル程離れた山腹に、数発落下して、松の大木を根こそぎ吹き飛ばしてしまいました。
人畜に被害がなかったのは、幸いと云うしかありません。

　私達の住む村の上空は、敵機の通路になっていたらしく、東京が空襲される時は、決まって片道か、どうかすると、往復共に通過する様な事になっていました。B29の空襲が本格的になると、さすがの東京都民も、疎開ということを、真剣に考える様になりました。政府も慌てて強制疎開の集団疎開を命令する様になり、お陰で地方の農家は、馬小屋から納屋まで開放して、都会人の受け入れに当たる様な始末で、農村の人口はあっと云う間に膨れ上がっていきました。私達一家は、普段の心がけが良かったせいか、一足お先に疎開していたので、農村の生活にも馴れてゆとりのある暮らしが出来たのは、幸福であったと思います。

　一方東京都内にある縫製工場も、爆撃の危険を避けるためと、工員の疎開が相次ぐので、工場を地方に移す者が増加してきて、遂に旧市内に組合員の工場が、殆ど見られなくなってしまい、組合の職員も近県に疎開する者が続出し、交通事情も悪くなる一方で、一時は組合本部の機能も、麻痺状態に陥りました。そして八王子、青梅、山梨の支部を中心に、組合業務を進める様な事になりましたが、相互間の連絡が遅れがちで、業務の運行には、随分苦労したものです。

　昭和二十年二月二十四日の大爆撃は東京の下町一帯を焼け野原にする程の猛威をふるったものです。神田岩本町周辺地区を灰にしたのもこの時です。

　作業衣の代行店で、荷受所であった、沢井氏所有の鉄骨ビルには、当時純綿作業服がギッシリと積み込んであったのですが、これに火が入ったので、三日間位燃え続けていました。この大空襲以来、敵機は昼夜の別なく、帝都の上空に飛来し、大編隊を組んで、波状攻撃を加えて来るのですから、たまったものではありません。大東京の大半は無惨な姿に変わって行きました。

三月初旬の或る日、私は組合を休んで、疎開先の藤ヶ谷飛行場近くの山林に、木樵を一人連れて、雑木の伐採に出かけました。二人で一生懸命に作業を続け、携えて行った弁当を広げて、昼食を摂っていると、敵機襲来を知らせる、半鐘が鳴り出しました。間もなくすると、東京方面から、市川の上空に敵のB29が、高度三千m位で悠々と飛んで来るのを、私達は呑気に見上げていました。ところが、急に別の編隊機が、市川方面から、真っ直ぐ私達の頭上に迫っているのを発見した時には、全く息の根も止まる程の驚きでした。軍隊教練を受けた私は、咄嗟に自分が爆撃圏内にある危険を感じて、山から伐り取って束ねた雑木の中へ、頭から身を突き込んで、思わず念仏を称えたものです。ピユーン、ザザーツ、ズドッン、これはその時、投下された爆弾の実況音です。爆弾は一旦地中にめりこんでから、爆発するのですが、吹き上げた赤土が、硫黄の臭いと一緒に、私がもぐっている雑木束からはみ出している、下半身へバラバラと降って来るのですが、生きた心地がないとは、こんな状態をさして、云うものでしょう。危険が去った後で当りを見回すと、私の居た場所から１０m位の所に、高さ７mもあろうという土手が、忽然と出現しています。ふらつく足で、その土手に這い上がって見ると、すぐ下の方に擂鉢型の大穴が、ポッカリと口を開けていました。気を落ち着けて良く見ると、約百m位の周辺に、爆弾を喰らって出来た、急造の土手と大穴が、実に十一カ所もあったのには、驚きを超えて呆れてしまいました。幸いに私も木樵も、かすり傷一つ負わなかったのは、天佑神助と云う他はありませんでした。この時敵機が投下したのは、２５０キロ爆弾１３個でした。

疎開先３　3回目の死に直面し、さらに再招集で兵役に

これは、いずれも近くにあった、飛行機格納庫を狙ったものが、外れて私達の身辺を襲ったという次第でした。この集中爆撃を喰らっても、尚克つ微傷だにも負わなかった事に対して、私はその頃本気で、“俺の体は、神仏が護っていてくれるのだ”と、かなり強い自信を抱いたものでした。私は過去に三度も死線を越えた記録があるのです。その第一回は、十五才の時に、奉公先で重い肺炎にかかって、死の一歩手前まで行った事、第二回は、十六才の時

に、肋膜炎で入院し、死線を彷徨った事、第三回目が、戦時中の疎開先で、爆弾十三個の洗礼を受けた事です。

この爆撃に遇った数日後の二十九日未明に、行われたB29の大空襲は、それまでにない大掛かりなものでした。東京の下町一帯は、全滅的な被害を被りました。総武線も市川から先東京間は不通となり、道路も破壊され、歩行困難な箇所が相当沢山出きたという情報があったので、私も組合出勤を断念して、ずっと家で暮らしました。十二日の朝、常磐線廻りで、久しぶりで東京に出て見ますと、神田から日本橋、本所、深川、砂町方面と、一望の焼け野原と化し、まだ所々に崩れた廃墟から、白煙をあげている光景を見ては、暗澹たる気持ちにならざるを得ませんでした。

日本橋の組合事務所まで辿り着きましたが、無論事務所の建物は、影も形もありませんが、焼跡の地下室から、都内居住の職員達数十人が持ち出した資料、資材を整理して居る所に顔を出して、一同無事だった事を喜び合いました。組合の役員は、私以外には一人も姿を見せず、連絡も取れない始末でした。

近所に在った日本衣料統制会社も全焼して、事務所は四谷駅前の女学校の校舎の一部を借りて、そこへ移ったと聞いて、私も組合事務所を、麹町にあった佐藤被服さんのお店へ移すべく、佐藤さんに交渉した結果、快諾を得たので、焼跡にその旨の立て札をして、翌十三日からは、麹町事務所に出勤する様、職員達に申し渡しておいて、その日の夕方六時頃、鎌ヶ谷の自宅へ帰りました。

すると、家の様子がどうもおかしいのです。何かあったな、と直感して妻に尋ねると、“お話は後でしますから、とにかく、お風呂に入って下さい。”と云うのです。私は疲れた体を土間の片隅の方にある、据え風呂につかって、明日からの組合の方の仕事等、あれこれと考えにふけっていると、珍しい事に、妻が、“背中を流しましょうか”と声を掛けて入って来て、私の背中を流しながら、落ち着いた声で、「貴男に招集令状が参りました。」と云うのです。私は妻が余り落ち着きはらっているので、また、防衛招集でも来たのか、という軽い気持ちで、「何時からだ」と聞き返すと、妻の報告は、意

外に重大な内容を持つものでした。明日午前十時迄に、世田谷三宿の砲兵連隊へ入隊する事、その前に千代田区役所兵事課に出頭して、招集令状を受け取る事、これには、流石の私もドキンと胸を打たれました。招集令状は、十一日に発令されていたのですが、空襲があった為、指定しておいた令状受取人が行方不明で、区役所も警察電話で、鎌ヶ谷役場に連絡したという事でした。明朝十時迄に東京の西端にある、世田谷の砲兵連隊に入隊せよ、という招集令状ですが、混乱している交通機関で、果たしてその時刻迄に到着出来るであろうか、また、明日に迫っていては、親類知人に会う暇もない、組合の仕事についても気掛かりである。困った困ったで、気も落ち着かないままに、妻の暖かい心遣いの赤飯とドブロクで、家族だけのささやかな別れの宴を張りました。その夜は、妻と長男俊一に、重要書類の引き渡しや、貸借関係、財産目録の説明などで、夜を明かし、翌朝軍服に身を整えて、朝食を摂り、仏壇に向かって祖先の霊に、最後の別れを告げ、家族と隣家の二三人の見送りを受けて、淋しい出征の門出をしました。電車の不通を考えて、自転車の荷台に長男俊一を乗せて出発しました。

応召　再招集命令によって東部一八〇五航空通信部隊配属に

招集命令によって昭和二十年三月十三日、千葉県鎌ヶ谷村の疎開先から、長男俊一を自転車の荷台に乗せて、東京まで八里の道を、走る覚悟で家を出発しました。念の為途中で鎌ヶ谷駅に立寄り、列車の運転状況を尋ねると、幸いにも柏廻りで常磐線を利用すれば、上野駅へ午前八時頃には着けるだろうという事です。そこで自転車を捨てて、汽車で上野まで出る事にして、鎌ヶ谷駅で長男俊一と別れる事になりました。見送る者は小学六年生の俊一ただ一人です。これが今生の別れになるかも知れないと思うと、親の情として、目頭が熱くなるばかりで、俊一のいたいけな姿が霞んで見えてくるのです。“お母さんを助けて弟妹の面倒をよく見て、丈夫でしっかり頼むぞ”と、彼の手を握ってやると、彼はウンウンと頷いているばかりです。

こうして私は軍服を着て、奉公袋を片手に、妻の心づくしのドブロクを詰めた水筒を肩に、折から入って来た汽車に乗り込み、窓から顔を出して見る

と、俊一は無言で淋しそうに手を振っていました。

柏駅まで三十分、上野行きの列車に乗り換えて、ホットした途端に、今度は急に先々の事等が、走馬灯の様に私の脳裏を駆け巡るのです。戦争の激しくなるにつれて、親兄弟も次第にバラバラになって、それぞれ疎開してしまい、普段はおろか、大事な時にも連絡さえつかない有様です。去年の秋、私達兄弟の五男茂孝が応召した時は、まだ親兄弟が寄って、賑やかに送別会をしてやれたものです。この弟もフイリッピンの前線に行ったまま、生死も不明である。（後に戦死と確認された）老父母は下石神井の方で暮らしていたが、母は前月六日に病死していました。母の他界は悲しいものでした。病体急変で、父が方々に散っている子供達や、兄妹親戚に電報を打ったのですが、一人もその死に目に会えなかったのです。母は父一人に見守られて、淋しく静かに死んで行きました。子供達の親戚が集まったのは、母の死後五日目の二月十一日でした。この日は前夜から大雪で、東京では珍しく膝を没する位に積もりました。無論交通機関は殆ど途絶状態です。おまけに空にはB29や艦載機が飛来して、舞い狂うという物騒な時です。私達兄弟だけの手で、母の柩をリヤカーに乗せて下石神井から、下落合の火葬場まで、二里の道を運びました。大雪の中を六人の子供達に曳かれて、火葬場に送られた母の霊もさぞ満足したであろうと、今でも思い出します。

さて話は横道に外れましたが、応召で駆けつける私を乗せた汽車は、予定通りに八時頃上野駅に着きました。駅前から自動車を走らせて、千代田区役所に行き、招集令状を受け取ってから、四谷駅前の組合仮事務所である、佐藤被服さんのお店まで直行しました。午前九時頃でした。応召姿の私を見て、組合の職員達もびっくりした様です。そこへ突然にも私の長兄秀一が、千葉県野田の疎開先から、ひょっこり姿を見せたので、私も驚いたが、兄も驚いた様です。それから佐藤社長や居合わせた人達の、壮行激励の言葉を浴びながら、私が持参したドブロクで、別れの盃を交わし、思わぬ所で万歳の声に送られて、世田谷三宿の野砲連隊に入ったのが、指定時刻午前十時に五分前でした。召集兵は部隊前の空き地に集められて、点呼があってから、初めて営門に入りました。それから身体検査があって、被服の支給、兵器が渡

されて、もう完全な兵隊さんになってしまいました。無論家族との面会も、通信も一切禁止されていて、野戦行きは決定的の事でした。然し、何時何処の戦線へ送られるかも、皆目分かりません。数日間はただ、無我夢中で過ぎました。その間何回となく、部隊編成替えがあって、私は東部一八０五航空通信部隊配属となり、三月二十日、三百人程の召集兵部隊は、新宿まで行軍し、新宿から京王電車で、神代村まで行き、十五分歩いて、新しい兵舎に入りました。その航空通信部隊は、設置されて間もないものでしたが、無線通信機を携えて、小隊か分隊編成で、前線各地の島々や部隊に、派遣されるのが任務でした。

私の現役当時は、歩兵本科でしたから、無線通信など、全然縁もないので、その事を上官に上申してみますと、中隊長は若い大尉でしたが、『お前は何が一番得意か』と聞かれたので、私も正直に、『鉄砲を打つ事と、自動車の運転位のものであります。地方に居た時は、組合の役員で、毎日判子を押す事が仕事でありました。』と答えたら、若い中隊長は、ニコニコ笑っていたが、『お前の年では、新規に無線打法を習うのは無理だろうが、上手にならなくてもよろしい、皆と一緒に一通り勉強しておけ』と言われました。

それから私は毎日朝から晩まで、トトツウトツトツの練習に励みましたが、てんでものになりませんでした。

私と一緒の召集兵に、映画俳優の佐野周二君がいました。彼は三度目の応召で、曹長になっていましたが、やはり無線の方は全然駄目でした。私の階級は兵長で、兵隊と下士官の中間です。年令三十八才では、中隊でも真に扱い難い存在らしかったと思います。

四月初旬に私達の中隊は、竹橋に在った東部軍管部司令部の、合同通信所を受け持つ事になり、四谷駅前の双葉女学校を徴用して、これを宿舎としました。新宿舎に入って二日目の朝、宿舎前の道路で、防空壕を掘る指揮をとっていると、折から日本衣料社長の星島二郎氏が通りかかって、私の姿を見ると、ビックリしておられました。

私達中隊は、三個小隊が二十四時間勤務の三交代制で、戦時勤務に就いていました。私は第一小隊第二分隊で、電報班長の任務を命ぜられていました。

通信分隊の仕事は、電報係、暗号係、配達係、発信係、受信係に区分されていて、上下番は午前十時で、上番の小隊は、宿舎を午前九時に出発し、下番者から申し送りを受けて勤務に就き、翌朝十時まで勤務して、下番昼食後に就寝、次の日は休養という楽な仕事ですが、航空兵科である為に、給与は総べて甲が支給されました。胸にプロペラの付いたマークをつけて、街を歩けば、子供達は、飛行機乗りの兵隊さんと、歓迎してくれる程、当時の航空兵は人気がありました。

電報班長の私の仕事は、部下が書いた発信簿と、受信簿に照合して頼信紙に認め印を押すだけで、勿体ない程楽な日常生活でした。ただ、自由に外出出来ないだけが、娑婆の人間と違う所でした。

ところが、間もなく私は送信所長に任命されて、技隊長という資格を得たものですから、常時外出証を所持して、何時でも自由に外出出来る様な事になりましたのは、たいした昇進ぶりで、私も大いに得意でした。

私の分遣された送信所は、九段坂上にある大妻女学校に隣接した、大橋新太郎氏の屋敷跡に、焼け残った土蔵があり、その地下室が素晴らしい上等の室になっていたので、これを軍で徴用して送信所に使ったものです。この送信所から電波を直接発射すると、敵機に感知されて、爆撃を喰う恐れがあるので、数キロ離れた地点に、有線で送信して、そこから発信していました。

私は部下十人の兵隊の長となって、九段送信所を指揮したのですから、戦時下の軍隊生活といっても、それは楽しいものでした。こうして営門も歩哨もない、全く自由な軍隊生活が終戦まで続きました。

終戦当時１　8月18日正午には鎌ヶ谷の自宅に除隊帰宅

昭和二十年三月十三日に応召して、航空通信部隊に配属され、その年の五月には九段送信所長に任命されてから、私達の中隊は四谷駅前の、双葉女学校校舎から、水道橋前の都立工芸学校に移りました。私の任務と云えば、毎日一回宛、中隊へ命令受領に行く以外には、これぞという用もないので、退屈する程呑気な軍隊生活でした。然し、戦局の方は呑気どころの騒ぎでなく、日増しに日本軍は不利に追い込まれ、はっきりと負け戦が国民に分かり始め

た頃は、もう国内の主要都市は、殆ど敵機の思うままに粉砕されていました。
　沖縄の陥落に次ぐ、広島、長崎への原爆投下によって、遂に日本も最後のとどめを刺され、おまけにソ連の参戦という、景物までついて、平和交渉の望みも断たれ、夢にも思わなかった、無条件降伏を余儀なくされる始末で、涙を飲んで、ポツダム宣言を受諾し、八月十五日正午には、天皇陛下が、ラジオを通じて終戦の詔勅を放送された様な次第です。
　無条件降伏によって、国内各地では若干の混乱、動揺はありましたが、私の所属部隊では、部隊長の決断によって、家族持ちの招集者は、十八日には、招集解除が行われ、各自は米一斗に毛布四枚、被服その他が支給されて除隊となりました。
　そんな訳で私は八月十八日正午には、すでに、千葉の我が家に帰る事が出来ました。然し終戦後も永い期間を部隊に留まって、米軍から武装解除を受け、使役に廻された戦友や、遠く外地で苦しい抑留生活を送った人達を考えると、私の応召生活は、全く幸運であったの一語に尽きると思います。終戦で国民はホッと、一息ついたのですが、その一息の中には、この先々敗戦国民のみじめな暮らしや、戦勝国から押し付けられる、厳しい法律で、どんな扱いを受けるかと、不安と焦りは募るばかりで、日本人の気持ちは実に暗い物でした。
　物資の偏在から、インフレを生み、買い占めや売り惜しみを助長して、金では物が買えない”時代が来て、文明期以前の様な、物物交換が活発となり、一流百貨店でも、物物交換陳列所を開設して、ボロ市の店を開く様な有様でした。
　戦災を喰った繁華街の焼跡には、地主に無断で三国人や、街の顔役連が、怪しげなバラックを急造して、金さえ出せば何でも手に入る、闇市が公然と、真っ昼間から繁盛していました。悪の不夜城は、至る所に出現しても、警察は手も足も出せず、治安は極度に乱れて、無警察状態が続きました。
　米軍のジープが街を疾駆し、マッカーサー命令は、次々に発令されて、戦時中に出来た法律は、片っ端から改廃されて、生活物資の配給制度とか、物価統制の続行が、はっきりしたのは、二十年の暮れで、これで、民心もやっ

と安定の糸口を、見つけた様な具合でした。

私達の組合機構も、一部改正されて、各類統合を解体して、業種別組合を設立し、原材料の購入、割当製造指図書等を組合がする事になり、更に従来は、原料の配給権は代行店にあったものが、通産省の指令に依って、ミシン機械に実績をプラスした、五十台以上の生産者が、組合員となる資格を与えられたので、組合も新機構を確立する事になりました。

ところで、この方法によれば、五十万の実績を持つ代行店と、五十台の登録ミシンを所有する工業体が企業合同すれば良いのですが、実際問題として両者の合同は、出来ない相談だったのです。

そこで、私は組合が斡旋して、足のない代行人には、登録権利を一台六百円の割で買い取らせ、実績のない工業者には、休業代行人の実績を、一万円について六百円の割で、譲り受けて、資格を確保する事に努力しましたので、東京の業者も、戦前と同じ実績、及び登録台数を保持する事が出来たのです。この時の整備に当たって、登録権や実績を放棄して、疎開したまま住所不明の人や、死亡した人の分は、組合が代理人となって、期日までに処分を行い、それぞれの権利者に代金を払ってあげました。

終戦当時２　　下谷稲荷町の組合事務所と青梅の工場に通う日々

昭和二十年、つまり終戦の年は、真に悲喜こもごものうちに暮れて、二十一年の春を迎えました。

終戦児として生まれた五男の広行も、食糧不足の疎開先で無事に育って、初正月を迎え、家中の者から祝われて、ニコニコ可愛い笑顔を見せてくれますと、つくずく戦争が終わって良かったと思いました。

五男三女の末っ子であった、この広行も、今では中学二年生になって、なかなかしっかり者で、元気にやっています。

早いもので、終戦から十五回目の正月を迎えましたが、あの当時の事を想い出すと、現在は本当に極楽生活です。

衣食住の全てがアンバランスで、原始生活さながらの、みじめな姿で、辛くも生きていたのも、夢の様な気がします。

婦人の買い出し部隊が、群れをなして農家を訪ね、金の代わりに、子供や主人の晴れ着を差し出して、米に代え、重いリックサックを背負って、芋を洗う様な混乱列車に押し込まれて、行く光景等、将に地獄絵を見る様な、悲惨なものでありました。

終戦当時は、組合事務所も、岩本町で珍しく焼け残った、近文商店の店舗を借り受けていましたが、その後作業被服部門が分離独立して、下谷稲荷町に組合仮事務所を設け、間もなく入谷町の大出ビルに移転しました。このビルは鉄筋三階建でしたが、戦火を被って焼けビルとなったのを、大出、西村両氏が入手したもので、組合がこれを修理するという条件で、賃借したものであります。一階を倉庫に二階を会議室に、三階が事務室、職員三十数名で、この組合本部は、二十三年末まで続きました。

私は千葉鎌ケ谷の疎開先から、毎日通勤したのですが、朝夕の乗物の混雑には閉口しました。月に三四回は青梅の工場へ、顔出しするのですが、私にとってこの青梅行きが、その頃一番愉しい日程だったのです。

青梅町は全然戦火を被っておらず、終戦と同時に、軍の貯蔵物資が、ドットばかりに流れ出したところですから、町全体が大した景気でした。私は自分が社長をしている工場に、出張して行くのですから、誰に遠慮する必要もありません。先ず高山専務の家に宿をとって、大接待を受けるのですから、愉快にならざるを得ません。いっそ千葉を引き払って、住まいを青梅に移そうかと思ったくらいです。

専務の高山氏は、戦前から青梅で洋品店を開業していた大の努力家でしたが、例の企業整備に引っかかって、商売の方を廃業し、ミシン設備を持つ人達が合同して、青梅工業小組合を設け、その構成員の一人となって、軍需被服の縫製業に携わっていた人です。この高山氏とは、終戦後青梅町で催をされた、或る会合の席上で初めて逢い、その人柄に感心した私が、酒の席で、私の持っている工業権（実績）を、この土地で育ててみる気はないか？と切出したのが縁となって、その翌朝にはもう会社設立の具体話が、進行するというスピードぶりでした。

そんな訳で、青梅の遊休機屋工場も、楽々と手に入り、青梅の土地の人四

人、東京で私の友人四人を選定して、設立発起人として会社は誕生し、直ちに配給を受けて、営業を開始したものです。

社長である私は東京の組合の仕事がありますので、工場の方の実務は、一切専務の高山氏に任せてあったのですが、この高山専務の仕事熱心は驚くばかり、文字通り、朝早くから夜更けまで、町中を東奔西走して、工員集めから、機械の据え付けまで自分でやってのけ、大工仕事まで器用にやるのには、ホトホト感心しました。

そんな訳で、会社の設立認可になるまでの、準備期間中に、既に会社は相当の利益を上げる早業を演じて、期末の株主配当は、莫大なものでした。

私は不在社長の様なものでしたが、私の指令はよく守られて、会社の内容はぐんぐんと充実し、資本力も数倍に達する製造会社に育て上げた、功績者は勿論高山専務であったのです。

然し、この会社は、朝鮮事変を境として不調に傾き、現在では輸出向けの下請け工場として余命を保ち、モダンな縫製工場で、活動は続けていますが、業績の方はあまり芳しくありません。数年前私は社長の座を高山氏に譲って、株主として関係しておりますが、他日またチャンスを得て、この会社が発展してくれる事を、心ひそかに念じております。

終戦当時３　出征していた元店員の桑崎君の来訪

昭和二十年という年は、戦後の復興と、外地から引き揚げて来る同胞や、帰還軍人の受け入れで、国内はごった返す騒ぎでした。

復興といっても、盛り場の闇市か、駅の周辺地区が、賑やかになった位のもので、都心地の商店街や問屋街は、焼跡に瓦礫が積み上げられたままで、雑草は伸び放大の殺風景なものでした。神田も岩本町周辺の復興は最も遅く、幸運にも焼け残った業者の店では、近文商店と伊東兵商店位のものでした。

現在十六番地大門通りに店舗を構えておられる、山三繊維の社長左藤要二氏は、前記伊東兵氏とは、叔父甥の間柄で、事業の面でも協同経営者でしたが、岩本町の復興の為には、土地の世話から、有力商社の受け入れ斡旋にも、力を尽くされた功績者の一人であります。この左藤氏は無類の交際家

で、顔も広ければ、多芸多趣味な点では、業界のナンバーワンと称しても過言ではありません。私も左藤氏の心憎いばかりお上手な小唄に聞き惚れて、後でこっそりやってみましたが、素質がないので、物になりませんでした。

話は代りますが、私の店で働いてくれた店員の内で、最も優秀組の三人が、出征したまま、音信不通になっていたのが、常に私の脳裏を離れず、気掛かりになっていました。四月末の或る日、千葉鎌ケ谷の疎開先へ、ひょっこりと、桑崎家吉君が尋ねて来たのには驚きました。

彼は和泉屋商店創立の時から、私達夫婦と苦楽を共にした、第一号店員ですが、昭和十五年十二月、現役兵として支那事変に従軍し、大陸の戦野で苦労して、十八年に招集解除となって帰還したのですが、半年後に再び招集を受けて、仏印方面へ出征したまま、生死不明になっていたのです。その桑崎君が突然私の前に元気な姿を見せてくれたのです。彼の実家は千葉県野田在の川間村ですが、聞けば両親や兄弟も健在だったそうで、復員して実家には二日寝たきりで、旧主の私を訪ねて来たのであります。

その翌日から彼は私の家で、畑仕事等を手伝って暮らしていましたが、私も彼に就職させるか、商売でもさせて、生活の道を与えたいと、いろいろ心配して、本人にもその気持ちを聞いてみますと、何か商売をやりたいと云うのです。然し、売り買いする様な物資は、全て統制品で、自由になる物ではなし、商売と云ったら、闇屋ぐらいのものしかありません。

本人は勤め人になる気はないと云うのですから、どうも仕方がありません。毎日畑へ出て素人百姓をしていました。ところが、或る日、桑崎君が庭先に散らばっているボタンを拾い集めたものです。このボタンは私の家が疎開の時に、運んで来て納屋に積み込んであった物を、ネズミ共が、石油の木箱を喰い荒らして、中のボタンを庭先まで持ち出したものです。その夜私が帰宅すると、桑崎君がいきなりボタンは統制品ですか？と聞きますので、早速調べて見ると、ボタンは雑品として、統制から除外されている上に、製造工場が殆ど焼けてしまって、製品不足から、非常な高値で取引されている事が分かりました。桑崎君は、自分にこのボタンを売らしてくれと云うのです。

戦前の営業中に溜まった半端物や、見切り品で、量は石油箱に二十杯もあ

って、始末に困っていた品物ですから、私は喜んで彼にその処分を任せ、昔の同業者で相当手持ちしている人もあるだろうから、紹介してあげると約束して、彼を励ましました。

彼は全部で幾らで譲って頂けますか？と聞くので、お前の厚生資金になるのなら、タダであげてもよいが、売れた時に幾らかでも歩合を呉れれば良いからと答えておきました。

彼は自分で商売を始めるのに、旧主人の家に厄介になっているのは、心苦しいからと云って、川間村の実家へ帰る事になりました。私は餞別の意味も込めて、古自転車や古建具、その他こまごました物を与えて、彼の前途を力づけてやりました。彼は古いリヤカーにボタンや諸道具を積んで、三十キロもある悪道路を、川間村の実家へ帰って行きました。それから暫くの間姿を見せなかったので、私も内心（うまく行かなかったのだろう）と心掛かりにしていました。すると、二十二年も暮れに迫った或る寒い日の夜、私達が寝に就いた頃、桑崎君が訪ねて来ました。

終戦後１　和泉屋元店員第1号店員の桑埼君が釦売上を持参

野田在の川間村の実家に引き揚げたきりで、消息のなかった桑崎君が、ひょっこり訪ねて来ての話。私達夫婦は、囲炉裏に火を焚いて、桑崎君からいろいろと、その後の話を聞きながら、とうとう夜明かししてしまったものです。彼がぽつりぽつり語る所によると、私が譲ってやった、ボタンを詰めた木箱を、リヤカーに積んで、実家まで運び、その翌日から物置小屋を借りて、自分一人が住める位に改造して、ここを仕事場にして、早速古ボタンの整理に着手し、幾日もかかって、ボタンの選別やら、洗って磨きを掛ける等、苦心して整理の出来た品物を、自転車に積んで、東京の盛り場に出ている、露天商とか洋服屋、洋装店を廻って売り込みをやったと云う事です。

なかなか苦しい商売だったらしく、彼ほどの努力家が、しみじみと語った苦心談からも、良く窺い知る事が出来ました。然し彼一流の頑張りで、無我夢中で働いた結果、どうやら商売の道もついて、どうにか前途の見通しもつ

きかけたところで、旧主人である私にお礼の報告にやって来たと云う次第でした。

ところが、世の中には悪い奴は尽きないもので、虫も殺さな様な正直顔の婆さんに、マンマと一杯食わされたと、桑崎君は悔しそうに語るのでした。

ボタンを売って利益も出たので、何よりも先に旧ご主人に御礼するのが礼儀と考えた彼は、物資不足の中を、白米や餅、野菜などをリックサックに一杯詰めて、私の家を訪ねて来る途中、柏駅のホームで、船橋行きの汽車を待っている時、待合所で隣逢わせた正直そうな顔をした、買い出し部隊の婆さんを、うっかり信用して、大切なリックサックの番を頼んで、一寸席を離れた隙に、この荷物を持ち逃げされたと云うのです。彼は悔しいやら、情けないやらで、柏駅、船橋駅を行ったり来たりして、張り込んで見たが、遂に持ち\逃げ婆さんを捕らえる事は出来なかったのです。これで夜中近くになって彼が、私の家を訪ねて来た理由が分かって、私達夫婦も桑崎君の親切心が解り、彼の温かい気持ちに感謝の意を込めて、慰めの言葉をかけてやりました。すると今度は、彼は腹巻きを解いて中から金を取り出し、これに、手帳に書き入れた明細書を示しながら、「これがボタンを売って儲けた金の内金ですから、どうぞ収めて下さい。」と差し出すではありませんか。見れば数十枚の百円札が、私の目の前にあるのです。私もさすがに驚きの目で彼を見守るばかりでした。新円に切り替えになったばかりで、当時の百円札は大金です。それが数十枚差し出されたのですから、私も驚かざるを得ませんでした。私達夫婦も彼の誠意を嬉しく受けました。

桑崎君はその後も、ボタンの売上げが溜まると、“元金ですから”と称して、私の所へ届けて来るので、いつもながらの彼の誠実心には感心させられました。当時彼から届けられる金が、どの位私達家族の生活の助けになったか知れません。

桑崎君も無資本から出発して、例のボタンの販売で、着々と土台を造り、遂にはボタン製造工場を設けて、製造卸の段階にまで成功したのですが、戦後の産業界が段々と立ち直り、専門のボタン工場が復活する様になると、さっさとボタン工場に見切りをつけてしまいました。そして浅草公園地内に、

露天商の権利を買って、下駄屋さんに早替わりしました。続いて古物商の鑑札を取って、古着商に転じ、彼一流の馬力で、段々と新品の衣類を扱う様になりました。原反を買って裁断し、自家製造で販売に出すやり方で、瞬く間に莫大な利益を上げたのも、彼ならではの感が深いのです。また統制解除と共に、古着の方を断念して、婦人子供服の卸に転向して、神田に進出して大和商会を創立しました。

露天商の方は内店に替えて、弟に経営を任せて、営業の一貫性を持たせた、彼独特の商才は実に見上げたもので、私の店から出た店員中の優等生で、私もいささか鼻を高くしている次第です。今後益々飛躍して、業界の第一流に大成してくれる事を祈って止みません。

桑崎君に次ぐ第二号店員だった、針ケ谷二郎君は、招集で中支へ派遣されたが、昭和二十二年に復員し、郷里埼玉県羽生に帰り父君と共に、被服の製造卸に入り、手堅い経営で年間一億に近い商売をしていると聞いています。

第三号の店員であった、鈴木正吉君は、二十二年中支から復員したが、家庭事情に同情して、彼を組合の業務部に就職させて、浅草国際劇場前に借りてあった店舗の留守番を兼ねて、彼の母妹らと一緒に住まわせておいたところ、数ヶ月後に原因不明のまま、自宅で青酸カリ自殺を遂げてしまいました。知らせを受けて駆けつけた私も、腹の立つような残念さを覚えました。彼は内向性の性格なので、自分の気持ちをはっきり云えないで、どうやら失恋の結果が、自殺に追いやったのではないかと思われます。

終戦後２　地主からの立ち退き要求で自分の土地に住居を自作する

敗戦という哀しむべき結果とはなったが、とにかくも、終戦になって生命の安全が保証されると、人間というものは、いろいろの希望や、よく云えば理想と云うやつが生まれて来るものです。

終戦当時は衣食住の全てが極度に困窮していたのですが、就中、住居の問題は、例外なしに最も大きな困難の一つでした。その筈です。度重なる敵機の猛爆で、東京都内だけでも、目ぼしい所は、完全に灰にされてしまっているのですから、住むに家なき人達が、無数にあった事は当然と云わなければ

なりません。

私が千葉鎌ケ谷の疎開先に買ってあった家も、契約の時は解体して移転するという条件だったのですが、あの様な戦争の激化で、遂に契約通りの解体移転も出来ずに、そのまま住みついてしまった様な訳です。

いよいよ終戦となった途端に、地主から立ち退きを要求されたのも、やむを得ない事でした。そこで、私も自分の買ってあった土地へ、自分の手で住いを建てる決心をして、日曜日毎に自分の山へ入って行って、杉丸太を伐り出し、苦心惨憺で、間口三間、奥行二間の掘っ建て小屋を造りました。屋根は茅で葺き、四方に下屋を下して、押し入れや玄関、台所まで造り、どうにか人間の住める様な形を整えるのには、数ヶ月を要しました。釘一本買うにも不自由な時代に、よくもあれだけの小屋が自力で出来たものだと、我ながら感心したものです。畳や建具は古い家の方から移せばよいのですから簡単でした。

松林に囲まれた畑の中の一軒家（掘っ建て小屋）が、ポツンと建っている風景も、閑静この上なしですが、閑静過ぎて殺風景なものでした。何しろ隣の家迄百米もあり、駅前の人家が立ち並ぶ所までは、三百米はたっぷりあるのですから、真に心細い様な一軒家でした。

さて、急造の新宅に移転して見て一番困ったのは、電灯のない事と水のない事です。

いくら器用でも電灯工事まで自分でやる訳にもいかず、井戸を掘るにしても高台の事で、五十尺以上掘り下げなくては、水は出て来ません。到底素人の手には負えません。本職に頼んでみても、資材が手に入らないから駄目だと、断られる始末です。そこで、仕方なく百米も離れた所に、湧き水があるのを知っていたので、数ヶ月間は原始的に湧き水を汲んできては、使用して\暮らしました。そんな訳ですから、数ヶ月後になって、やっと井戸掘り人夫を雇って来て、五十尺の堀井戸が完成し、清麗な水を汲み上げた時の喜びは非常なものでした。この味は水で苦労した者でなければ、分かって貰えない感激でしょう。ところが、この井戸も資材不足時代の作品ですから、当然完全な物ではありません。六月の入梅時になると、内側の赤土が崩れ落ちる

と云う騒ぎで、又数日間は、百米離れた湧き水を汲んで来て、煮炊きをするといった具合でした。

私は組合役員という公職があります。戦後の多忙な組合の仕事に追われながら、住いの方の心配で気をもむ日々の心遣いは、決して生易しいものではなかったのですが、それにも増して日常生活に、悪戦苦闘している妻の心情を思うと、不憫で仕方がありませんでした。

井戸は釣辺で汲み上げる、田舎式の物でしたが、私が古い手押しポンプを見つけて来て、据え付け、景気よく水を汲み出した時は、天にも昇る様な気持ちを味わいました。

自分の土地に自分で家を建て、畑も山も所有し、あの何もかにも不足の時に、燃料には不自由せず、畑仕事に馴れた妻が作る野菜も豊作で、狭いながらも楽しい我が家とばかり、幸福な生活が続きました。

しかし、一歩外に出れば、社会の実相は実に暗澹たるもので、インフレの嵐は巷に吹きまくり、賃金の値上がりから、物価の騰貴、収入の増加が却って生活を苦しくするという変則で、金より物が有り難い時代でした。その尊重される物に厳重な統制の枠がはめられているのですから、物資の闇が横行し、経済警察の取締で、随所で闇屋と警察のシーソーゲームが展開されるという状態でした。

二十三年暮れになって、私は奮発して家の建築を思い立ち、役場へは手持資材ありという事で、建築許可を取りました。約三十坪の建物を（畳建具なし）二十万円で大工に請け負わせました。数ヶ月後に完成したので、畳、建具を注文した時の値段が、畳一枚千八百円、建具一本二千円前後という高値で、総額にして約三十万円でしたから、家の建築費四十パーセント、建具六十パーセントと当時のインフレ状態を如実に物語る建築でした。それでも自力で自分の家を建てるという事は楽しいものでした。

終戦後３　夜中に日本刀を下げた四人組の強盗が侵入

新築の家は未だ完成していないので、掘建て小屋に住んでいる或る八月の夜の出来事です。私は組合の用務で、三四日出張して帰って来て、疲れた体

を休めて、ぐっすり寝込んでいますと、夜中の十二時頃でした。裸電球一個が、蚊帳を吊った上に薄暗く灯っています。すると突然電球がパンと音をたてて砕ける異様な音に、フトと目を覚まして当りを見回すと、すぐ枕元に大男が突っ立っているではありませんか。しかも、廊下の方から別の男が、懐中電灯で私の方を照らしているのです。その光で枕元に立っている男を見ますと、ピカピカする抜の日本刀をさげています。そればかりか、廊下の方にいる懐中電灯の男が、片手にピストルの様な物を持っているのです。三人組の押し込みに襲われたのです。その時は既に家内や子供達も目を覚ましていて、小さな子供が泣き出しました。家内は割れた電球が蚊帳の上にあるのに気づくと、蚊帳を外して丸めて部屋の隅に片付けました。私は恐る恐る寝床から半身を起こして、「君たちは何の用があって来たのだ」と詰問すると、一人の男がしやがれた、やくざ口調で、「騒ぐな、静かにしろ、俺たちは旅の者だ、明日は何処とも知れねえ旅の空。おめえさんの所へ、目星をつけて来たからにゃ、これも因果と諦めて、有り金残らず出してくれえ、へたあ騒ぐと命がねいぞ。外には大勢仲間が待っているんだ。」と、まるで映画に来る悪の股旅者の様な台詞で、脅迫して来るのです。抜身の刀で私の首筋をピタピタと叩くのですから、いい気持ちではありません。六尺近い細身の男ですが、大して強そうでもなく、持っている刀の重みで、切っ先が段々下へ垂れてしまって、半身を起こしている私の目の前に刀の柄が来ると、その度に刀身を持ち上げる仕草を、幾度も繰り返しながら、例の芝居がかりの台詞を並べるのですから、私も咄嗟の間に肚が座りました。隙を見て男の刀を奪い取って、一泡ふかせてやろうと、なるべくこちらの被害を、最小限度に食い止める算段をして、二人組と対談を試みたのです。

「お前さん等は旅人だというけれど、私も戦争疎開者で、大勢の子供を抱えて、やっと生活して居る始末だ、余分の金等ある訳がない。君たちの見込み違いじゃないかね。」と私が云うと、懐中電灯を持った、兄貴株らしい男が、「俺たちも悪い事だと思うが、一寸やばい事があって、高飛びするんだ。ぐづぐづ云わずに有るだけの金を出してくんねい。」と折れて出て来たので、私は立ち上がって、掛かっていた洋服のポケットから財布を出して、

中身を全部（約四千円）を渡してやると、「まだ他に有るだろう」と食い下がってくるので、ここが芝居のうちどころと、「あるにはあるが、それをやると明日から喰うに困るんだ。」と真顔で云うと、「お前さんに同情してたんじゃ、こんな商売は出来ないや。ごたくを云わずに全部出せ。」と凄んで来るので、仕方なく別室から手提げ金庫を持って来て、彼らの前に置きますと、懐中電灯を持った方の男が、早速蓋を開けて、中の金を掴み出しました。私がその男の様子を窺うと、身長五尺位の若い小男で、最初私が拳銃と見たのは、刃渡り九寸位の短刀でした。手提げ金庫の中には六千円はあったでしょう。それを全部取ってしまうと、今度は、「お前さんの所は、金が山ほどあると聞いて来た。まだ何処かに隠してあるはずだ。」と云うので、私も「何処で聞いてきたか、金はまだ他にあるにはあるが、東京の銀行に預けてある。嘘だと思うなら、何処でも勝手に探して見ろ。」と突っ放すと、小男の方が長身の男に、「お前このおやじを見張っていろ、動いたらやっつけてしまえ」と命令しておいて、外から又一人別の男を呼び込んで、二人で家探しを始めたが、どうしても金が出て来ないので、また私の前に現れて、「お前さんの家にはでかい金庫があるはずだ。何処にある」と聞きました。

終戦後４　　よほど内部情報に通じた犯人像が推測された

強盗の一人に「お前さんの家には、でかい金庫があるはずだ。何処にあるのかえ」と詰め寄られた時には、私もしまったと思った。これは余程家の事情を知った奴が手引きをしているなと直感しました。

すると側に居た妻が、いとも落ち着き払った調子で、「うちには金庫なんて有りませんが、鉄の箱ならそこにありますよ」と彼らの居る後ろの方を指さしたものです。

この鋼鉄製の書庫は、縦横が三尺奥行き一尺五寸の二重扉で、なるほど、金庫と云えば云えなくもないが、割合頑丈なものでした。私は貴重品は全てこの中に、保管して置いたのですが、折しもこの時は、家の新築工事代金の支払いの為に、十五万円程がこの中に入れてあったのです。

強盗の一人が、『おやじ、鍵を出せ』と迫るので、「私はこの金庫に鍵は

かけてない、引っ越しの時に鍵は無くしてしまった。」と云うと、『嘘をつくと承知しねえぞ、鍵の無い金庫をどうして開けるんだ。』と、至極尤もな言い分です。私は言い逃れに、「鍵は無くても文字盤を回せば、開かなくなるんだ。開け方を忘れてしまった。多分家内が知っているだろう。」と云うと、今度は家内に向かって、金庫を開けろと迫りました。

妻も仕方なしに、片腕に子供を抱いて金庫に近づき、文字盤を回し始めるのですが、強盗等が早くしろとせっつく中を、妻は悠々たるもので、「この金庫は疎開の時に、具合が悪くなってしまったの、今開けるから待ってなさいよ。」と、なるべく手間取って、夜明けを待つ作戦に出たものです。

そのうちに妻が向きを変えて、廊下の方へ出ようとすると、驚いた強盗の一人が、『おい、何処へ行くんだ。変な真似すると、バラすぞ』と、刀を突きつけて身構えをしたものです。しかし、妻は平気な顔をして、「ハバカリへ行くんですよ。」とばかり、落ち着き払って廊下の方へ出て行きました。暫くして部屋へ戻って来た妻は、もうこうなっては仕方がないと、思ったか、簡単に金庫の扉を開けてしまいました。

強盗共は早速金庫の中を、引っ掻き回しました。十五万円の現金は右側の引出しに入っており、鍵が掛かっております。左側の引出しには、時計とか、写真機と一緒に、右側の引出しの鍵も入っていたのですが、幸いな事にこの鍵が彼らに発見されずに済んだのは、天佑だったと思います。現金十五万円の入った引出しを開けろと、しつこく迫る彼らを、妻は軽くあしらって、「主人がさっき申したように、この引出しの鍵は、疎開して来る時に無くしてしまって、うちでも困っているんですよ。中には子供達の学校の成績表（通信簿）や書類等が一杯入っているんです。」と、さも困った様な顔をして見せますと、彼らもやっとそれを本気に受け取ったらしく、『金が入っているんじゃなかろうな、俺たちを騙すと承知しねえぞ』と云うのに対して、妻は、「嘘だと思ったら、あなたの持っている刀で壊して開けてごらんなさいよ。」と、キッパリ言い切ると、さすがにねばった強盗達も、やっと諦めがついたらしく、『夜中に騒がせて済まなかったな。俺達はもう二度と来ねえから安心しな。』と、捨て台詞を残して引き揚げて行きました。

家族八人に怪我一つ出さず、大金十五万円も無事で済みました。

そろそろ夏の夜明けで、戸の隙間から、明るみが差し込んで来る頃、引き揚げて行く強盗団の後姿を見ると、彼らは四人組だった事が分かりました。

私は急いで外へ飛び出すと、自転車を走らせて、二キロもある村の駐在所へ急ぎました。まだ、寝床にいる巡査を起して、事件の内容を告げると、巡査は直ぐに船橋の警察本署に電話を入れておいて、私と一緒に家まで急行しました。そして賊団の荒し回った現場保存の処置をしておいてから、私達夫婦からいろいろ実情を聞き出すのですが、かれこれ三時間近くもねばる相手と対面していながら、さて、彼らの人相とか、着衣等はどうもはっきりしないのです。私と妻の陳述に食い違いが多いのもその証拠です。すると、傍らにいた長女の賀恵子（当時十才）が、「私よく見ていたので、大抵の事覚えているは」と云うので、私達夫婦は、びっくりしましたが、お巡りさんは、大人より子供の方がしっかりしていると云う様な顔つきでした。

終戦後５　10歳の長女が決め手の目撃証言

四人組押し込み強盗の人相から、年配、着衣まで、一々覚えていて、これを駐在所から駆けつけたお巡りさんに、報告する長女の沈着ぶりには、お巡りさんも感服の体でしたが、私達夫婦も全く驚き入りました。そして、長女は「あの人達は、家の普請の時に地形をやりに来た土方連中だわ」と断言するのです。後で判明したのですが、長女の明察通り、この四人組は、隣村から農家の若者四五人が、土方の手伝いに来ていて、その中の奴らが組んで、私の家を襲ったのです。報告を聞いたお巡りさんは、早速自転車を飛ばして、隣村に急行しました。そして、容疑者の一人の行動を探った結果、捜査線上に四人組の姿が浮かび、逮捕は時の問題という所まで進みました。

ところが、当時の治安ときたら、最悪の状態にあったので、犯人逮捕もナカナカ容易な業ではないのです。警察側では、私服刑事を総動員して、村々一帯に亘って、聞き込み捜査に乗り出し、日頃身持ちの悪い若者は、ドシドシ警察に呼んで、取り調べを開始しました。丁度その頃は農家の何処でも、米の闇売りを盛んにやっていた時ですから、私服警官の訪問は、真に有り難

くない事で、何処の村でもすっかり怯えきってしまいました。そして、強盗犯人の密告者が、続出するという珍現象を生みました。

その結果警察側では、事件発生後一週間にして、高飛び寸前の四人組犯人を逮捕しました。当時の新聞は、“農村を騒がした四人組強盗団逮捕”と、デカデカと書いたものです。そんな訳で事件は落着した筈ですが、事実は案外左に非ず、その後が大変でした。

或る夜遅くなって、数名の未知の人達が、私に面会を求めて来ました。会って見ると驚きました。強盗犯人の親兄弟と弁護士という顔ぶれです。而も彼らの云い分が余りにも不敵で、図ずうしいのには、さすがの私も、タジタジの体で、二の句がつげない始末でした。彼らのいい分はこうです。『近く松戸の裁判所で公判が開かれるが、その時は被告側に有利な証言をして欲しい。又、担当の検事宛に、被告等の助命の嘆願書を出して貰いたい』という虫のよいものでした。犯人側の身内の者が、弁護士を同伴して、人もあろうに、強盗に押し入った被害者の家に、押し掛けて来る強引さは、到底常識では判断されないものでしょう。

彼らの説明によると、主犯の男は、元村長をした豪農の長男坊であり、他の三人も日頃は真面目な青年達で、決して悪気でやったのではない。強盗をやった動機も、村の青年会の集まりで、二十人程の若者が、肝試しの様なつもりで計画したが、いざ実行に移す段になったら、四人だけになってしまった。この四人が他の奴らの鼻をあかしてやるつもりで、押し込みを決行した、という次第です。

冗談半分で抜き身の日本刀で、強盗に押し入られたのでは、たまったものではありません。しかし、強奪された金品は、無事戻った事ではあり、前途ある若者達の将来を考えて、遂に情にもろい私は彼らを許してやる気になりました。

そして、検事宛に減刑嘆願書も出し、公判廷では被告に有利な証言もしてやりました。しかし、法律というものは、そんな甘いものではありません。凶器所持の強盗ですから、第一審では懲役七年の判決があり、高裁まで行って懲役五年と決定したのは、事件から二年後でした。彼ら若者の親達も、大

変な金を掛けて裏面運動をしたらしいが、子供の教育を疎かにした報いという他ありません。

昭和24年（1949年）までの回想録はここで終了

早川英俊の回想録
著者：早川英俊
制作：早川俊一・早川廣行
発行：早川廣行
連絡：h-hayakawa@denga.jp
2020年8月15日改定第1版発行